川尻船着場跡

- 加勢川河川改修事業に伴う埋蔵文化財の調査 -

2013.3

熊本県教育委員会

川尻船着場跡

- 熊本県熊本市南区川尻地内所在の遺跡 -

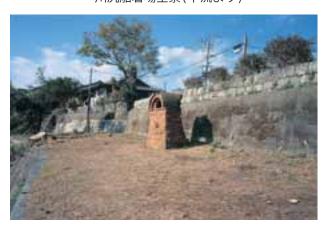


2013.3

熊本県教育委員会



川尻船着場全景(下流より)



煉瓦構造物トイレ現況



平成 19 年度調査 川尻船着場最下流



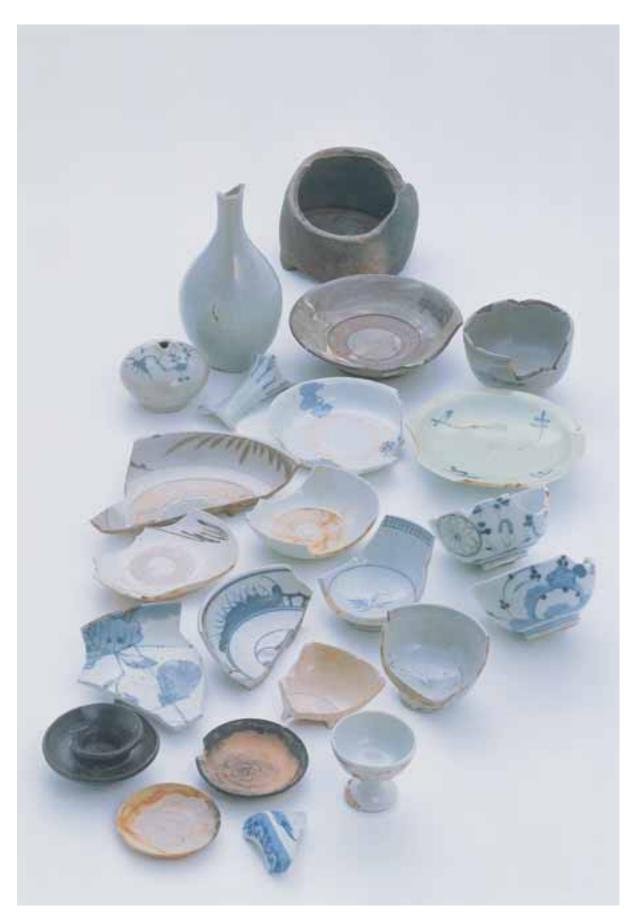
平成 19 年度調査 御船手渡し



平成 17 年度調査 川尻船着場石段現況



平成 18 年度調査 土留め材 (木杭・竹) 出土状況



川尻船着場 平成 18 年度出土遺物



川尻船着場 - 平成 20 年度調査 - 木 簡



御船手渡し - 平成 19 年度調査 - 木 簡

序文

本書は、加勢川河川改修事業に伴い埋蔵文化財発掘調査を実施した、熊本市南区川尻地区に所在する「川尻船着場跡」の発掘調査報告書です。

川尻船着場跡は、緑川水系の加勢川下流域に位置し、中世から良好な河港として物資の流通や対外的に重要な貿易港として、中国明代の『図書篇』に為牙子世六(八代)、為阿麻国撤(天草)、為昏陀(宇土)、為一国撤介烏刺(軍浦)、為達加什(高瀬)とともに「開懐世利(川尻)」と記され中国にも知られた有名な港として繁栄した様子が窺えます。

天正 16 (1588) 年に肥後半国の大名として入国した加藤清正によって河口整備が始められ、天正 17(1589) 年 10 月の小西行長領の天草五人衆の一揆討滅や、天正 20(1592) 年の朝鮮出兵の際に利用されており、この頃、河港としての整備が進められたことが推測されます。

また、加藤期の当該地の利用を示す史料は少ないが、今回の調査において「船着場」の構築時期を類推することが可能となる貴重な「木簡」が出土しました。

本書では平成 16 ~ 20 年度に実施した川尻船着場跡・御船手渡しの発掘調査の成果を整理・報告したものです。

本書が学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深め、ひいては教育・ 文化の向上の一助としてご活用いただけると幸いです。

最後に、埋蔵文化財発掘調査にご理解、ご協力をいただいた熊本市の皆様をはじめ、 熊本市教育委員会、事業主体である国土交通省熊本河川国道事務所に対し、心より感謝 申し上げます。

平成 25 年 3 月 31 日

熊本県教育長 田 崎 龍 一

例 言

- 1 本書は、熊本市南区川尻地区に所在する川尻船着場跡の調査報告書である。
- 2 調査は加勢川河川改修事業に伴う事前発掘調査として、国土交通省から依頼を受けて平成 16 ~ 20 年度に熊本県教育庁文化課が実施した。
- 3 遺構の写真撮影は、永井孝宏が担当した。
- 4 遺構の実測は、永井が担当した。
- 5 遺物の整理は、熊本県文化財資料室で行った。
- 6 遺物の実測は、村﨑孝宏、戸田紀美子、藤本香織が担当し、陶磁器類を株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 7 遺構、遺物の製図は、株式会社埋蔵文化財サポートシステムに委託した。
- 8 遺物の写真撮影は、株式会社写測エンジニアに委託した。
- 9 本書の執筆、編集は村崎が担当し、戸田、藤本が補助した。
- 10 本書に掲載した資料は、熊本県文化財資料室で保管している。

凡例

- 1 本書で使用している方位は、座標軸を基準とした北を示している。
- 2 報告書に掲載した実測図は、以下の縮尺で作成した。

平成 16 年度・土坑 S=1/20、トレンチ 1/40、1/50、1/60、1/80、1/100

裏込め石 1/40、石積み 1/40、船繋ぎ石 1/30

平成 17 年度・トレンチ 1/20、1/40、1/50、1/80、1/100

平成 18 年度・トレンチ 1/60 石段部 1/60 煉瓦構造物 1/20、1/40、1/50、1/60

平成 19 年度·最下流石段 1/80 汲水 1/80

平成 20 年度・トレンチ 1/80 石段 1/200

御船手渡し・トレンチ 1/50、1/60、1/125

- 3 土層及び陶磁器類の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修「新版 標準土色帖」(財団法人 日本色彩研究所;2004) に準拠した。
- 4 写真の縮尺は任意である。
- 5 遺物の実測は一部を除き原則として原寸大で行い、報告書に掲載した実測図の縮尺は挿図ごとにスケールを示した。陶磁器、土師器 1/3 (一部を 1/5) とした。
- 6 本報告において遺構の種別を平成16年度では、SK:土坑とし、平成20年度では、遺構をSとして表記した。

本 文 目 次

序文
例言・凡例
第1章 調査の概要
第1節 調査に至る経緯 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・1
第2節 調査の方法と経過及び調査の組織 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・2
1.調査の方法
2.調査の経過
3.調査の組織
第Ⅱ章 遺跡の概要
第 1 節 地理的環境
第 2 節 歴史的環境 · · · · · · · · · · · · · · · · 13
第3節 文献史料から見た川尻 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第Ⅲ章 調査の成果
第1節 平成16年度の調査21
1. 高水敷堤防トレンチ ····· 21
2. 高水敷トレンチ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 27
3. 石段部トレンチ31
4. 河床部調査 · · · · · · · · · · · · 33
5. 河床部トレンチ 33
6. 船繋ぎ石トレンチ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 36
7. 橋台部トレンチ ····· 37
8. 陸閘部トレンチ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・37
第2節 平成17年度の調査60
1. 石段部トレンチ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・60
2. 河床部トレンチ 64
3. 河床調査 · · · · · · · · · · · · 65
4. 根石調査 · · · · · · · · · · 65
第3節 平成18年度の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
1. 石段部調査 · · · · · · · · · · · · 67
2. 石段部トレンチ 67
3. 河床部トレンチ ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 72
4. 煉瓦構造物 · · · · · · · · · · · · · · · · · · ·
第 4 節 平成 19 年度の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・
第 5 節 平成 20 年度の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95 ~ 96
1. 船着場の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・ 95 ~ 96
第6節 平成19・21年度の調査 ・・・・・・・・・・・・・・・・・・106
1. 御船手渡しの調査 · · · · · · · · 106
第Ⅳ章 総括 · · · · · · · · 125
参考文献
写真図版
抄録

挿図目次

第1図	川尻船着場周辺位置図 (1/5000)	平成 17 年	连
第2図	川尻船着場周辺遺跡分布図(1/20000)	第 35 図	平成 17 年度 石段平面・立面実測図
第3図	平成 16~18 年度発掘調査 トレンチ位置図)1 , 00 III	(1/100)
W 0 D	(1/1500)	第 36 図	石段部~河床部トレンチ土層断面図 (1/80)
平成 16 年		第 37 図	石段部礫実測図 (1/20)
第4図	平成 16 年度調査トレンチ位置図	第 38 図	石段部土留め材実測図 (1/20)
第5図	高水敷堤防~河床部トレンチ±層断面図	第 39 図	石段部粗朶実測図(1/20)
)14 ° L	(1/100)	第 40 図	石段部木杭実測図(1/50)
第6図	高水敷堤防トレンチ土層断面図 (1/50)	第 41 図	河床部トレンチ土層断面実測図 (1/40)
第7図	高水敷堤防石積実測図(1/40)	第 42 図	河床部杭・竹類実測図 (1/50)-1-
第8図	高水敷トレンチ土層断面図 (1/60)	第 43 図	河床部杭・竹類実測図 (1/50)-2-
第9図	高水敷トレンチ実測図 (1/80)	第 44 図	河床部捨石実測図 (1/50)
第 10 図	高水敷 SK-3 遺構実測図 (1/20)	第 45 図	平成 17 年度 調査出土遺物実測図
第 11 図	石段部トレンチ土層断面図 (1/50)	平成 18 年	度
第 12 図	石段部裏込め石実測図 (1/40)	第 46 図	平成18年度 石段平面・立面実測図
第13図	石段部実測図 - 根石・一段目 -(1/50)		(1/200)
第 14 図	石段部根石実測図 (1/40)	第 47 図	石段部~河床部トレンチ土層断面図 (1/60)
第 15 図	石段部木杭実測図 (1/50)	第 48 図	石段部~河床部木・杭実測図 (1/60)
第 16 図	石段部胴木実測図 (1/40)	第 49 図	煉瓦構造物実測図 (1/60)
第 17 図	河床部捨石実測図 (1/60)	第 50 図	煉瓦構造物內部土層断面実測図 (1/40)
第 18 図	河床部トレンチ土層実測図 (1/60)	第 51 図	煉瓦構造物上層平面・断面実測図 (1/50)
第 19 図	河床部基礎材実測図 (1/50)	第 52 図	煉瓦構造物內部下層実測図 (1/50)
第 20 図	船繋ぎ石実測図 (1/30)	第 53 図	凝灰岩実測図 (1/40)
第21図	橋台部トレンチ実測図 (1/80)	第 54 図	上位便槽実測図 (1/20)
第 22 図	陸閘部トレンチ実測図 (1/60)	第 55 図	煉瓦構造物下位の石積実測図 (1/20)
第 23 図	高水敷 SK-1 (No. 1) ・ SK-3 (No. 2 \sim 13)	第 56 図	平成 18 年度調査 出土遺物実測図 -1-
	出土遺物実測図	第 57 図	平成 18 年度調査 出土遺物実測図 -2-
第 24 図	高水敷トレンチ出土遺物実測図	第 58 図	平成 18 年度調査 出土遺物実測図 -3-
第 25 図	石段部 SK-2 出土遺物実測図	第 59 図	平成 18 年度調査 出土遺物実測図 -4-
第 26 図	石段部トレンチ出土遺物実測図	第60図	平成 18 年度調査 出土遺物実測図 -5-
第 27 図	河床部トレンチ出土遺物実測図 -1-	平成 19 年	度
第 28 図	河床部トレンチ出土遺物実測図 -2-	第61図	船着場周辺遺構図 (1/200)
第 29 図	河床部トレンチ出土遺物実測図 -3-	第62図	平成 19 年度 最下流石段平面•立面実測図
第 30 図	河床部トレンチ出土遺物実測図 -4-		(1/80)
第 31 図	河床部トレンチ出土遺物実測図 -5-	第63図	最下流石敷土層断面図 (1/80)
第 32 図	河床部トレンチ出土遺物実測図 -6-	第64図	汲水実測図 (1/80)-1-
第 33 図	河床部トレンチ出土遺物実測図 -7-	第65図	汲水実測図 (1/80)-2-
第 34 図	河床部トレンチ出土遺物実測図 -8-	第66図	汲水実測図 (1/80)-3-

第67図	汲水実測図 (1/80)-4-	第 79 図	平成 19 年度 トレンチ・21 年度
第 68 図	汲水実測図 (1/80)-5-		石畳実測図 (1/125)
第 69 図	汲水実測図 (1/80)-6-	第80図	御船手渡し トレンチ土層断面図 (1/50)
平成 20 年	度	第81図	御船手渡し S-1 実測図 (1/60)
第 70 図	平成20年度 石段平面・立面実測図	第82図	御船手渡し S-2 実測図 (1/60)
	(1/200)	第83図	御船手渡し S-3 実測図 (1/60)
第71図	下流側トレンチ1平面・立面・断面実測図	第84図	御船手渡し出土遺物実測図 -1-
	(1/80)	第 85 図	御船手渡し出土遺物実測図 -2-
第72図	トレンチ 1 土層断面図 (1/80)	第86図	御船手渡し出土遺物実測図 -3-
第73図	トレンチ 2 平面・断面図 (1/80)	第87図	古銭拓本① (S=1/1)
第74図	トレンチ 2 土層断面図 (1/80)	第88図	古銭拓本② (S=1/1)
第75図	トレンチ3背面・平面・立面実測図 (1/80)	第89図	平成 16 年度瓦の刻印(S=2/3)
第76図	トレンチ 3 平面実測図 (1/80)	第 90 図	平成 18 年度瓦の刻印 (S=2/3)
第77図	平成 20 年度調査出土遺物実測図	第 91 図	平成 20 年度瓦の刻印 (S=2/3)
第 78 図	御船手渡し調査位置図 (1/1500)	第 92 図	平成 19 年度瓦の刻印 (S=2/3)

表目次

第1表	周辺遺跡地名表	第9表	御船手渡し 土器観察表
第2表	平成 16 年度 陶磁器観察表	第 10 表	古銭観察表
第3表	平成 16 年度 土器観察表	第 11 表	煙管観察表
第4表	平成 17 年度 陶磁器観察表	第 12 表	御船手渡し 煙管観察表
第5表	平成 18 年度 陶磁器観察表	第 13 表	古銭集計表
第6表	平成 18 年度 土器観察表	第 14 表	瓦観察表
第7表	平成 20 年度 陶磁器観察表	第 15 表	瓦集計表
第8表	御船手渡し 陶磁器観察表		

写真目次

PL. 1

PL. 2

巻頭カラー	
川尻船着場全景(下流より)	
煉瓦構造物トイレ現況	
平成 19 年度調査 川尻船着場最下流	
平成 19 年度調査 御船手渡し	
平成 17 年度調查 川尻船着場石段部全景	
平成 18 年度調査 土留め材(木杭・竹)	
出土状況	

川尻船着場 平成 18 年度出土遺物 川尻船着場 - 平成 20 年度調査 - 木簡 御船手渡し - 平成 19 年度調査 - 木簡 (平成16年度調査) 高水敷堤防土層断面 高水敷ルンチ堤防検出状況 高水敷ルンチ VII層上面検出状況 高水敷トレンチ VII層上面検出状況 高水敷トレンチ 西側土層断面 (平成16年度調査) 高水敷トレンチ VII層出土火輪 高水敷トレンチ JII層出土火輪 高水敷トレンチ 遺物出土状況 石段撤去状況 石段撤去後遺物出土状況

	石段部 下段裏込め状況	PL. 8	(平成 19 年度調査)
	石段部 土層断面		汲水 1
PL. 3	(平成16年度調査)		汲水 2
	石段部 胴木検出状況		汲水 3
	石段部 胴木状況		汲水 4
	河床部トレンチ 捨石状況		汲水 5
	河床部トレンチ 土層断面		汲水 6
PL. 4	(平成16年度調査)		最下流
	河床調査 河床全景 南から		御船手渡し
	河床トレンチ 遺物出土状況	PL. 9	(平成20年度調査)
	河床調査 木片・粗朶検査状況		石段撤去前
	船繋ぎ石 根固の石検出状況		トレンチ 1 土層断面
	陸閘部トレンチ 検出状況		トレンチ1 木材検出状況・北西から
	橋台部 基礎石状況		トレンチ2 土層断面
	橋台部 板材状況		トレンチ2(最下流)刻印を持つ石
PL. 5	(平成17年度調査)		トレンチ3 土層断面
	石段撤去完了状況 南東から		トレンチ3 完掘状況
	石段部トレンチ 下段部 土層断面 東から		トレンチ(下流) 河床部 土層断面
	石段部トレンチ土留め材(木杭・竹)出土状況	PL. 10	川尻船着場 平成 16 年度出土遺物
	石段部トレンチ 粗朶検出状況 南から	PL. 11	川尻船着場 平成 16 年度出土遺物
	根石状況 南東から	PL. 12	川尻船着場 平成 16 年度出土遺物
	河床 トレンチ 土層断面状況	PL. 13	川尻船着場 平成 16 年度出土遺物
	河床部 杭検出状況	PL. 14	川尻船着場 平成 18 年度出土遺物
	河床部 竹類検出状況 南から	PL. 15	川尻船着場 平成 18 年度出土遺物
PL. 6	(平成 18 年度調査)	PL. 16	(1) 川尻船着場 平成16年度 えびす人形
	調査前 石段部及び河床全景		(2) 川尻船着場 平成17年度 碗
	石段部 土層断面		(3) 川尻船着場 平成20年度出土遺物
	石段部 土留め材(木杭・竹)出土状況	PL. 17	古銭
	石段部 粗杂検出状況		煙管・鉄製品
	河床部 土層断面	PL. 18	川尻船着場
	河床部 木杭検出状況		平成 16 年度 (No. 1) 軒丸瓦 (No. 2 · No. 4)
PL. 7	(平成18年度調査)		軒平瓦 (No. 3) 軒桟瓦
	煉瓦構造物 正面		平成 18 年度(No. 5) 軒丸瓦
	煉瓦構造物 右側面		平成 20 年度 (No. 6) 軒桟瓦 (No. 7) 軒平瓦
	煉瓦構造物 左側面	PL. 19	川尻船着場 木簡 - 平成 20 年度 -
	煉瓦構造物基礎状況	PL. 20	御船手渡し
	中央部上位便槽検出状況		平成 19 年度 大皿・色絵
	中央部下位便槽検出状況		平成 19 年度 軒平瓦
	西側下位便槽の廃棄状況		平成 19 年度出土遺物
	西側下位便槽検出状況	PL. 21	御船手渡し 木簡 - 平成 19 年度 -

第1章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

緑川水系の加勢川は、熊本市東部に位置する水前 寺成就園の湧水を水源とする一級河川である。水源 から河口部までの比高差が 10m 程度と小さい。流 れは緩やかで、多くの小河川が流入する。また、河 道が狭小であるため、降雨による水位の上昇は急激 で河川流域にはわずかな出水において浸水被害を被 る水害常襲地帯を有する。昭和 62 年と 63 年の出 水においても、無堤区間である嘉島町側で浸水する など、甚大な被害をもたらした。このようなことか ら国土交通省において、河川拡幅や河道の掘り下げ、 堤防再構築による護岸の強化などの治水工事が計画 され、平成 11 年度より上流部から順次施工され、 川尻地区においても護岸工事が行われることとなっ た。

当該地区を流れる加勢川の護岸には、近世初頭加藤清正によって構築されたとされる石段造りの船着場や石畳状の渡し場などの「河港施設」が残存する。昭和10年に編纂された『肥後川尻町史』や、昭和41年の熊本県教育委員会の調査、昭和56年の熊本市教育委員会の調査により、近世の河港施設と御蔵が共に現存する全国で数少ない貴重な遺構群として、その文化的価値が高く評価されている。

今回の国土交通省による河川改修計画では、加勢川・川尻地区の景観や歴史性を保全することとし、川尻地区の川づくりについて地区住民の意見を取り入れながら進めることとされた。平成13年3月24日、川尻公会堂において「川尻地区川づくり意見交換会」が開催され、河川改修事業の計画案について説明がなされ地元住民から意見の聴取が行われた。その後、同年6月1日、熊本県と熊本市及び国土交通省で協議を行い、川尻船着場跡については文化財保護の観点から現状で保存することが望ましいとの認識で一致し、河川改修にあたっては歴史的環境や街並み等の景観に配慮した「ふるさとの川整備事業」として取り組むことを確認した。このような基本方針に基づき、同年6月6日川尻公会堂に

おいて、福留脩文氏(土木工学)、木下浩明氏(石工) 両氏を講師として招き説明会が行われた。そこで「川 尻船着場跡については、石段の基礎部にあたる土の 流失が著しく、石段構造が崩れ、歪みを生じており、 現状のままでは崩壊する危険性が高く、文化財調査 の実施と復元修復が必要」との指摘を受けた。その ため、当該地区の河川改修事業の実施に当たっては、 船着場跡を積み直し復元することとした。その後、 設置された川尻地区河川改修検討委員会の要望によ り、熊本県教育委員会では、歴史的景観の保全を行 うこととし、護岸工事に伴ってこれらの遺構が破壊 されることのないよう地元住民の方々や熊本市教育 委員会、国土交通省と協議を重ねていくこととした。 同年11月15日、国交省から「川尻地区川づくり 検討会」に示す改修計画の2案(自立式原位置案、 前出し案)について事前協議が行われた。熊本県文 化課では、文化財保護の観点から自立式原位置案で の実施が望ましい旨伝えた。

平成14年1月24日、川尻地区河川改修検討会 中間報告会において、国交省より地元の要望を取り 入れ、前出し案をベースに、防災上水際部分を上下 流と連結させることを重視し、かつ文化的景観を生 かしながら広場を確保する広場修正案が提案され た。しかし、熊本県教育委員会及び熊本市教育委員 会では、文化財保護の立場から遺跡・遺構の歴史的 価値を損ねることのないよう配慮し、現状の位置で 保存される自立式原位置案での改修を要望した。こ のような経過の中で、同年3月5日、国交省と地 元住民を中心とした河川改修検討会の意見交換によ り、計画案が検討修正されてきた経緯があるが、文 化財としての価値ある遺構を含むことから、事前に 検討会に申し入れ、崇城大学松本寿三郎教授ととも に参加し、遺跡の歴史的価値や重要性について説明 を行った。川尻船着場は、藩政期の熊本の玄関口と しての機能を果たしたものであり、遺跡として貴重 で、条件が整えば十分に史跡に指定され得る可能性 が高い遺跡であろうとの意見が出された。これらを 勘案して、史跡として保存するのか、あるいは階段 のみを建造物として残すのか、現在までに提示され た3案について検討する必要があるとの認識で一 致した。そこで、今後、当該箇所に係る改修案を見 直し、文化財保護を重視した案を検討することとし、 文化庁の指導助言を受けながら、史跡指定を視野に 入れた適切な整備を実施することとした。この方針 を受けて同年5月31日、史跡指定申請の範囲や川 尻船着場及び御船手渡しの改修に係る工法について 確認を行った。同年7月2日、宝暦期に画かれた 絵図と現在の船着場との照合を行った結果、一致す ることから良く保存されていることが確認された。 このことから、史跡指定に係る申請範囲を船着場跡 全域とし、国土交通省に対して同範囲の文化財保存 に配慮した設計を行うよう求めた。これらの考え方 に基づき文化庁との協議を行い、その結果「船着場 の範囲については絵図のとおり認識すべきであり、 管理用道路を設置することにより船着場の範囲が狭 まることについては、遺構の埋設保存という考え方 で良い。御船手渡しの現状の石材を使った前出しは、 史跡指定を念頭におくならば良い方法ではない。前 出しにより建造物として扱う、という考え方もある が、その点については文化庁建造物課と調整を図る 必要がある」との指導をうけた。このことにより、 御船手渡しに係る河川改修事業に伴う工法と保存に ついて文化庁との協議を重ね、埋設保存を最善の策 として基礎を石張りの上に置き、埋設した石張りを 破壊しない工法をとり、現況の石張りの一部を見せ る工法を検討するように指導を受けた。同年12月 11日、この内容を受け国土交通省で検討した結果、 御船手渡しについて埋設保存をしても、杭基礎を入 れるために約15㎡が破壊されること。石張り上面 から基礎を作る工法は、堤防の構造上不可能であり、 地盤が軟弱であるため必ず杭基礎は必要となり、一 部破壊は免れない。また、水位の上限を考えれば嵩 上げしなければならないが、現況の石張りの一部 を見せるには 2 mの段差があり危険であることと、 御船手渡しの面積が狭くなり利用しづらくなること から、当初計画のとおり現況の石材を使った前出し による工法で実施したいとの回答を得た。

第2節 調査の方法と経過及び 調査の組織

1. 調査の方法

平成 16 年度、国交省及び熊本県教育委員会、熊 本市教育委員会で、当該箇所の石積遺構に関する発 掘調査の実施と、遺構の補修・積戻し工事を行うこ ととし、調査方法等についての協議を行った。発掘 調査については、改修工事の工程や進捗に合わせ適 宜実施することとし、平成16年9月1日付けで、 国土交通省熊本河川国道事務所及び熊本県教育委員 会、熊本市教育委員会の三者間で「川尻地区護岸設 計検討委員会における加勢川御蔵前船着場の文化財 調査及び復元整備工事に関する覚書」を締結した。 当該地区に係る文化財調査及び復元整備工事につい ては、平成16年度~21年度にかけて実施し、年 度ごとに文化財調査及び復元整備工事の実施計画に ついて、国土交通省熊本河川国道事務所及び熊本県 教育委員会、熊本市教育委員会の三者で協議を行い、 「川尻地区護岸設計検討委員会における加勢川御蔵 前船着場の文化財調査及び復元整備工事に関する覚 書」を締結し実施した。

その際、国土交通省、熊本県教育委員会及び熊本 市教育委員会の三者は、川尻地区護岸設計計画検討 部会の意見に基づき、発掘調査の実施と補修・積戻 し工事を行うこととした。三者の役割分担は、次の とおりである。

[国土交通省]

発掘調査の実施に係る発注と委託契約業務、補修・ 積戻し工事の施工。

[熊本県教育庁文化課]

国土交通省からの発掘調査に関する管理、指導の依頼を受け、民間の発掘調査組織が行う調査の指揮、 監理・監督を行う。

[熊本市教育委員会文化財課] 適宜、発掘調査に立会い、助言を行う。

2. 調査の経過

- 1) 平成 16 年度の調査
- 12.14 河床部に点在する石段石材は、連接ブロッ

ク構築時に破壊されている可能性がある。明治初期 構築の橋脚部と石段部分とがどのような関係で構築 されているのか、石段部分の表土を掘削する際に観 察を行う。

現時点で河床部分には捨石と考えられる凝灰岩を 覆うように河川堆積物が堆積している状態である。 そこから出土している主な遺物は、近代から現代の 陶磁器である。数点であるが19世紀初から幕末に かけての陶磁器が出土した。

12.15 石段部分の表土除去を行った。覆土により石段が隠れていた部分は、石段が欠如していた。安全面を考慮し、陸閘石積の基礎であるコンクリート面(表土より約50cm下)で掘削を中止した。表土には瓦やガラス・陶磁器など多くの産業廃棄物が含まれている。来跡された村田氏によると昭和40年代には高水敷平場部分はゴミ捨て場として利用していたとのことだった。河床部には近世の簡易トイレとして使用されていた陶器や丸瓦・多くの陶磁器が散在している状態である。また、河床部の石段石材には船繋ぎロープにより摩擦し窪んだ状態のものもある。この石材の出土地点が連接ブロックの上から出土していることから、昭和期に石段最上部付近の積み直しが行われた可能性がある。

12.16 高水敷平場トレンチでは、人力による表 土の除去作業を行い、現在 20cmほどの掘削が完了 した。遺構の検出面は現地表面から 100cm下と推 測される。これは石段天端面とほぼ同レベルである。 石段部では、石段の覆土を除去した。橋脚付近は陸 閘石積の構築により石段が撤去されていた。河床部 では、河床部表土の除去を重機をにより行った。石 段の噛み合わせや表土の状況の観察を行いながら 掘削に伴い検出される礫を撤去した。石段から約5 m離れた河床で砂質土を検出していることから、こ れとほぼ同レベルで重機による掘削を終了した。表 土中から検出される礫の表面には鉄分が付着してお り、石段下部から湧水があったことを示している。 表土の下位には 1cm大の砂利やガタ土とともに 1 m 大の礫が重層的に検出された。検出石材は、ほとん どが凝灰岩であり一部矢跡が確認された礫も存在す る。出土した遺物は陶磁器、瓦類が土嚢袋 10 袋分 出土した。また、寛永通宝や天保通宝が10枚ほど 出土した。表土下位から出土した陶磁器は19世紀 初期から明治初期の様相を示しており、当該港が機 能していた最終期のものがほとんどであった。当初 の計画どおり根石をほぼ検出したが、連接ブロック 付近はやや原位置を留めている可能性が低いため出 土礫は撤去した。

12.17 高水敷トレンチにおいて、人力による表土の掘削作業を行った。表土の下 10~50cmにかけて、非常にしまったクラッシャーが厚く堆積しており、ツルハシを使用しても作業が捗らなかった。石段側には、表土から約60cm下で旧地表面である硬化した砂質土を検出した。概ね石段の天端レベルである。その上位に川の氾濫によると考えられる砂礫層が薄く堆積している。高堤防側クラッシャーの下位には漆喰やカーボンを多く含んだ粘質土を検出した。地元の方に伺ったところ、昭和初期の地形は石段天端レベルで高堤防まで平坦であったという。検出した粘質土も旧表土の可能性がある。

12.18 近畿大学冨田克敏教授による岩石鑑定を 実施。石段石材のクリーニングを行い、ルーペを使 用し岩石を構成する物質の観察を行った。また、河 床に点在する岩石をサンプルとし一部採取した。肉 眼による岩石観察の結果、石段に使用された石材に は数種類があることが判明した。高水敷トレンチで は、人力による表土の掘削作業を行った。一部電動 ピックを使用し掘削作業を行い、ほぼ表土の掘削作 業を終了した。現在、検出している面は石段天端レ ベルの硬化砂質土上面である。その直上には河川堆 積物が堆積しており、ローリングを受けた陶磁器が 出土している。幕末から明治にかけての陶磁器であ る。硬化した砂質土の下位には小礫の堆積があった。

12.20 陸閘部トレンチの掘削作業を開始した。 表土から 10cmのところで水門受けの基礎石を検 出した。

高水敷トレンチでは、砂礫層を撤去し硬化した砂 質土の上面の検出及び遺構の検出作業を行った。

検出した砂質土をⅡ層とする。Ⅱ層の上面には、 鉄分の沈殿がいたるところに確認され、水の影響を 受けていたことが推測される。写真撮影後にはⅡ層 の掘削作業を行った。出土遺物はほとんどなく、陶 磁器片が数点出土している。河床部トレンチでは、 セクションベルトを設定し、基礎の検出作業を行っ た。トレンチ部分には下流部でみられるような捨石 構造は見られない。地元住人の方への聞き取り調査 では、この部分には塊石が点在していたとのことで あり、隣接する橋脚構築時にある程度撤去もしくは 破壊した可能性があろう。ガタ土から出土した遺物 は陶磁器及び瓦片である。

12.21 陸閘部トレンチでは、水門基礎を確認した。 高水敷トレンチでは、先日表土の下位で検出した 砂質土層(Ⅱ層)の掘削を行い、Ⅲ層上面にて写真 撮影を行った。Ⅲ層上面もⅡ層同様に硬化している 状態であった。Ⅲ層はやや粘性のある土壌でカーボ ンや砂礫を少し含んでいる。Ⅲ層を除去すると砂 質土(IV層)を検出した。その下位にV層上面にて 14段目の石段を設置後、平場部分をⅣ層によって 嵩上げしていることが分かった。おそらく高堤防構 築により嵩上げしたと考えられる。さらに、堤防側 にV層上面からの掘り込みを確認した。石積み最下 段の下には漆喰層を 20cmの幅で確認した。河床部 トレンチでは、基礎石と考えられる礫を石段最下段 より5mのところまで検出した。石段付近は、橋 脚構築や連接ブロックの設置により、基礎上位が乱 れているため撤去した。礫と礫の隙間は広く、安定 した基礎とはいえないが、下位の状況を確認したう えで検討する。

12.21 陸閘部トレンチでは、水門基礎の範囲確認のため掘削作業を行った。高水敷トレンチでは、Ⅲ層によって石段 14 段目や高堤防基礎が覆われている状況であった。Ⅳ~Ⅵ層の掘削作業を行った。 V層上面においてもⅢ・Ⅳ層同様に鉄分の沈殿や砂礫層が確認され、水の影響を受けていたことを示している。 V層の上面が石段 13 段目の天端レベルとなり、 V層の上面から 14 段目の裏込め石が設置されていた。 V層は暗褐色土であり、ブロック状に黒褐色土が混入している状態で層全体が硬化している。その下位に存在するⅥ層はややしまりがないボロボロとした質感の暗褐色土である。 V・Ⅵ層ともに遺物の出土は少なく、主に包含されている遺物は

陶磁器である。1点であるが中世の青磁片が出土した。Ⅵ層の下位に鉄分の沈殿・カーボンが見られる Ⅷ層をトレンチ全体で確認した。一部、石段側では 砂礫層の堆積があった。現状での判断ではあるがⅧ層が石段構築時の他からの搬入土と考えられる。河床部トレンチの清掃作業を行った。基礎石間から尿瓶や擂鉢、九曜文の目板瓦などが出土した。

12.24 高水敷トレンチの四層の上面においても 硬化面を検出した。上層と同様に鉄分の付着があり、 南方向に傾斜し平坦ではない。 層中に包含するガタ 土や黒褐色粘質土を見る限り 四層も客土である。 石段の天端面としては 12 段~ 11 段くらいである。 層厚は 70cmを超え、 四層から出土した主な遺物は 土師坏の細片で、1 点ではあるが 16~ 17 世紀の 青磁片や火輪が出土した。 出土遺物や層厚から考えると石段構築以前の客土と考えられる。 また、石段部分側では石段構築の際の掘り込みを確認しており 四層の造成によって埋め立てたものと推測される。 四層下位は表土から約 2 mまで確認され、その直下にも人為的な客土が存在する。 四層と四層との層 理面には土師坏がまとまって出土している。

12.25 高水敷トレンチのVII層の層厚は、約60cm である。検出した遺物は底部糸切り痕の土師坏で、 Ⅷ層の下位からまとまって検出された。当初はⅧ層 上面あるいは哑層上面からの遺構の可能性があった ことから、遺物出土地点の両側土層を精査した。そ の結果、VII層自体の堆積成因が人為的な客土であり、 推測ではあるが石段構築時の造成土と考えられるこ とから、造成土の一部分のブロックとして遺物が包 含されていた可能性が強い。また、本日の掘削作業 により石段構築の際の掘り込みと遺物出土地域の切 り合い関係が判明した。遺物の出土位置が石段付近 であったことからセクションの精査により、石段構 築の掘り込みが遺物出土包含層を切っていることが わかった。このことから、この遺物の所属時期の特 定により石段構築以前の造成時期の想定が可能であ ろう。石段部分について部分的に掘削作業を行った。 10段目の裏込め石は10cmほどの円礫であった。

12.27 陸閘部トレンチにおいて、水門基礎の検 出作業を行った。また、高水敷トレンチのVII層上面 で検出した遺物を伴う遺構を SK-3 とし、遺物の取り上げ作業を行った。出土した土師坏・皿に法量的な統一性はない。出土状況から中世期の祭祀遺構と考えられる。遺構検出面である WM層の堆積は上位層同様に搬入土である。 WM層の堆積時期については、まだ明確ではないが、近世以前の土木工事の可能性があろう。確実に石段構築に伴う土木工事は VMM層からと考えられ、 VMM層上面から掘り込んで石段の構築が行われたものと判断できる。

- 12.28 陸閘部トレンチにおいて、水門基礎の検 出作業を行い、一部を残し検出作業を完了した。高 水敷トレンチでは、本日で掘削作業は完了した。土 層断面図・遺構平面図の作成作業を行う。
- 1.5 高水敷トレンチの埋め戻し作業を実施、完了した。陸閘部トレンチの基礎の平面的検出作業を行い、写真撮影を行った。水門に設置される堰板の所在については、川尻水防団事務所に保管されていたが、現在、近隣の看板に再利用されていた。河床部では、連接ブロックの撤去後に石段の有無を確認した。橋脚部分まで石段が残存する可能性がある。
- 1.6 河床部において橋脚部分まで連接ブロック やコンクリートを撤去した結果、橋脚石積みの基礎 構造が明らかとなった。橋脚石積みの構築は、明治 20年頃とのことである。本日検出した川に面する 石積み基礎構造は、石段を上に漆喰を設置し、その 上に捨石を2段積み上げている。捨石は石積み本 体より約60cm張り出した状態である。河床部トレ ンチの掘削を行い、砂礫層を除去した。砂礫層下位 より 10~100cmの円礫・角礫(石材の一部に、通 称「馬門石」を含む)を重層的に包含するガタ土(暗 灰色土)を検出した。礫構成面や重なり方に統一感 はなく、この礫の出土状況から判断すると整然と並 べ構築したものではなく、無造作に礫を投げ込んだ ものと考えられる。また、ガタ土を構成する礫は、 トレンチ上位で出土した矢跡が確認される割石に比 べ大きさはまばらで、加工痕が確認されるものはほ とんど見受けられなかった。このような捨石構造が 地下どこまで続くのか不明である。本日の掘削によ り、石段の基礎に胴木が使用されている可能性が低 くなった。出土した遺物は、瓦が主体で磁器の出土

量が上位に比べ低下する。1点であるが織部と思われる破片が出土した。また、出土した数点の瓦に刻印が確認された。

- 1.7 河床部トレンチの清掃作業を行い、写真撮影を行った。石段1段目下の面をもった石材の下位の状況であるが、捨石の上に直接積んでいる状態であり、胴木の存在する可能性は低い。文化庁記念物課磯村主任調査官が来跡、現地指導を受ける。河床トレンチの掘削は現在の面までとするが、石段側については石段撤去後に下部確認のため若干掘削することにする。河床トレンチの記録は、出土礫の状況から記録写真によるものとし、土層断面図の作成を行なう。石段撤去後、裏込めの出土状況によっては実測作業が必要になる可能性がある。
- 1.11 橋台基礎部分の表土除去を行ったところ、 捨石及び杭などを検出した。石段は捨石の下位まで 伸長する可能性がある。捨石の撤去については、橋 台崩壊のおそれがあるため現状の面で作業をとめた。
- 1.12 陸閘部トレンチにおいて、遺構平面図の作成を行った。石段部では、12,13,14段目石段の計19石の撤去を行った。石段裏より裏込め材を少し検出した。河床部トレンチにおいて土層断面図の作成を行った。
- 1.13 陸閘部トレンチの遺構平面図の作成を行った。高水敷堤防の断面図の作成を行った。石段部において、4~11までの58石の撤去を行った。4段目縦目地から4番目の石材の裏より、1820年~幕末にかけての端反碗の蓋が出土した。これにより現在の石段が構築当初の姿ではなく、少なくとも19世紀以降に再構築されたものと考えられる。また、石段部の土層の状況であるが、数度の石段の再構築が考えられることから、掘り込みラインの有無や裏込め材の状況により複雑な様子が想定される。上位の石段の裏からはプラスチック片などが出土する。
- 1.14 石段部において、 $1 \sim 3$ 段目及び根石の撤去を行った。石段 2 段目の裏面より広東碗などの陶磁器片が出土している。一部、近代の遺物も含まれている。石段 $1 \sim 3$ 段目までの裏込めの状況であるが、径 $20 \sim 30$ cm程度の川原石や割石が充填されている。石段上部とは様相が異なる。根石につ

いては、奥行きが70cmを超えるものもある。根石には矢穴跡が残り、4寸を測る。石材は割石を使用している。橋台基礎部では、表土の撤去を行い、写真撮影及び実測作業を行った。下流側で検出した板材は基礎の下に潜り込んでいることが明らかになった。

1.15 石段 4 段目の石段裏側においてコーラ瓶 が検出された。また、別地点でもプラスチック片な どの現代の遺物が確認された。これにより石段の再 構築が現代に行われた可能性がでてきた。本日から、 石段部トレンチの掘削作業を行い、石段下位の状況 確認を開始。上位には先に述べたとおり、現代の遺 物が散在している。それを撤去したところ原位置を 留めているものと考えられる裏込め石を検出した。 10~13段目までの裏込め石は石段の直下と裏側 に集中している。また、14段目は割石が主である が、13段目以降は円礫が主となる。10段目には直 径 50cm程度の比較的大きな裏込め石の使用が認め られ、その裏側から上位の土質と異なる砂質土が 検出された。10段目辺りが最潮位となることから、 旧河川土の可能性がある。本日の調査成果として特 筆すべき点は、裏込め石を撤去し、その下位の S-2 ④層より 15~16世紀代の青磁片や白磁片が出土 したことである。裏込め石を境に上位は、近代から 現代の再構築の影響により撹乱を受けていると考え られるが、下位は構築当初のプライマリーな状態で はないだろうか。最後に裏込め石の撤去に関しては、 平面図作成及び写真による記録を行った。

1.17 石段部トレンチの掘削作業を行った。石段 10 段目辺りからガタ土が確認され、裏込め石の様相も上位石段裏とは異なり、比較的大きな 50cmほどの礫が使用されるようになる。出土した遺物は僅かで全て細片であった。基本的に石段の据付には、石段の裏を掘削により整形した上で裏込め石を充填し、その後掘削した土を埋め戻していることが断面により観察された。掘削する前の土と埋め戻し土は基本的に同一であるため、包含する小礫や粘質土により分層を試みた結果である。ガタ土を掘削すると粗朶類や竹類の出土が見られたため、その下位を精査した。その結果、直径 10cm程度の基礎木材を数

本検出した。その内訳は、トレンチの伸長方向に横 たわるように3本、縦方向に打設された杭3本で ある。打設された杭の周囲には粗朶類や竹類が乱雑 に組んであるようで、直下がガタ土のための沈下防 止のためと考えられる。横方向に検出された杭は打 設された杭の上に杭がのせてあり、掘削ラインと同 様に河床に向かって傾斜する。この基礎材について は、石段構築当初のものと考えられる。

1.18 石段部トレンチにおいて、河床根石直下の 円礫を撤去すると、旧河床土(ガタ土②:青灰褐色土) が確認された。裏込め石の出土もこの層からはなく、 上位の暗灰褐色土 (ガタ土①) までであった。石段 の2~4段目までの裏込め石間土からは近世の陶 磁器が見られ、再構築が行われたことを示す。裏込 めの状況が構築当初のプライマリーな状態とはいえ ないだろう。しかし、裏込め以下の層位については、 比較的安定していると考えられる。高水敷堤防トレ ンチの掘削作業を行った。石積みの撤去により外側 石積み(谷積み部)が旧堤防石積みを埋め殺してい ることが判明した。掘削に伴い出土した主な遺物は 瓦である。旧堤防石積みの裏込めは薄く漆喰混じり の土により石積み裏面を形成していた。旧石積みの 上位2段は後世の継ぎ足しによるものである。船 繋ぎ石トレンチの掘削作業を行った。

1.19 石段部トレンチの出土材の検出状況につい て、石段構築に伴う掘り込みが出土材の上か下かに より材の構築時期が異なる可能性があるとの指摘を 受けた。掘り込みの下であれば石段構築時となるが、 上であれば石段構築以前の構築物と考えらる。掘り 込みラインがいずれになるか精査が必要である。出 土材直下のガタ土と所属(河川堆積物か人為的造成 土)が問題となろう。高水敷堤防トレンチの清掃作 業及び断面精査を行った。その結果、初期の石積み は十山を客土したうえで石材を据え付け裏込めを充 填している。基本的に初期石積みの裏には漆喰混じ りの土が盛られている。一部裏込めが認められる箇 所は、天端面か補強したものと考えられる。船繋 ぎ石トレンチの掘削作業を行った。V層の上面より 船繋ぎ石据え付けのための掘り込みラインを検出し た。調査では根石の検出まで行っている。

- 1.20 石段構築時の掘り込みは、ほぼ直に落ち込んでいる。断面精査の結果、出土した木材の出土層及びその下位層から竹や粗朶の包含が確認されており、人為的客土であることがわかった。また、河床部で検出した裏込め直下の青灰色土(礫が混入しない土)も人為的な客土の可能性がある。船繋ぎ石遺構平面図及び見通し断面図の作成を行った。
- 1.21 石段部トレンチの土層断面図及び出土材の 見通し断面図の作成を行った。裏込め石が混入する 層位は上からの掘り込みで、粘質土や砂質土の混入 の仕方により細分し、検討を行った。根石や石段 1, 2 段目裏込めには粘質土が吸い出されている状況が 認められる。
- 1.24 石段部トレンチの土層断面図及び出土材の 見通し断面図の作成を行った。石段部の土層は、基本的に上・中・下層は3つに分類することが可能 である。上層は石段設置のための裏込め充填土及び 整形土である。数度の再構築があることから、非常 に土に乱れが確認される。中層は石段設置以前の地 形整形土や切り土である。石段上部からの流入が認 められ、複雑である。下層は石段設置以前の整形土 である。粗朶や杭などの基礎構築物が認められる。
 - 1.26 橋台基礎平面図の実測作業を行った。
- **3.5** 河床部分の掘削に伴い立会いを行った。検 出した捨石の検出状況に規則性は見られなかった。
- 3.7 河床部分の掘削に伴い立会いを行った。石段より4m河床において、捨石の下位で胴木を検出した。胴木は石段と平行するものと、直行するものがある。胴木の上に充填されるガタ土には、粗朶、竹、板材が見られた。
- 3.14 河床部分にて検出した木材の検出状況の実 測作業を行った。
- 4.14 河床部分掘削の立会を行い、2回目の写真 撮影を行った。
- 4.18 河床部分掘削の立会を行い、3回目の写真 撮影を行った。石段捨石下位で旧河床土が検出され、その上位に捨石や粗朶を含む「ガタ土」が充填 されていることが明らかとなった。上流側の橋台付 近は、石段下位に捨石や粗朶が存在することにより、 石段構築時の切り土(現在の床堀基面調整)範囲の

復元が可能となろう。

- 2) 平成17年度の調査
- 2.4 石段部において石段撤去後、清掃作業を行った。石段裏側の状況であるが、顕著な裏込め石の設置は見られない。ただ、9段目裏側には径20~30cmの裏込めが確認された。河床部において石段全面の掘削作業を行った。1段目の下位より2段の基礎石が検出され、その下位に径3cm木片、径5~20cmの礫層が確認された。また、その下位には地山が確認され、石段前面より急角度に落ち込んでいる。基礎石が2段で構成されていることについては、新知見であるがその他については、昨年の調査結果と概ね同じであった。
- 2.7 石段部の基礎石の奥行きは石段より長く、約60cmを測る。石段の構築における工夫の一端が 窺えた。基礎石に約10cm幅の矢跡が確認された。
- 2.8 石段部トレンチにおいて、14段目~8段 目までの掘削を行い、石段構築の際の掘り込み基面 を検出した。掘り込まれた土自体も盛り土である。 その層中から景徳鎮窯の青花(16世紀代)や青磁・ 土師器細片が出土しており、国産の陶磁器類を包含 していないことは、この盛土の年代を推定する材料 となるものである。また、10段目石段の下位の掘 削中に、胴木とともにビニールを確認した。土層断 面の観察により、人為的な掘り込みや裏込め石の充 填が確認され、その際にビニールが紛れ込んだもの と考えられる。よって、最近石段の再構築が行われ たことが判明した。さらに、斜めに組まれたと考え られる胴木が、再構築の際に破壊を受けた状況が確 認された。7~8段目の下位には縦に打設された胴 木が7本確認されている。最後に、14段目裏側の 盛土形成の際に、以前形成されていたであろう整地 面がカットされており、現段階では13段目の天端 面の高さを窺うことは困難な状況となった。
- 2.9 石段部トレンチの掘削作業を行った。縦に 打設された杭については、本日も石段3段目下位よ り3本検出した。また、斜位の状態で検出した胴木 は、昨年確認したようなホゾとホゾ穴で接合したも のではないため、胴木接合方法には縄などにより行 われた可能性がある。杭周囲の掘削に伴い、ガタ土

の上位より礫群が検出された。これらがガタ土上位に人為的に敷かれたものか、不明であるが図面・写真記録を行う予定である。本日の掘削により、基礎石背後まで掘削部分を伸長することができ、石段2段目付近より胴木を検出し、さらにガタ土が落ち込んでいる様子が確認できた。これは昨年と同様の構造である。一部のガタ土の上面には粗朶の層を検出した。ガタ土上面には礫敷や粗朶の設置などの処置が採られていることが本日の調査により判明した。

- 2.10 石段部トレンチの清掃作業を行い、各部分の写真撮影を行った。昨日確認した粗朶については、その検出状況により薄い層より形成されていた。最も顕著に確認された部分は石段2段目の背後である。粗朶の下層にはガタ土が存在するし、ガタ土中にも粗朶が包含されてはいるがまとまりはない。一部、竹類も確認した。礫群については、裏込め石充填時のものとの区別が困難な部分もある。しかし、礫がガタ土に埋没していることを基準に確認を行った。礫は径15~40cmのものがあり、統一性はみられない。本日は、石段1段目下位の基礎石の検出も行った。検出された基礎石規模は非常に奥行きが長いことが判明した。
- 2.11 石段部トレンチで検出した礫や粗朶について図面作成を行った。礫の平面図及び見通し断面図を作成後、礫の撤去を行い礫下位の状況確認を行った。礫下位には粗朶混じりのガタ土が充填されているが、粗朶にまとまりはない。
- 2.13 石段部トレンチで本日の掘削により、地山面の確認が可能となった。石段構築の際の基面の整形は、階段状を呈するものである。各々のステップの形状には統一感はないが、基礎石背後の杭が地山掘り込み面と重なる。これは昨年の調査結果と同じ傾向である。石段の構築の順序は、①階段状に基面の整形、②杭の打設及び基礎材の設置(昨年の調査により検出された胴木)、③基礎材の周囲へのガタ土の充填(粗朶や礫も含む)、④石段の設置とともに背後の土の整形・充填と考えられる。杭の打設幅は、それぞれ80~90cm間隔。検出した杭の中には面取りが行われているものもある。上段側の地山面の上位には13~14世紀の遺物を含む造成土、

その上位に白色粘質土が敷かれ、その上に 16 世紀 の遺物を含む造成土が堆積している。

- 2.14 石段部トレンチにおいて、地山面の検出をほぼ終了した。石段構築の際の基面の整形は14段目裏側から3段のステップによることが判明した。それを上段・中段・下段に仮に区分すると、中段部のステップ幅が最長となる。また、中段に設置された杭には、土留材と考えられる竹が検出されたが、残存状態は悪い。写真・図面作成による記録後、掘削する予定である。杭の間に充填されたガタ土や粗朶の層は、基面上段部にまで達していることが判明した。その上位には、実際に石段構築の調整のためと考えられる土が認められた。
- 2.15 石段部トレンチで検出した土留めと考えられる竹類について、写真撮影後に図化記録作業を行った。竹類の下部には砂質土が堆積していた。また、その周辺の粗朶混じりのガタ土から径 20cmほどの縦に打設された杭と、横になった状態の木材が検出された。縦に打設された杭の頭部は人為的に切断されており、横になって検出された杭と接合する。これらの検出層位が粗朶混じりのガタ土中であることから、杭の打設は地山面整形後と考えられる。
- 2.17 石段部トレンチにおいて、石段構築の際の基面をほぼ検出した。ステップ状に整形された基面に堆積する人為的な堆積は分層された。土層の観察により、各ステップは別々に整形されたことが窺え、粗朶の層を最下位に充填し、その後に竹類による土留めや礫の充填などの処置が施されていることが分かった。また、杭間にも竹類による土留めがなされていた。さらに、ある程度の高さまで土を充填すると、その面で再度粗朶を敷いていることが分かった。
- 2.18 石段部トレンチの土層断面図を作成。土層は大きく3つに区分。①石段構築時の堆積、②基礎石背後の充填土、③ビニールを含む堆積土。それぞれをA・B・Cとし、各層に枝番を付した。
- 2.21 石段部トレンチにおける土層断面図の作成に伴い土層注記作業を行った。土質の違いによって、大きく石段構築時の土・基礎石背後の充填土・比較的新しい構築土に区分できる。また、検出した杭の平面図及び見通し断面図の作成も行った。

- 2.23 石段部トレンチの杭見通し断面図を作成。
- 2.24 石段部トレンチの調査を実施。
- 3.3 石段撤去に伴い石段個別計測作業を行った。 石段部トレンチより出土した「松風」は、菊池市の 正観寺丸宝社の包装紙であることが判明。昭和36 ~37年くらいに使用されていたものである。
- 3.4 河床部の基礎石の検出、清掃作業を行い、 写真撮影及び立面図の作成を行った。基礎石には矢 跡が多数確認され、その矢幅は7cm、12cmである。
- 3.7 河床部において基礎石の検出、清掃作業を行い、記録写真の撮影を行った。粗朶や杭の設置が地山未検出部に存在していることから、安定を保つための処置と考えられる。粗朶と竹類との比率は竹類が圧倒的に多い。また、面的に鉛直方向に竹類が設置されていることから、土留め的な役割を果たしていたと考えられる。杭については、杭頭を意図的にカットしているものもみられた。
- 3.8 河床部において、粗朶及び竹類検出状況の 図面を作成。杭の中には、頭部を切断しているもの もみられる。また、石段撤去に伴い石段石材の数値 計測を行った。石段裏側の状況であるが、トレンチ 部分同様に裏込め石などの設置は確認できなかっ た。

3) 平成18年度の調査

- 11.15 煉瓦構造物の調査は、その周囲にトレンチを設定し、基礎構造の確認を目的とし実施した。 煉瓦構造物の実測作業(縮尺 1/10)を行った。
- 11.27 宇土半島産出の溶結凝灰岩(通称「馬門石」)の舗装材を構造物前面にて確認。トレンチ東側を一部拡張。構造物東側より板石、石枡を検出。
- 11.29 作業部会による指示により、石段との関係を把握する目的で南側にトレンチを拡張。
- 11.30 構造物西側より初期の便槽甕の上位に新 しい便槽甕を確認。構造物内部においては、便槽甕 の周囲に固定材として馬門石を確認。
- 12.1 煉瓦構造物内部にて、馬門石に固定された 便槽甕の下位から初期の便槽甕を検出。
- 12.2 煉瓦構造物の下位より、目漆喰を施された石積みを確認。
 - 12.5 煉瓦構造物内部の実測作業を行う。

- 2.16 階段部トレンチの調査は、作業部会により 指示された箇所に幅1mのトレンチを設定し、基 礎構造の確認を目的として実施した。石段背後から 検出された現代の遺物(空缶、ビニール等)を含む 撹乱土の撤去を行う。
- 2.19 階段部トレンチの根石から7段目の石段 背後にて多くの裏込め材を顕著に確認。基礎構造の 一部である木杭の頭部が検出される。
- 2.20 階段部トレンチの細砂層より 18 世紀の肥前系染付が出土。また、その下位にて土留め状遺構が検出される。
- 2.22 階段部トレンチの粗朶及び土嚢状の堆積を確認。土留め状遺構の清掃作業を行う。河床部トレンチ調査に着手。河床表土を撤去したところ、一部木杭を検出。掘削作業を開始した。
- 2.23 階段部トレンチの根石背後の裏込め材を撤去。河床部トレンチの掘削を行い、木杭を検出した。
- 2.26 河床部トレンチで検出した木杭の先端に手 斧による加工の痕跡を確認。
- 2.27 階段部トレンチ土層断面図の作成。河床部 トレンチの写真撮影を行う。
 - 2.28 階段部・河床部トレンチの土層断面図及び 各種図面の作成を行う。
 - 3.1 作業部会の指示により、河床部トレンチの幅を一部東側に拡張する。完掘状況の写真撮影を行う。

4) 平成 19 年度の調査

御船手渡しのトレンチ調査は、基礎構造の確認と 構築時期の特定を目的とし、平成19年12月より 実施した。

- 12月 御船手渡し階段部分の実測作業(縮尺 1/20)を行った。
 - **1.9** 石段の撤去。
 - 1.10 作業部会の指示でトレンチを設定。
- 1.14 現在の石段構築の際に盛土されていることが判明。盛土直下より円礫、割石、目板瓦の堆積を確認。
- 1.15 19 円礫、割石、目板瓦の記録作業撤去。
- 1.21 25 円礫、割石、目板瓦の下位に旧護岸石積み及び河床面を検出。これを S-2 とし調査を実施。

- 1.29 作業部会の指示で、トレンチ幅を拡張。 *事務局 熊本河川国道事務所工務第一課、 S-2 の下位より旧石敷き (S-3) を検出。
- 1.30 旧石敷き (S-3) の調査。S-3 の埋没が河 川堆積によるものであることが判明。
 - 2.1 写真撮影、図面の作成を実施。調査終了。
 - 5) 平成 20 年度の調査
- 2.25 26 船着場の石段の撤去作業に伴い、ト レンチ1の掘り下げを開始。木杭の頂部を確認。
- 2.27 作業部会が実施され、根石の現状の記録、 写真撮影を行うよう指示があった。
- 2.28 3.1 トレンチ1で自然堆積層(地山) 及び木杭が地山に打ち込まれている状況を確認。根 石の写真記録を行う。
- 3.2-4 トレンチ 1 が湧水のために掘削できず、 先行してトレンチ2石段部の掘削を開始した。ト レンチ2は、トレンチ1よりも深い位置まで掘削 を受けていることが分かった。トレンチ3の立会 調査を行った。
- 3.7 トレンチ2の河床部の掘り下げを行い、加 工された石を検出した。
- 3.11-13 トレンチ1~3の記録作業を実施し た。トレンチ1の河床部を掘削した。
- 3.16-17 トレンチ1の壁面が崩落していたた め、除去作業を行った。トレンチ1の河床部で木 簡が出土した。トレンチ1~3の記録作業を行った。
- **3.18** トレンチ 1 の河床部を掘り下げ、土留め 状遺構を検出した。作業部会が行われた。
- 3.19 21 トレンチ 1 の河床部の記録作業を終 え、河床部トレンチはいずれも埋め戻された。トレ ンチ2,3で追加の写真記録を行った。

3. 調査の組織

【川尻地区文化財調査護岸設計検討委員会】

委員長 今村克彦(熊本県文化財保護審議会委員)

委 員 松本寿三郎(元崇城大学生涯学習部教授)

委 員 大本照憲(熊本大学工学部教授)

委員 西輝喜(熊本市南部地域歴史研究会会長)

委 員 熊本河川国道事務所工務第一課長

委 員 熊本県教育庁文化課長

委 員 熊本市教育委員会文化財課長

熊本県教育庁文化課、

熊本市教育委員会文化財課

【平成 16 年度・本調査】

発掘調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 島津義昭(文化課長)、倉岡 博(課

長補佐)

髙木正文(課長補佐・文化財調査 調査総括

第1係担当)

調査担当 坂田和弘、岡本真也(参事)、永

井孝宏(株)九州文化財研究所技師)

委託契約事務 国土交通省熊本河川国道事務所

【平成17年度・本調査】

発掘調查主体 熊本県教育委員会

調査責任者 梶野英二(文化課長)、倉岡 博

(課長補佐)

調査総括 髙木正文(課長補佐・文化財調査

第1係担当)

調査担当 坂田和弘 (参事)、永井孝宏

(九州州文化財研究所技師)

委託契約事務 国土交通省熊本河川国道事務所

【平成 18 年度・本調査】

発掘調查主体 熊本県教育委員会

調查責任者 梶野英二(文化課長)、江本 直(課

長補佐)

調査総括 髙木正文(課長補佐・文化財調査

第1係担当)

坂口圭太郎 (参事)、永井孝宏 (㈱) 調査担当

九州文化財研究所技師)

委託契約事務 国土交通省熊本河川国道事務所

【平成19年度・本調査】

発掘調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 梶野英二(文化課長)、江本 直(課

長補佐)

髙木正文 (課長補佐・文化財調査 調査総括

第1係担当)

坂田和弘(参事)、永井孝宏(㈱) 調查担当

九州文化財研究所技師)

委託契約事務 国土交通省熊本河川国道事務所

【平成20年度・本調査】

発掘調査主体 熊本県教育委員会

調查責任者 米岡正治(文化課長)、江本 直(課

長補佐)

調査総括
高木正文(課長補佐・文化財調査

第1係担当)

調查担当 坂田和弘 (参事)、永井孝宏 (㈱

九州文化財研究所技師)

委託契約事務 国土交通省熊本河川国道事務所

【平成 21 年度・本調査】

発掘調査主体 熊本県教育委員会

調查責任者 米岡正治(文化課長)、木﨑康弘(課

長補佐)

調査総括 村﨑孝宏(文化財調査第1係長)

調查担当長谷部善一(参事)、稲富陽子(㈱

九州文化財研究所技師)

委託契約事務 国土交通省熊本河川国道事務所

【平成 22 年度·整理、調查報告書作成】

発掘調査主体 熊本県教育委員会

調查責任者 小田信也(文化課長)、木﨑康弘(課

長補佐)

調査総括 村﨑孝宏(文化財調査第1係長)

調查事務 宗村士郎(教育審議員兼課長補

佐)、元島 茂 (課長補佐・総務係 担当)、山田京子 (参事)、松島

英樹 (主任主事)

整理担当 村﨑孝宏(文化財調査第1係長)、

長谷部善一(参事)、戸田紀美子 (嘱託)、藤本香織、今福英子、橋 本由美子、中村正子、木村ゆり子、

高田清香、中村典子(臨時)

【平成23年度・整理、調査報告書作成】

発掘調査主体 熊本県教育委員会

調查責任者 小田信也(文化課長)、川上勝美(課

長補佐)

調查総括 村﨑孝宏(文化財調查第1係長)

調査事務 水元敬浩(主幹・総務係長)、山

田京子(参事)、松島英樹(主任

主事)

整理担当 村﨑孝宏(文化財調査第1係長)、

長谷部善一(参事)、戸田紀美子

(嘱託)、藤本香織、中村正子、木 村ゆり子、高田清香、中村典子、 本田頼子、井上真優、樋脇逸子、 吉本裕美(臨時)

【平成24年度・整理、調査報告書作成】

発掘調査主体 熊本県教育委員会

調査責任者 小田信也(文化課長)、西住欣一郎

(課長補佐)

調查統括 村﨑孝宏(文化財調査第1係長)

調査事務 川上勝美(課長補佐)、中津幸三(課

長補佐・総務・助成班担当)、松 尾康延、稲本尚子(参事)、天草

英子(主任主事)

整理担当 村﨑孝宏(文化財調査第1係長)、

戸田紀美子、築出直美(嘱託)、藤本香織、中村正子、木村ゆり子、

高田清香、樋脇逸子(臨時)

専門調査員 (順不同、敬称略)

磯村幸男(文化庁文財部記念物課主任調査官)、 冨田克敏(近畿大学教授)、松本寿三郎(元崇城大学教授)、大本照憲(熊本大学教授)、今村 克彦(熊本県文化財保護審議会委員)、西輝喜 (熊本市南部地域歴史研究会会長)、家田淳一(佐 賀県立九州陶磁文化館)、青木勝士(熊本県阿 蘇地域振興局)、葛西宏安(熊本県文化財保護 指導員)、福留脩文(㈱西日本科学技術研究所 代表取締役・土木工学)、木下浩昭(熊本城文 化財指定石工)

調查協力者(順不同、敬称略)

文化庁、国土交通省本河川国道事務所、同緑川 下流出張所、熊本市教育委員会、川尻文化を考 える会、南部地区市民の会、川尻地区自治会連 合会、村田幸博(瑞鷹株式会社専務取締役)

第Ⅱ章 遺跡の概要

第1節 地理的環境

川尻船着場跡が所在する熊本市川尻は、熊本平野の西部、緑川の右岸に位置する。遺跡周辺の地形を概観すると、東側に肥沃な熊本平野が広がり、その奥に阿蘇外輪山に連なる高原地帯が展開する。熊本平野は、県下でも有数の大型河川である緑川、白川が約200万年前から現在に至る間に形成した沖積平野である。平野の中央部には水前寺、江津湖周辺の水郷地帯が広がり、その江津湖の湧水は平野の南側を西に流れ、有明海へ注ぐ。

現在でも豊富な水量を有する緑川の流れは、中流域で小さな蛇行を繰り返し、その両岸に河岸段丘を形成させつつ下流域に至る。下流に至ると蛇行も緩やかになり、その両岸も平坦な地形へと推移する。古くから低湿地であった川尻は、河川堆積に起因する粘質土、砂礫土が重層的に堆積することで形成された地域である。有明海へ注ぐその川の流れは、干拓地の形成に大きな影響を与え、中世頃から沿岸に位置する川尻・高瀬・八代は、天然の良港として発展するようになる。

周知のように、緑川の上流から下流域までの両岸には、多くの水制遺構が分布し、現在でもその残影を各所に見ることができる。川尻地区に残る石刎や汲水、石段構築の船着場、御船手渡しもその中の一つで、加藤清正による構築と言い伝えられている。

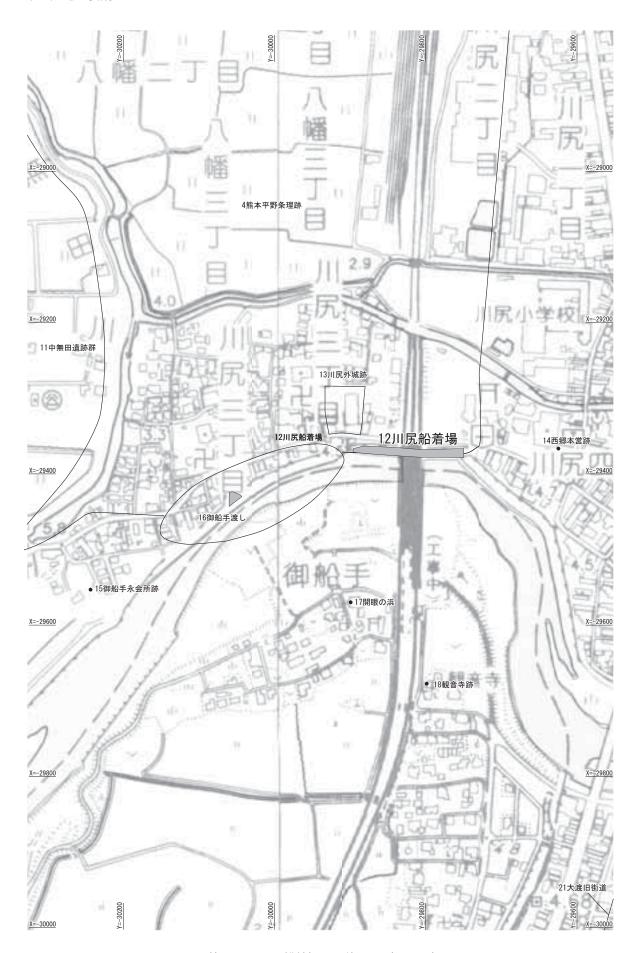
第2節 歷史的環境

川尻船着場跡の周辺の緑川水系の低湿地には、縄 文時代中期から後期にかけての集落が展開し、阿高 貝塚、黒橋貝塚、御領貝塚などの全国的にも有名な 貝塚が点在している。加勢川沿いに展開する御幸木 部遺跡群では、弥生時代から中世に至るまでの集落 が形成されている。特に中世には、大慈禅寺の勢力 を背景とした河港としての機能をなしていたと推測 される。このように、古くから河川による水運の利 便性の高さが注目され、川尻地域においても物資の 集積地としての機能を有していたことが窺える。 現在の緑川、加勢川の流れは、加藤清正による河 川改修の結果であり、鎌倉時代前期には、緑川と白 川とは当該地域で合流していたことが文献記録に見 られる。

中世前期には、在地領主であった河尻実明が建久 元年に河尻荘の地頭職となり、本格的に領地とし ての整備が進められる。その後、実明の子孫であ る泰明の庇護を受けて弘安5(1282)年に大慈禅 寺が順徳天皇の第3皇子であった寒巌義尹(1217-1300) によって創建され、緑川における大渡橋を建 設するなど都市としての機能が構築されていった。 中世川尻の繁栄は、有明海を中心とした物資の流通 や、後背に広大な穀倉地帯である熊本平野が広がる などの好条件を備えている川尻の立地に起因してい る。当時の武士団や寺院勢力などの政治的情勢から 見ても、日本国内だけでなく中国や朝鮮半島、東ア ジアとの重要な貿易都市であった。良好な河港の存 在により物資流通の拠点として機能し、それを背景 として河尻氏が勢力を伸ばしていったものと考えら れる。建久年間に、現在の川尻公会堂付近に河尻実 明が居城を構えた後、この地域を拠点とした。

鎌倉時代以後、南北朝期には、河尻幸俊が北朝の 足利尊氏方に付き、観応の擾乱により高師直から征 討を受けた足利直冬を「河尻ノ津」に迎えるなど、 有力な勢力となっている。その後、正平5年(1350) 南朝方の菊池武光に降伏したことにより、河尻氏は 徐々に衰退していくことになる。

近世になって、肥後半国の領主として加藤清正が 豊臣秀吉の命により検地を実施した。また、白川筋・ 緑川筋の大規模な河川改修を開始し、重要な貿易中 継港として川尻の河港整備を推進したものと考えら れる。天正17(1589)年に起きた天草5人衆一揆 の際の宇土小西行長への援軍や、文禄・慶長の役で は朝鮮への出兵など、軍港としての性格も持つよう になる。慶長5(1600)年の関ケ原の合戦におい て加藤清正は東軍に付き、西軍の小西行長の宇土城・ 八代城を攻略し、その後、肥後一国を領する大名と なった。加藤清正は、川尻地域の経営の拠点として、



第1図 川尻船着場周辺位置図(1/5000)

川尻外城に城代をおき、加悦飛騨守を任命し、川尻地域の経営を行った。天明8(1788)年「古城考」によると、元和元(1615)年の一国一城令により、肥後国内の南関の鷹ノ原城や葦北の佐敷城、水俣の水俣城などとともに城は破却されたと推測される。『新熊本市史 史料編 第1巻 考古資料』によれば、川尻外城の規模は東方向に細長く伸びる帯状形で、推定範囲は500m×250m程度とされている。南には加勢川が流れ、東にも蓮堀と呼称される沼地があり、城郭としての体裁をなしていたという。

加藤氏の肥後入国以降に河港としての整備が進められた川尻については、中国明代の『図書編』に八代・天草・宇土・軍浦・高瀬とともに「開懐世利」として記載されており、国際中継貿易港としてアジア諸国にも広く認識されていたことがわかる。

その後、川尻は加藤氏が改易され、細川氏が入国し、御府内の「熊本」と並び「高瀬」・「高橋」・「八代」・「川尻」は「五ヶ町」として町方支配の下、町奉行が置かれた。「官職制度考」によると、川尻町奉行は役高五百石物頭級の家臣が任命されている。高瀬や八代、高橋における町奉行の役高が二百石級であることから、川尻の扱いが別格であることが分かる。また、川尻町については加藤氏の時代から地子を免除されており、細川氏入国以降も税制的、経

済的優遇措置がとられた。

川尻には御船手と呼ばれる藩の船団員の組織が数 十隻の軍船とともに配置され、肥後藩の軍港として の様相もなしていた。

現在の公会堂付近にあった町奉行所の西側には、 9棟の御蔵が設置され、飽田・宅磨・上益城・下益城・ 宇土郡内の各々の手永から年貢米が集積された。川 尻・八代・高瀬で集積された年貢米の大半が大阪に 搬送されていた。このように近世期の川尻町は、多 くの物資の集散地としての機能をもった重要な地域 として船着場や御船手渡し、御蔵、その他の行政施 設や商業施設が集まり、河港都市として繁栄した。

その後、明治 20 年頃には三角西港が構築され三角航路が整備されたことで、港としての繁栄が翳りを見せる。また、この時期に三角西港からの物資搬送のため、同港と熊本との間に三角往還が整備された。現在、船着場の東側に橋脚が残され、加勢川の川中には杭列も見られる。川尻では、港としての機能が低下したことから、維持管理が十分になされず流入する土砂の堆積によって、大正時代には大船の入港が困難となった。さらに、昭和になると数度の河川改修が行われ、河港としての機能を果たさなくなり、それに伴って川尻の町もかつての繁栄を失い、衰退していった。



第3節 文献史料から見た川尻

川尻に関する文献史料は少ない。『新撰事蹟通考』の建久元(1190)年、河尻実明が地頭職を得たとの記事が初出である。また、河尻氏については、『宅磨文書』の「国内荘々名々坪付注文」に神蔵荘の惣公文とあり、鎌倉期に飽田南郷川尻(川尻郷)に勢力を持っていたことが知られる。この河尻氏は、同地を本貫とする源姓の在地領主で、国衙の在庁官人であったと考えられ、鎌倉時代初期には神蔵荘の荘務に携わっていた。

その後、幕府が国衙の政務や政治的機構を掌握していく中で、国衙の在庁官人から幕府の守護所役人となっていったと考えられ、北条得宗家との結びつきを強くすることで同地域での勢力拡大を謀っていった。文永の役後の建治元(1275)年、幕府による高麗への外征が計画された際、飽田郡南郷河尻地頭河尻兵衛尉が押領使(註1)として、御家人・非御家人の戦力に関する「注進状」や「請文」の取りまとめに当たったことが、『筥崎八幡宮御神宝記紙背文書(註2)』に見える。

この河尻荘にある大慈禅寺は、弘安5(1282) 年に地頭河尻泰明から大渡の北に伽藍地の寄進を受 け、順徳天皇(あるいは後鳥羽上皇)の第3皇子 寒巌義尹によって開祖された。寒巌義尹は、比叡山 に天台を学び、後に曹洞宗開祖の道元の門下となる。 2度の入宋の後、文永4(1267)年に帰朝し、博 多の聖護寺に在したが、文永6(1269)年肥後国 宇土郡古保里の素妙尼(河尻左衛門佐泰明の妹)の 招きを受け、如来寺を創建したとされる(『肥後国 誌』)。『大慈寺文書』によれば、河尻の大渡は「海 陸の都津」として「貴賎両岸に襲集し、前後に喧諍 し、人馬競い上る」と言われるほど、人や物資が集 散する一大港湾都市として繁栄していた。しかし、 この地は「白川、緑川二川が合流」し、「肩舟没し、 身命を失う」ほどの難所であったことから義尹は建 治2(1276)年、大渡の地に人民救済のために架 橋を発願し、弘安元(1278)年に完成させた。

その後、弘安 10 (1287) 年には、河尻泰明は大 渡橋の修造許可を幕府に求め、永仁 7 (1299) 年 鎮西探題北条實久が協力を命じ、幕府の支援を受けたことが、大慈寺遺文『鎌倉遺文』に見える。

大慈寺は正応元 (1288) 年、後深草上皇から朝廷御祈願寺としての勅許を得たり、永仁 2 (1294) 年義尹が伏見天皇から紫衣勅許を得るなど厚遇を受けている。このように幕府中枢得宗家と結びつきの強い義尹と大慈寺に対して、河尻泰明は寄進や庇護を行うことによって、得宗家との関係を強め勢力拡大を図ろうとしていたと考えられる。このことは、『大慈寺文書』にある「源泰明書状案」には、大慈寺への荘領寄進が北条時宗の菩提を弔うためであることや関東御祈祷のためであることが記されていることからも窺い知ることができる。

荘領を大慈禅寺に寄進することで、川尻の地は総 地頭による支配権が制限され、大慈禅寺及び河尻氏 の自由な都市として繁栄する。義尹及び大慈禅寺に よって幕府得宗家と結びついた河尻氏は、鎌倉時代 をとおして安定した勢力をもち続けた。

鎌倉幕府が滅亡して、南北朝の争乱期に至るま での河尻氏の動きについては、『志岐文書』の暦応 2(1339)年の記録や、『大友文書録』の康永元・ 興国3(1342)年の記録、『阿蘇家文書』の貞和 元・興国 6(1345)年の記録などに見られる。特 に、南北朝末期の室町幕府内で起こった観応の擾 乱(1350 - 1352年)では、足利直義の猶子であ る足利直冬が長門国探題に赴任する途中に高師直に よって追悼された際、河尻幸俊らが備後国鞆津から 肥後川尻の津まで逃がし、肥後へ迎え入れたことが 『太平記』に見える。幕府中枢の実力者である足利 直冬を、肥後川尻まで逃がすことができたのは、河 尻幸俊が備後鞆津にまで遠征できるほどの水軍を擁 していたことが推測される。その拠点である川尻は 河港都市として繁栄していたものと考えられる。そ の後河尻幸俊は、足利直冬党として活動し、観応元 (1350) 年に、詫磨宗直らと大和太郎左衛門尉城を 攻撃したことが『相良家文書』に記されている。

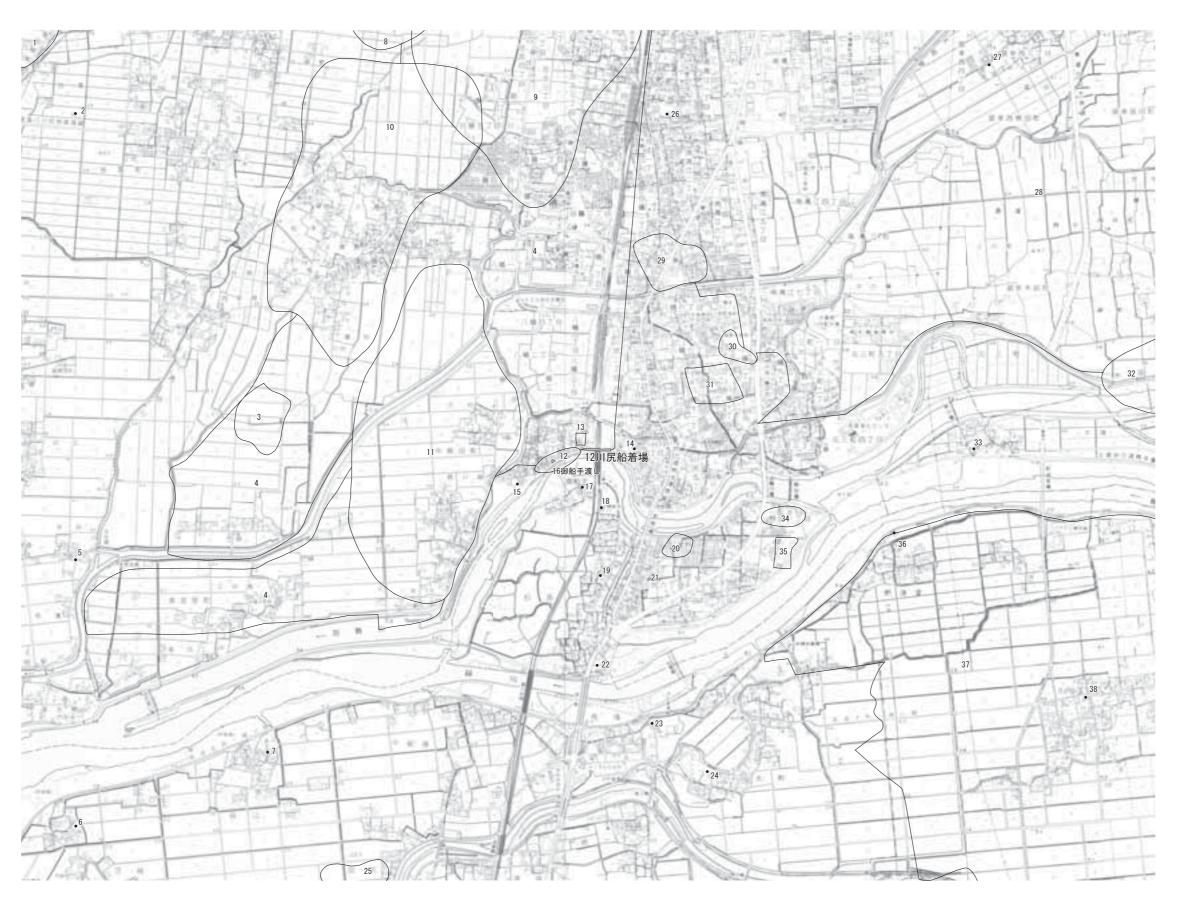
足利直冬が九州探題となり河尻氏は、直冬党の勢力拡大とともに自らの地位をかためていったが、九州内での内乱の激化と直義の死去により、河尻氏をはじめとする直冬党の勢力は急速に失われていっ

た。しかし、南北朝の争乱が終結した後も河尻氏は、 少なからず勢力を保ち、応永年間には河尻実昭、永 禄・天正の頃には河尻重兼の記録が見られ、戦国時 代頃までは河尻氏が川尻河港周辺を勢力下において いたと考えられる。この頃の川尻河港については、 中国明代の『図書篇』に「薩摩之北為肥後。横直 五百里。基舉為牙子世六、為阿麻国撤、為昏陀、為 一国撤介烏刺、為開懷世利、為達加什」とあり、そ の中に記載がある「開懐世利」は川尻のことと考え られる。

天正 16 (1588) 年に加藤清正が肥後に入国し、 肥後半国 19万5千石を領し、併せて秀吉の直轄領 の管理を任されていたとされる。肥後国内の直轄領 は中世からの貿易港である高瀬、伊倉周辺であるこ とから、川尻の地も直轄領だった可能性が考えられ る。 註1 律令時代の令外官で、戦乱時の兵士管理・統率のために任命される軍事的臨時職であったが、後に常置の職となり鎌倉幕府では国衙の軍事警察を担う職となった。

註2 紙が貴重品であったことから、反古や役割を 果たした文書は、漉きなおすか裏や余白を利用する ことが多かった。このように裏面に遺された文書を 「紙背文書」という。「筥崎八幡宮御神宝記紙背文書」 は、建治2(1276)年5月、大友頼泰が筥崎八幡 宮へ奉納したもので、その後本所にあたる石清水八 幡宮に伝来したもので、大友頼泰が鎮西東奉行を勤 めていたため手元に残っていた「注進状」などの紙 背が使用されたと考えられる。



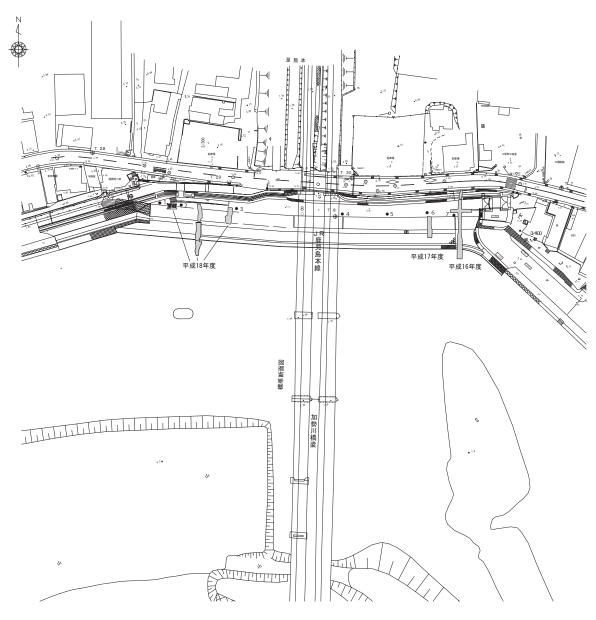


第2図 川尻船着場周辺遺跡分布図(1/20000)

第1表 周辺遺跡地名表

遺跡 番号	遺跡名	遺跡の時代
1	保徳寺 古墳~平安	
2	明神社古墳	古墳
3	八ノ坪	古墳~中世
4	熊本平野条里跡	古代・中世
5	本田の板碑	中世
6	福城寺跡	古代・中世
7	無量寿寺跡	古代・中世
8	古護藤	弥生~中世
9	白藤遺跡群	弥生~中世
10	護藤遺跡群	古墳~中世
11	中無田遺跡群	弥生・中世
12	川尻船着場跡	近世
13	川尻外城跡	中世
14	西郷本営跡	明治
15	御船手永会所跡	江戸
16	御船手渡し	
17	開眼の浜	中世
18	観音寺跡	古代・中世
19	円通寺跡	中世
20	学承院跡	平安
21	大渡旧街道	江戸
22	福勝寺跡	古代・中世
23	薬善寺跡	中世
24	普門寺跡	中世
25	国町	古墳・古代
26	南高江六地蔵塔	中世
27	明治天皇御幸御野立所	明治
28	熊本平野条里跡	古代・中世
29	南高江西馬出	弥生~中世
30	西椎田	古墳~中世
31	マツヒサ屋敷	古墳~中世
32	御幸木部遺跡群	弥生~中世
33	大正寺跡	中世
34	野田町旧寺跡	近世
35	大慈寺の層塔	鎌倉
35	大慈寺の宝篋印塔	鎌倉
35	大慈寺の宝塔	鎌倉
35	大慈寺境内	鎌倉
36	極楽寺跡	古代・中世
37	条里跡	古代・中世
38	金福寺	中世

第Ⅲ章 調査の成果



- 船繋ぎ石及び船繋ぎ石があったと推定される地点
- 撹乱土中より発見された船繋ぎ石

第3図 平成16~18年度発掘調査トレンチ位置図(1/1500)

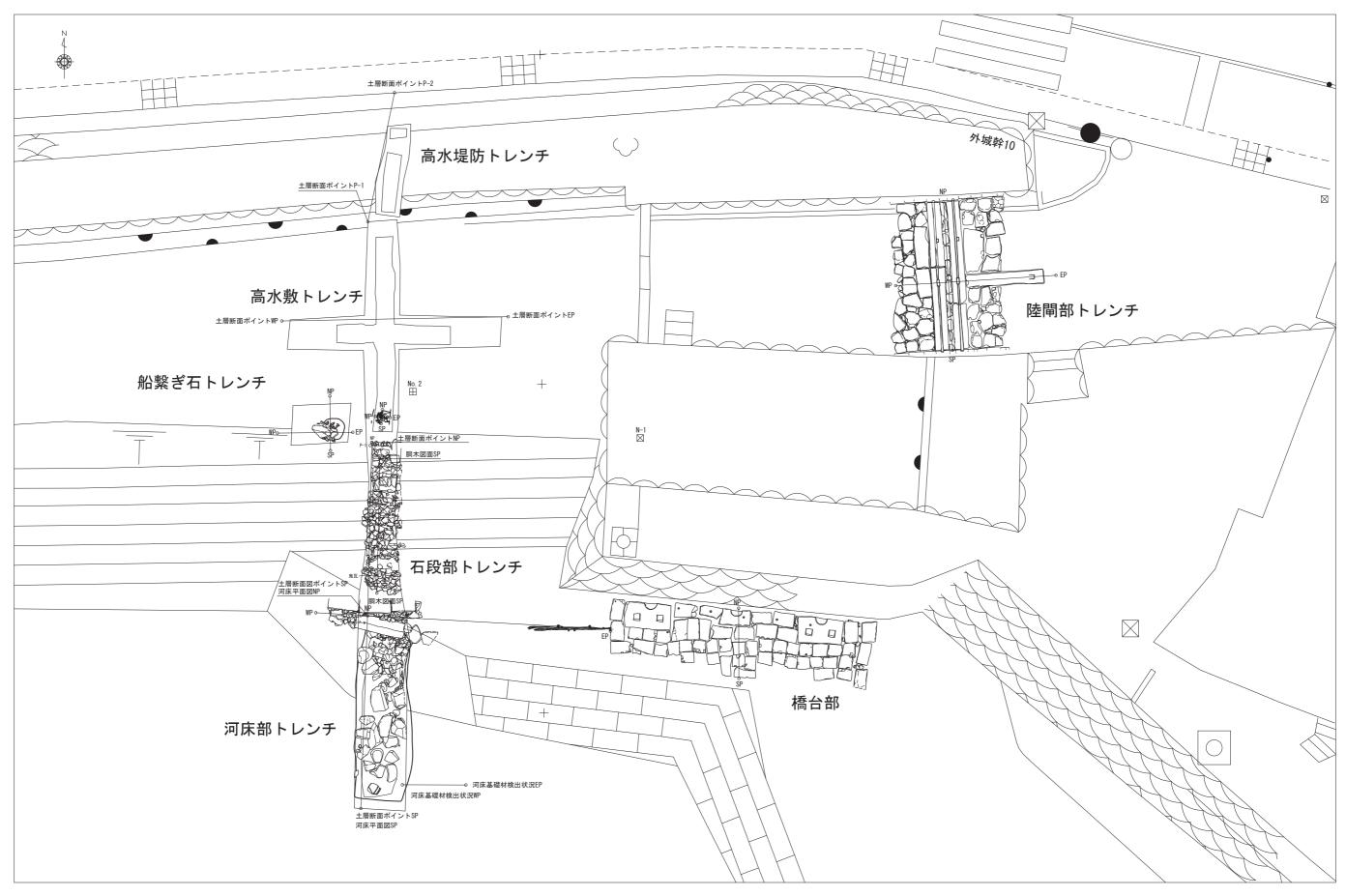
第1節 平成16年度の調査

1. 高水敷堤防トレンチ(第6図.高水堤防土層図)(1) 石積み(第7図)

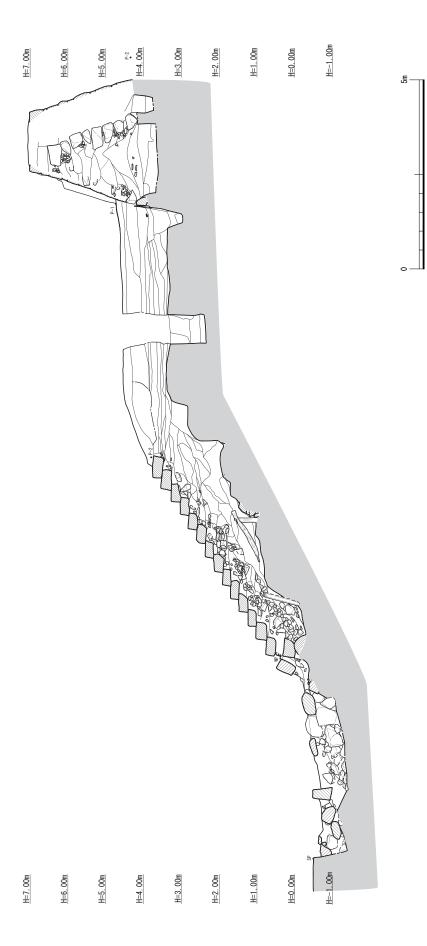
今回の調査により、道路側に2つの石積みを確認した。内側の石積みが築堤当初の石積みと考えら

れる。築堤当初の石積みは、布目崩しによる構築で、 高さは約2mを測る。石材個体の表面調整は「ゲンノウ」による表面整形である。確認された矢穴 の大きさは8cm程度と小さく、当該時期の矢の大 きさを物語っている。石積みの隙間には漆喰が充填 されていた。道路側には、築堤当初の石積み全面に

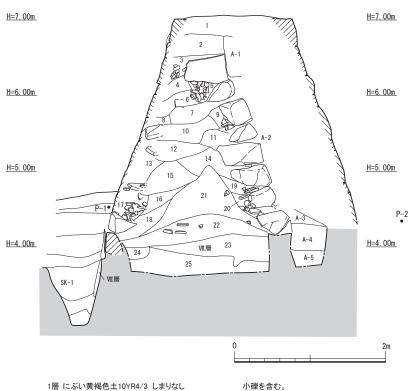
第1節 平成16年度の調査



第4図 平成16年度調査トレンチ位置図



第5図 高水敷堤防~河床部トレンチ土層断面図 (1/100)



2層 にぶい黄褐色土10YR5/4 しまりなし・やや粘性 3層 オリーブ褐色土2.5Y4/3 しまりなし 裹込間土 4層 オリーブ褐色土2.5Y4/3 粗砂を少量含む。 5層 裏込円礫5~10cm土をほとんど含まない。 6層 オリーブ褐色土2.5Y4/3 角礫の栗石漆喰の小片1~2cmを含む。 7層 オリーブ褐色土2.5Y4/3 ややしまる 粗砂を含み、漆喰の小片5mm~1cmを含む。 8層 オリーブ褐色土2.5Y4/3 粗砂を少量含む。 9層 オリーブ褐色土2.5Y4/3 ややしまりなし 角礫裏込石間土 10層 オリーブ褐色土2.5Y4/3 ややしまる・やや粘性 粗砂、漆喰を少量含む。 11層 オリーブ褐色土2.5Y4/3 ややしまる・やや粘性 粗砂を少量含み、灰色粘土ブロックを少量含む。 12層 オリーブ褐色土2.5Y4/3 ややしまる 漆喰塊を多量に含み、小礫を含む。 漆喰塊を含み、粘土ブロックを含む。 13層 オリーブ褐色土2.5Y4/3 やや粘性 14層 黄褐色土2.5Y5/3 ややしまる・やや粘性 15層 黄褐色土2.5Y5/3 ややしまる・やや粘性 粘土粒と少量の漆喰粒を含む。少量の粗砂2mm~1cm含む。 16層 黄褐色土2.5Y5/3 ややしまる・やや粘性 小礫を含む。 17層 黄褐色土2.5Y5/3 ややしまる 裏込間土 18層 黄褐色土2.5Y5/3 ややしまる・やや粘性 小礫を含む。 19層 黄褐色土2.5Y5/3 漆喰小塊1~5cmを含む。 やや粘性 20層 裏込間土 21層 暗灰黄土色2.5Y5/2 しまる・粘性 漆喰粒を含み、鉄分が沈着している。 22層 黄褐色土2.5Y5/3 ややしまりなし・やや粘性 角礫、瓦片、漆喰片を少量含む。 粗砂1~2mm、漆喰小塊、小礫、焼土粒を少量含み、 23層 黄褐色土2.5Y5/3 よくしまる・やや粘性 鉄分がわずかに沈着する。 24層 黄褐色土2.5Y5/3 よくしまる・やや粘性 焼土粒(5mm~1cm)をわずかに含む。 25層 暗灰黄土色2.5Y4/2 よくしまる・やや粘性 焼土粒及び炭化物粒(いずれも5~15mm)を少量含む。 堤防を造り直したときの裏込、角礫、円礫、を半々含み A-1層 土をほとんど含まない。 A-2層 暗オリーブ褐色土2.5Y3/3 しまり全くなし 裏込間土。なお裏込石の中には瓦片が少量含まれる。

第6図 高水敷堤防トレンチ土層断面図(1/50)

よくしまる・やや粘性

漆喰塊を含む。

漆喰粒(1~2cm)、少量の炭化物粒(5mm~1cm)瓦片を含む。

焼土粒及び炭化物粒(いずれも5mm~1cm)を少量含む。

A-3層 暗オリーブ褐色土2.5Y3/3 ややしまる

A-4層 オリーブ褐色土2.5Y4/3 ややしまる

A-5層 暗黄灰色土2.5Y4/2

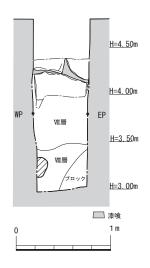
谷積みによる石積みが構築され、同時に川側の石積 みも2石ほど積み足されている状況が確認された。 また、石積みの構築に伴う胴木や捨石などの基礎材 は確認されなかった。

(2) 石積みの下部構造

石積みの下部構造は、V、VI層及びVII層の一部を掘り込み、簡単な整地を行ったうえで高さ80cm程度の土山を造成し、両側石積みの最下段の石を設置、裏込め材の充填と石材積み方とを交互に行っている。裏込め石は少なく、土砂による充填が主体で、その中には多くの漆喰がみられる。これは漏水対策の一部と考えられる。当初の堤防は、高水敷への導線が現在よりも多く設けられていた。今回の調査区の外側でみられる石積みは、その頃の所産と考えられる。構築にもやはり基礎材などの下部構造は存在せず、ある程度の整地を行ったうえで、VII層上に構築される。裏込め材には5~10cm程度の円礫を使用している。

(3) まとめ

高水敷堤防トレンチの成果としては、WI層から古い技法を用いた瓦が出土した点が挙げられる。先述したとおり、WI層は石段構築の際の地業と考えられる。出土点数はそれほど多くないが、平瓦、丸瓦が確認された。丸瓦の凸面には工具による強いナデ調整、凹面にはコビキA痕と吊り紐痕が確認され、近世初期の瓦製作技法の特徴を示している。



第7図 高水敷堤防石積実測図 (1/40)

2. 高水敷トレンチ (第8図.高水敷トレンチ土層図) 高水敷きの平場部分にトレンチを設定し、掘削作 業を行った。検出した層序は以下のとおりである。

I 層:表土①~④

Ⅱ層:灰色土(水性堆積物)

Ⅲ層:黄褐色土(14段目天端面·上面硬化)

IV層:暗オリーブ褐色土(水性堆積物 堤防全面 SK-1の検出面)

V層:黒褐色土(13段目天端面・上面硬化)

VI層:暗褐色土(しまりなく、貝類含む)

Ⅷ層:暗褐色土(構築面・切り土面である)

Ⅷ層:灰黄褐色土(中世の遺構検出面・SK-3検出面)

IX層:黒褐色土

(1) 硬化面(Ⅲ層上面)

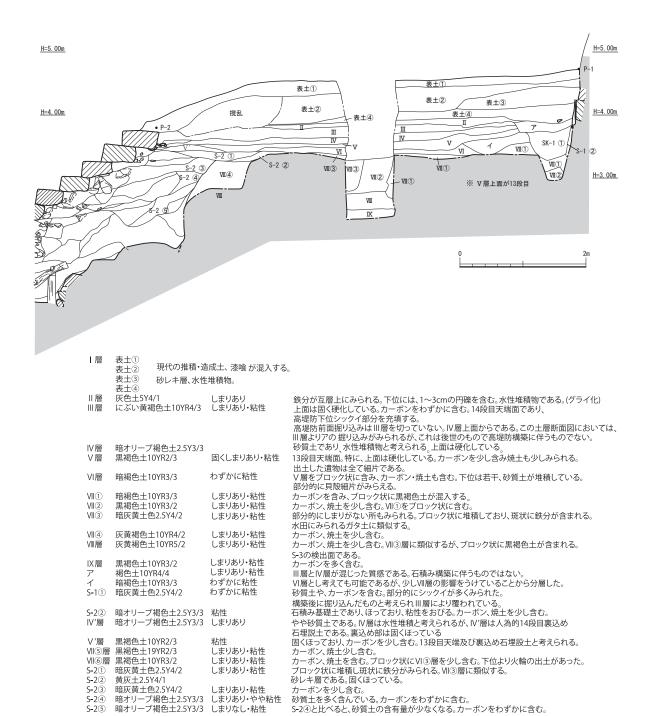
地域住民を対象とした聞き取り調査によると、戦後しばらくの間、材木運搬・販売のため天草からの帆船が盛んに往来し、今回対象となった船着場を使用していたという。その後、昭和30年代になると河床環境が変化し、船の出入りが困難となった。Ⅲ層上面でみられた硬化面は、戦後しばらくの間使用されていた面で、河川の氾濫による堆積の可能性もあるが、長時間使用されていたと考えられる。Ⅳ層の上面も比較的硬化しているが、Ⅲ層やⅤ層ほどではなく砂質土・水性堆積物である。

(2) SK - 1

IV層上面から SK-1 の掘り込みがみられ、Ⅲ層がそれを覆っている状況が確認された。SK-1 の埋土は全体的に砂粒を多く含む暗褐色土で、部分的にIV、V層のブロックが混入し、漆喰が多量に検出された。この漆喰は高水堤防石積みの間詰材と考えられ、漆喰が大量に出土している状況や遺構の検出位置から、SK-1 は堤防石積みに伴う遺構と考えられる。しかし、あくまでも限られたトレンチ調査での所見であるので、この評価については今後の課題としたい。

(3) 硬化面(V層上面)

石段 13 段目の天端レベルの V層上面において硬化面を検出した。上面には小礫や鉄分がみられ、その堆積は北方向にやや勾配を持つ。 VI層はややしま

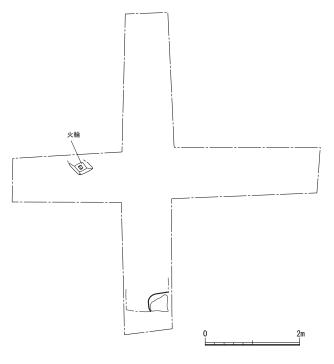


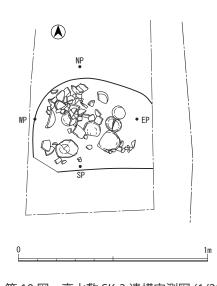
S-2(5)

S-2④と比べると、砂質土の含有量が少なくなる。カーボンをわずかに含む。

第8図 高水敷トレンチ土層断面図 (1/60)

[※]S-3埋土黒褐色土10YR3/1 しまりあり・粘性が強いカーボンを少し含む。※VII層上面が石段構築面と考えられる。VII層の上面は、すべて硬化しており、鉄 VII層の細分にあたっては、部分的な掘削から得られた断面により行った。 土質、色調の相違は、VII層の堆積に起因するものか、VII層上面での構築によるものかは難しい結果となった。





第 10 図 高水敷 SK-3 遺構実測図 (1/20)

第9図 高水敷トレンチ実測図(1/80)

りのない砂質土で近世の陶器片が出土している。

(4) 遺構構築面(第9図)

WI層からは近世以降の遺物は認められず、出土したのは中世の遺物のみであった。また、WI層の形成は人為的なもので、明らかに盛土である。WI層上面から五輪塔火輪が出土したことからも、WI層が盛土であるという傍証となろう。火輪の出土状況は器体がやや傾いた状態で、周囲からの掘り込みは確認されなかったことから、廃棄されたと考えられる。

VII層の形成については、出土した遺物の帰属が盛土段階のものなのか、それとも盛土以前に包含されていたかは不明であり、VII層の成因を考える場合、このような遺物の出土状況や断面構造から石段構築の際の地業と判断される。VII層はV層同様に北方向へ勾配を有し、また今回の目的である石段構築の切土の痕跡も、VII層の上面において検出された。

(5) SK - 3 (第 10 図)

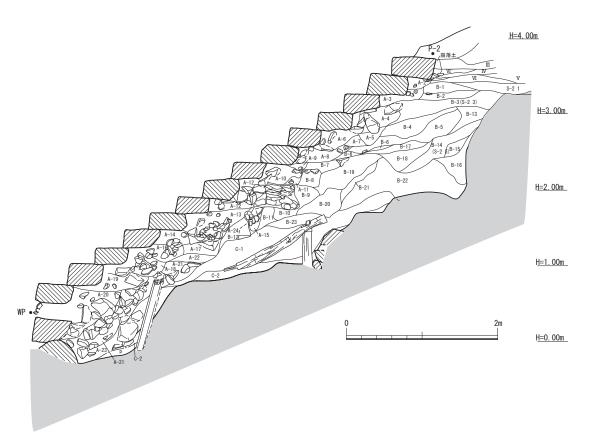
Ⅷ、IX層の確認は、調査区の一部を深堀することで行った。両層とも人為的な盛土である。Ⅷ層上面で、SK-3(土坑)を検出した。その規模は長軸60cm、短軸40cm(残存長)、深さ15cmの浅い掘り込みで、土師坏・小皿・大坏が多量に出土した。

出土した遺物は小皿・坏・大坏の3器種が確認されている。遺物には板目の圧痕が底部に、見込み部分にナデ調整が認められる。製作技法や、各器種口径の大きさなどの特徴から、13世紀末~14世紀初め頃に比定される。

(6) まとめ

調査において検出したⅢ層、V層の2つの硬化面は、どのように石段の構築に関連するのか、断片的なトレンチ調査では、その全容を把握するに至らなかった。高水堤防の築堤が大正4年であるので、SK-1が堤防に伴う遺構であれば、Ⅲ層の充填がそれ以降という解釈が可能であろう。聞き取り調査によれば、昭和30~40年代から高水敷が荒廃しはじめ、昭和50年代にはゴミ捨て場となり現地形へ推移したという。また、隣接する若松屋の改築は、石段へも多少影響を与え、石段の再構築を行った可能性もあるという話も伺った。

以上のように、14段目の面での機能が比較的長時間あったことは、検出した状況や層位的にも確認された。このような状況から確実にいえる事は、いずれの硬化面も石段構築当初のものではなく、おそらく河川の氾濫の度に、高水敷平場部分の整地、再



A-1 黒褐色土10YR2/2	しまりなく、やや粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。
A-2 黒褐色土10YR3/2	しまりあり、やや粘性をおびる。カーボン、鉄分をわずかに含む。部分的に∇'層かブロック状に混入する。
A-3 黒褐色土10YR3/2	非常にしまっており、やや粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。2~5cm程度の裏込め石を含む。
A-4 暗褐色土10YR3/3	非常にしまっており、やや粘性をおびる。カーボン及び、土師細片を含む。10~30cm程度の裏込め石を含む。
A-5 黒褐色土10YR3/2	しまっており、0.1~0.5cm程度の砂粒を含む。
A-6 黒褐色土10YR3/2	しまっており、0.1~1cm程度の砂粒を多く含む。カーボンをわずかに含む。10~30cm程度の裏込め石を含む。
A-7 暗褐色土10YR3/3	しまっており、やや砂質土である。
A-8 暗褐色土10YR3/2	しまっており、やや砂粒を多く含む。5~30cm程度の裏込め石を含む。
A-9 黒褐色土10YR2/3	ややしまりなく、カーボンをわずかに含む。1~5cm程度の裏込め石を含む。
A-10 暗褐色土10YR3/3	しまりあり、粘性をおびる。カーボン及び鉄分を少量含む。10~30cm程度の裏込め石を含む。
A-11 暗褐色土10YR3/3	しまりあり、粘性をおびる。カーボン及び鉄分をわずかに含む。1~5cm程度の裏込め石を含む。
A-12 黒褐色土10YR3/2	(裏込め間土)しまりあり、非常に粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。10~30cm程度の裏込め石を多く含む。
A-13 暗褐色土10YR3/3	(裏込め間土)しまりあり、非常に粘性をおびる。鉄分及びガタ土(B層)をブロック状に含む。 B層を切り、埋め戻している状況が観察できる。
A-14 黒褐色土10YR3/2	(裏込め間土)しまりあり、非常に粘性をおびる。鉄分及び砂質土が、混入する。5~30cm程度の裏込め石を含む。
A-15 暗褐色土10YR3/3	ややしまりあり、非常に粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。裏込め石は一切含まない。
A-16 暗褐色土10YR3/3	しまりあり、非常に粘性をおびる。カーボン及び砂粒を少し含む。
A-17 暗褐色土10YR3/2	しまりがあり、非常に粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。A-15層に類似する。
A-18 黒褐色土10YR3/2	しまりがあり、非常に粘性をおびる。鉄分を多く含む。5~20cm程度の裏込め石を含む。 砂粒が斑状に多く含まれ、本来の裏込め間土は流出。
A-19 黒褐色土2.5Y3/1	ややしまりがあり、粘性おびる。グライ化が進んでいる。鉄分を多く含む。 A-18層同様に本来の裏込め間土は流出しており砂粒が多く含まれる。
A-20 黒褐色土2.5Y3/1	ややしまりがあり、粘性おびる。A-19同様にグライ化が進み、鉄分を多く含む。 本来の裏込め間土は流出。
A-21 黒褐色土2.5Y3/1	ややしまりがあり、粘性をおびる。ガタ土(B層)を基本とする。砂粒が斑状に含まれ、粗朶や竹類が含まれる。
A-22 黒褐色土10YR3/2	しまりがあり、非常に粘性をおびる。鉄分をわずかに含む。
A-23 黒色土2.5Y2/1	しまりがあり、粘性をおびる。部分的に?砂粒を多く含む。A-21層同様に、粗朶を少し含む。
A-24 暗褐色土10YR3/2	しまりがあり、粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。 (B-12)も同様

*鉄分の付着は、湧水によるものである。粗朶の出土は杭頭の検出面と同レベルであり、杭との関係が考えられる。 A-21より上は裏込めの入り方から考えて、石段裏込め時のものと推測される。分層においては、土質や裏込め石の量により行い、9・10段目を境に様相の違いが認められた。

第11図 石段部トレンチ土層断面図(1/50)

石段部トレンチ土層注記

B-1 黒褐色土10YR3/2 しまりあり、粘性をおびる。カーボン及び砂粒を少し含む。

B-2 黒褐色土10YR3/2 しまりあり、カーボン及び遺物細片をわずかに含む。粘性をおびる。

B-3 黒褐色土10YR3/2 ややしまりあり、粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。

B-4 暗褐色土10YR3/3 しまりあり、粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。砂粒を多く含む。A-4層に類似する。

B-5 黒褐色土10YR3/2 ややしまりがあり、粘性をおびる。砂粒を多く含む。B-4層に類似する。

B-6 黒褐色土10YR3/2 しまりがあり、やや粘性をおびる。砂粒を少し含む。

B-7 暗褐色土10YR3/3 しまりがあり、粘性をおびる。カーボン及び砂粒をわずかに含む。 B-8 灰黄褐色土10YR4/2 しまりがあり、やや粘性をおびる。カーボン、砂粒をわずかに含む。

B-9 黒褐色土10YR3/2 しまりがあり、非常に粘性をおびる。

B-10 黒褐色土10YR3/2 ややしまりがなく、粘性をおびる。カーボン、砂粒をわずかに含む。

層中より、中世の青磁片が出土。

B-11 黒褐色土10YR3/2 しまりがあり、やや粘性をおびる。砂質土が基本となる。

B-12 A-14参照

B-13 S-2 ④層参照

B-14 S-2 ⑤層参照

日1432 回信参照

B-15 黒褐色土10YR3/2 しまりがあり粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。

B-16 暗褐色土10YR3/3 しまりがあり、非常に粘性をおびる。鉄分、カーボン、遺物細片を少し含む。

B-17 暗褐色土10YR3/3 砂質土、しまりあり。

B-18 黒褐色土10YR3/2 しまりがあり、非常に粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。

B-19 暗オリーブ褐色土2.5Y3/3 しまりあり、粘性が強い。鉄分が斑状にみられる。カーボンをわずかに含む。

B-20 暗オリーブ褐色土2.5Y3/3 しまりがあり、粘性をおびる。鉄分が少しみられ、砂粒を多く含む。

B-21 黒褐色土2.5Y3/1 しまりがあり、粘性が強い。鉄分が斑状にみられる。

B-22 暗オリーブ褐色土2.5Y3/3 しまりがあり、非常に粘性が強い。鉄分が斑状にみられる。

B-23 黒褐色土2.5Y3/2 しまりがあり、粘性をおびる。砂粒を多く含む。

C-1 黒褐色土2.5Y3/1 しまりがあり、粘性をおびる。

C-2 黒褐色土2.5Y3/1しまりがあり、非常に粘性が強い、ガタ土D 灰色土5Y4/1しまりがあり、粘性をおびる。旧河床土

構築が頻繁に行われたと推測される。VI層から出土 裏込め石の検出を行った。その結果、確認された裏した近世陶磁器は、数度の天端面の形成と整地が少 込め石の状況は、石段最上段(14 段目)・上段部(10 なからず行われたことを示すものである。 ~ 13 段目)・下段部(1~9 段目)とでは裏込め

3. 石段部トレンチ (第11図)

(1) 石段

石段本体の概観調査として、石段個々の表面調整 観察を行った。その結果、14段目石段の表面調整は、 表面、裏面ともに「ゲンノウ」によるはつり整形で ある。その他の石段 1 ~ 13 段目の表面調整は、ノ ミによる器面整形である。石段の噛み合わせ部分の 調整には、さらに丁寧なノミ整形がみられ、石段が 滑りにくくするための工夫が施されていた。

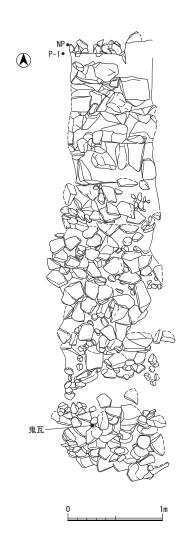
(2) 裏込め石(第12図)

石段の撤去に伴い石段個々の裏面の形状観察を 行った。裏面の調整は、表面の丁寧な調整と異なり 形状はさまざまで「ゲンノウ」によるはつり調整で ある。

石段の撤去作業が終了した後、高水敷平場から河 床までトレンチを南北に伸長するかたちで設定し、 裏込め石の検出を行った。その結果、確認された裏込め石の状況は、石段最上段(14 段目)・上段部(10~13 段目)・下段部(1~9 段目)とでは裏込め石の形状や、石材が異なることが判明した。最上段で14 段目の裏込め石は、石段14 段目に見られる石材の加工片であろうか岩質が類似しており、割り肌の5~20cm程度の石片を使用し、石段の下部に裏込め材というより、石段のすわりを安定させるために充填されていた。

中段部 13~9 段目の裏込め状況は、10~50cm の大きな円礫を使用している。さらに、30cm を超える大きな礫は意図的に配石され、これは石段の強度確保と、安定を保つためと考えられる。

下段になると、河床に見られるような径 5 ~ 20 cm程度の円礫を使用し、厚くかつ密に充填されている。このような裏込め材の充填方法の相違は、潮位の変動に起因するものと考えられ、これにより近世期の潮位の想定が可能であろう。なお、現在の最高潮位は石段 10 段目位である。



第12図 石段部裏込め石実測図(1/40)

(3) 土層の堆積状況

石段の構築下部構造の把握が、調査の最大の焦点であり、その手がかりを得るために石段部分を縦断するようにトレンチ調査を行った。個々の石段や、 裏込め材の状況については上記のとおりである。ここでは、確認された土層や出土した遺物について説明を行う。

今回の土層確認において、当初想定されていた裏込め石間土や、構築時の高低差解消のための整形土、 「四層上面から確認された切土ラインが、基礎構造上 どのように構築されたのか把握するため、裏込め石 が充填された層直下の層を A ~ C 層に細分した。

① A層

A層の堆積は、石段直下より確認された。石段の 最終据付時の裏込め石設置に伴うものである。土質 は水の影響も考えられるが、大きく粘質土と砂質 土に分けられる。裏込め石間土は、基本的に粘質土 である。砂質土が見られるのは、根石や石段1~9 段目付近の石段背後の一部分で、湧水や潮位による 影響であろうが、本来は粘質土が充填されていたと 考えられる。近世の肥前陶磁器が多く出土した。

② B層

B層はA層と異なり、裏込め石をほとんど含まない。B層の堆積は石段6段目付近から上段部にかけて確認された。A層よりさらに粘質を帯びる土質で、鉄分を斑状に含むことに特徴がある。B層の下位には、擂鉢状に整形された痕跡が部分的に確認された。また、上段部にかけては版築状に地業が行われている様子も窺える。

③ C層

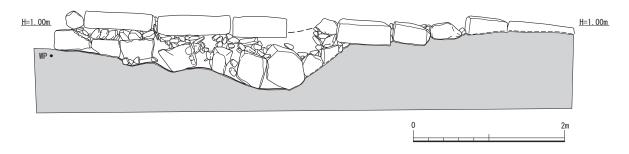
C層の堆積は「ガタツチ」で構成され、一部ブロック状に褐色粘質土が混入し、粗朶が層上位に包含される。胴木検出部分の周囲には、径 50cm 程度の礫が充填されているのを確認した。

(4) 胴木の検出(第15・16図)

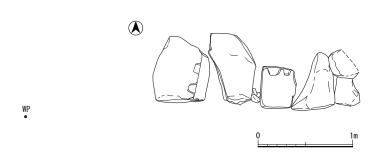
B層下位から C 層上位にかけて、2 本の胴木と木 杭を検出した。胴木は城郭石積みの基礎構造で、石 積み過重の分散を目的としたもので、その種類は梯 子胴木・枕胴木などがある。

今回検出した胴木は河床に向かって傾斜する胴木と、縦に打設された杭が一体となり設置されている。胴木と木杭との継ぎ手は、「ホゾ」と「ホゾ穴」による。「ホゾ穴」の形状は長軸 10cm、短軸 4cm程度の方形を呈する。斜めに設置された胴木の設置角度は 12 度と 28 度である。その長さは 120cm程度、径は 12~15cmを測る。表面の整形には面取りがなされていた。

縦に打設された杭は、胴木本体の北側、胴木部分、 南側にてその頭部のみ検出した。木杭の長さは検出 した残存長で1mを測る。南側に木杭が集中的に みられ、且つ打設木杭の周囲には竹類がまとまって 確認された。胴木同様に面取りがなされ、杭の断面 形状は六角形と考えられる。今回の調査では列とし て木杭を検出することはできなかったが、胴木の全 面にまとまる木杭は、川の流れと平行するよう土留



第 13 図 石段部実測図 - 根石・一段目 - (1/50)



第14図 石段部根石実測図(1/40)

め的な役割を果たしていたと推測される。

4. 河床部調査

河床部の調査は低水護岸工事と並行し、掘削部分の写真撮影及び出土遺物の回収作業を行った。写真撮影は河床捨石の検出時を1回目の撮影とし、その撤去後に2回目の撮影を行う予定であったが、工事の施工方法や工程上、2回目の撮影を石段根石撤去後に行い、さらに最終的な床掘完了時に3回目の撮影を行うことでその成果とした。また、遺物の回収は重機による河床掘削時の立会を行い、出土した遺物は出土層位ごとに取り上げを行った。

今回の河床の調査により「ガタツチ」の下位に粗 朶や木材を包含する層が確認された。検出された木 材には加工痕が認められ層形成は人為的であり、捨 石間に充填され、上位に設置された捨石や石段の沈 下防止を目的としたものと考えられる。

5. 河床部トレンチ (第 17.18.19 図)

閉め切りにより河床環境の観察と、河床に散在する陶磁器の回収は、非常に大きな成果をもたらした。 現状の河床環境は、河川堆積土砂が石段部にまで及 び、石段1段目まで埋没している部分もみられる。 また、石段材と思われる石材が、河床堆積土に埋没 していた。

河床トレンチは、高水敷部にて設定したトレンチを、そのまま河床まで伸長した範囲で設定した。河川堆積物の除去を行い、捨石と敷石構造の確認を行ったが、掘削の結果、捨石の残存状況が悪く敷石や捨石構造は認められなかった。そのため、調査では河床での石段構造に伴う基礎やプライマリーな捨石の検出に努めた。

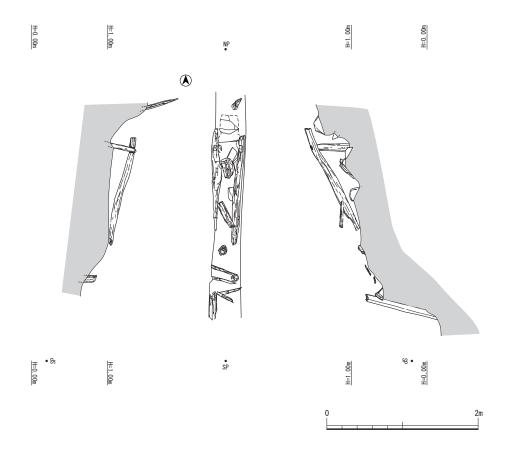
(1) 土層の堆積状況 (第 18 図)

土層の堆積は、大きく3層に分層できる。上位から現在の遺物を包含する①表土、②砂礫層(河川堆積物)、③「ガタツチ」である。

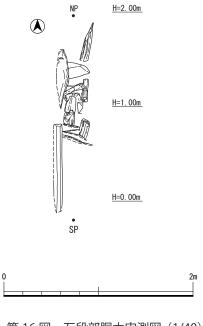
①表土の堆積は厚く、下流側では薄くなる。多量 の陶磁器類や、寛永通宝、瓦、現代の通貨が出土した。

②層の堆積は、河床へと傾斜するように堆積している。①層同様に多くの陶磁器類が出土した。また、 矢穴がみられる礫も多く検出された。

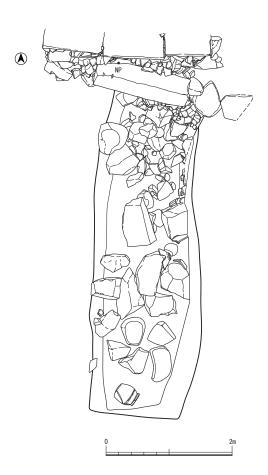
③層には、多くの捨石が確認された。



第 15 図 石段部木杭実測図(1/50)

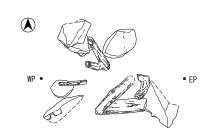


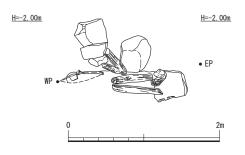
第 16 図 石段部胴木実測図 (1/40)



HE1.00m HE1.00m HE1.00m HE1.00m HE1.00m HE1.00m HE1.00m HE1.00m HE1.00m HE1.00m

第17図 河床部捨石実測図(1/60)





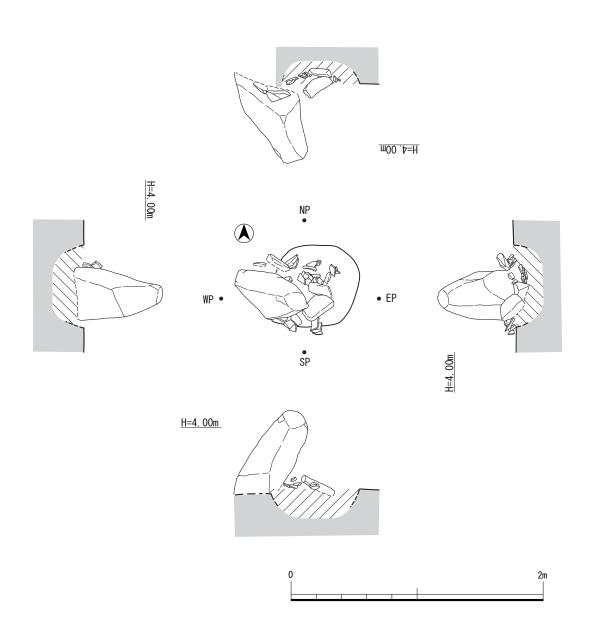
第19図 河床部基礎材実測図(1/50)

(2) まとめ

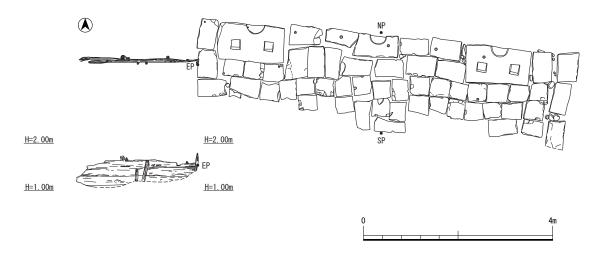
確認した堆積層の状況から①~②層については、 比較的新しい堆積と考えられる。また、③層に含まれる比較的大きな礫は、構築当初のものと考えられ、 それより上位層は河流により原位置を保っていない ものと判断される。捨石の重なり方や出土状況に規 則性は認められない。河床で確認した捨石の矢穴は、 非常に大きく幅12cmほどである。

6. 船繋ぎ石トレンチ (第20図)

高水敷トレンチで確認したⅢ層上面において、船繋ぎ石の周囲に根石を検出した。また、部分的にⅢ層を掘削したところ、Ⅳ層の上面で掘り込み面を確認した。現状の船繋ぎ石は東側にやや傾いており、検出した根石と掘り込みは船繋ぎ石の東側に認められた。調査は、根石とそれに付随する掘り込みの確認で終了した。



第20図 船繋ぎ石実測図(1/30)



第21図 橋台部トレンチ実測図(1/80)

7. 橋台部トレンチ (第21図)

石段の東側に存在する橋台は、南北に横断する三角往還の一部であり、三角開港前後の明治 20 年代の構築と考えられる。連接ブロックの撤去後、人力により検出作業を行い、橋台の全面に石積みを取り巻くように石敷が検出された。石材は長軸 1.2 m、短軸 0.6 m程度の方形石材と、その中央に位置する長軸 0.6 mの石材が橋台基礎の基本となり、周囲の石敷がその控えとなる。基礎となる石材には、橋柱を設置するための穴が半円形、方形に掘り込まれている。周囲の石畳は東西方向に 3~4 列を基本とし、整然と敷かれている。確認した矢穴は幅 8~9cmほどであった。

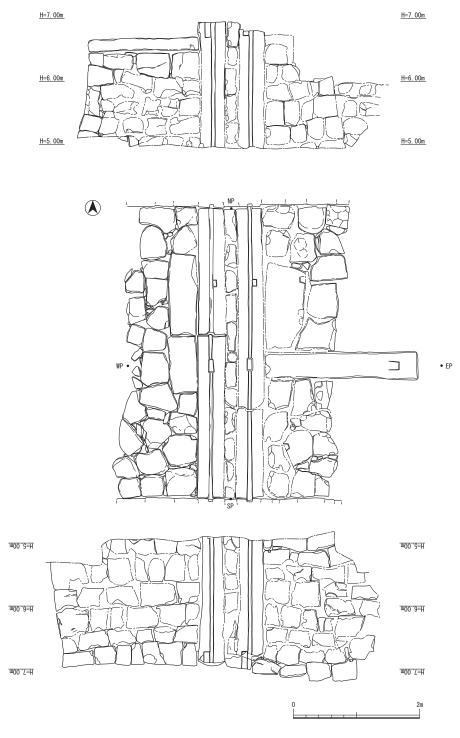
石敷の西側には、一連の構造物と考えられる板材 を検出した。おそらく、土留材であると考えられる。

8. 陸閘部トレンチ (第22図)

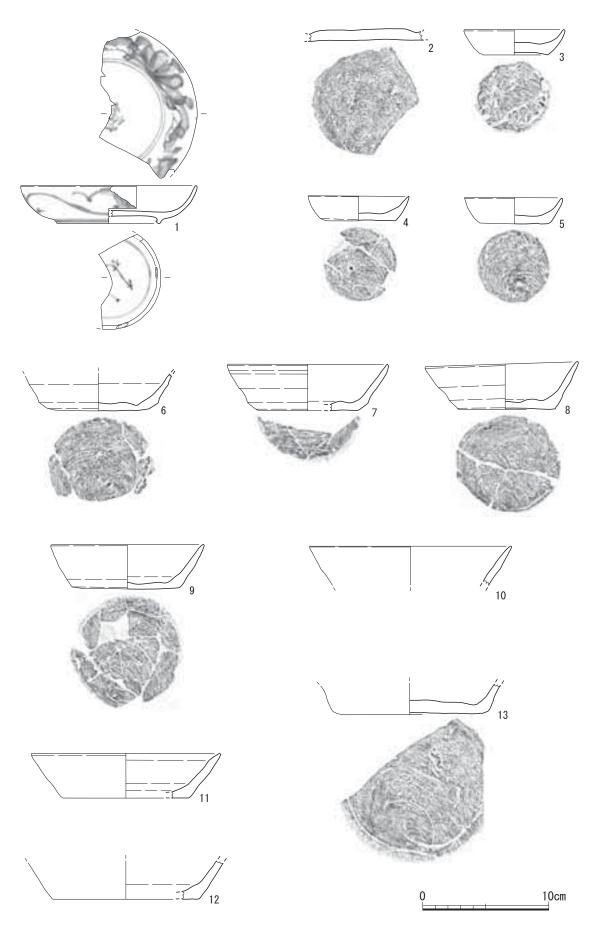
今回の調査区において、旧陸閘門を検出した。その規模は南北方向 4.6 m、東西方向 4.6 m(東側突出部を含む)を測る。その構造は中央に堰板設置受石が計 4 石配置され、中央から出口である東側へ突出する 1 石が、堰板設置受石と直行するように配置される。この 5 石が基本となり、堰板設置受石の周囲に石敷きが取り巻いている。堰板の構造は、堰板設置のための溝が 2 条あり、その幅は 6cm で

ある。

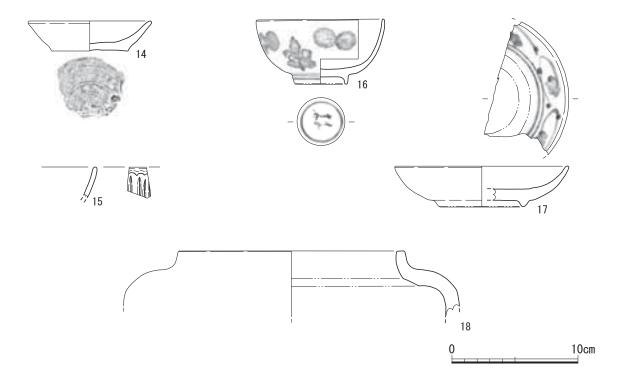
堰板の長さは南側2 m、北側2.5 mを測り、その中央には柱が設置される。柱設置のため「ホゾ穴」が穿たれていることから、設置されるべき柱にもそれに伴う「ホゾ」があったと考えられる。柱材については木製、石製いずれを使用していたかは不明である。その高さは両側の石積みより、約2 mと推定される。石敷き構造の中で、東側に突出する部分の先端に、斜めに穿たれた穴が確認された。



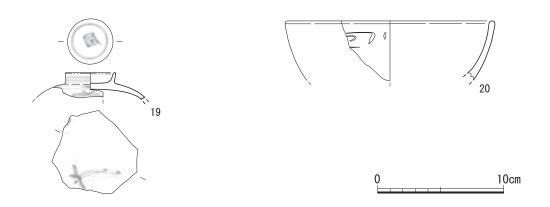
第 22 図 陸閘部トレンチ実測図 (1/60)



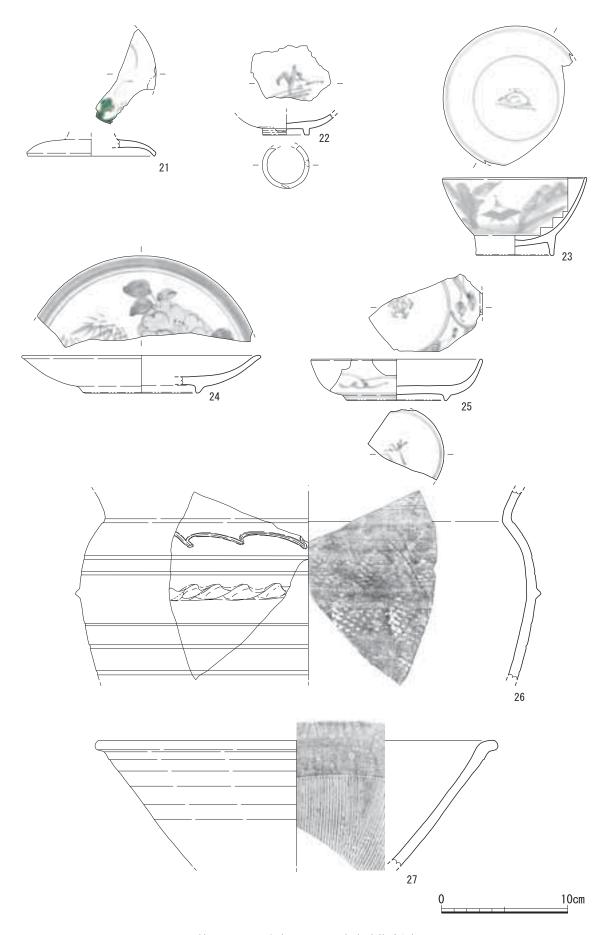
第 23 図 高水敷 SK-1(No.1) • SK-3(No.2 \sim 13)出土遺物実測図



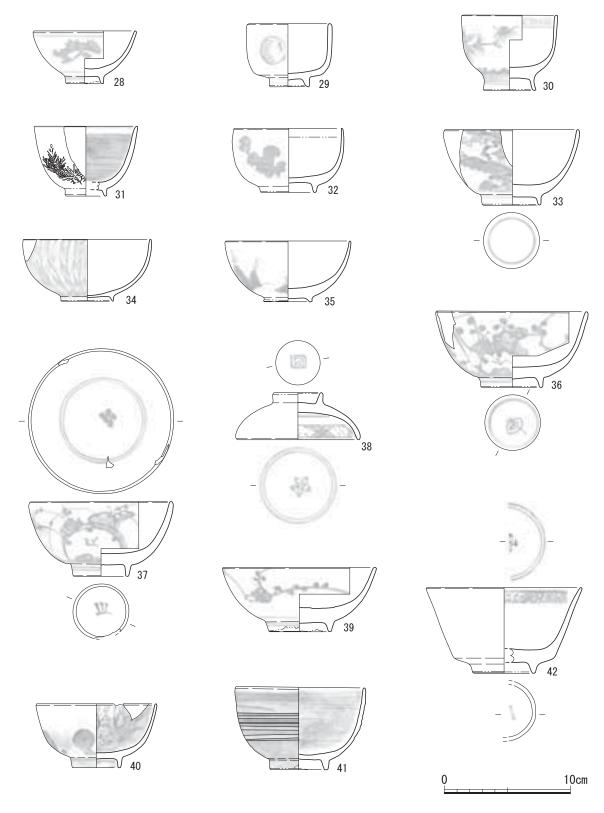
第24図 高水敷トレンチ出土遺物実測図



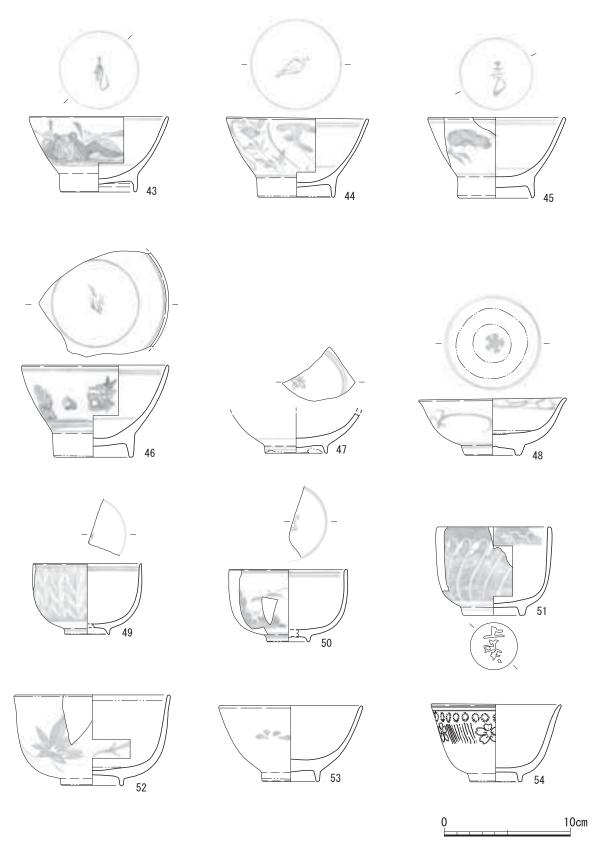
第 25 図 石段部 SK-2 出土遺物実測図



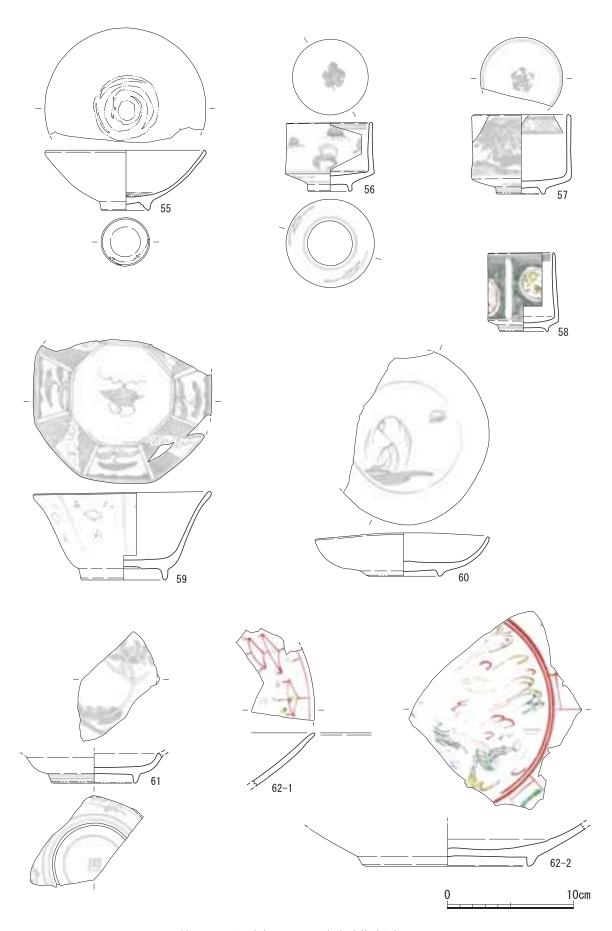
第 26 図 石段部トレンチ出土遺物実測図



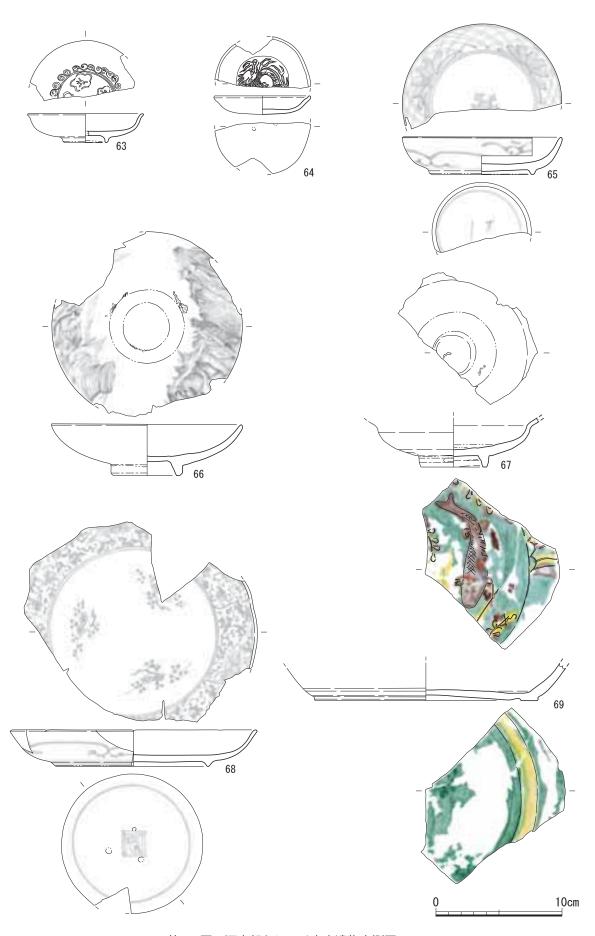
第27図 河床部トレンチ出土遺物実測図-1-



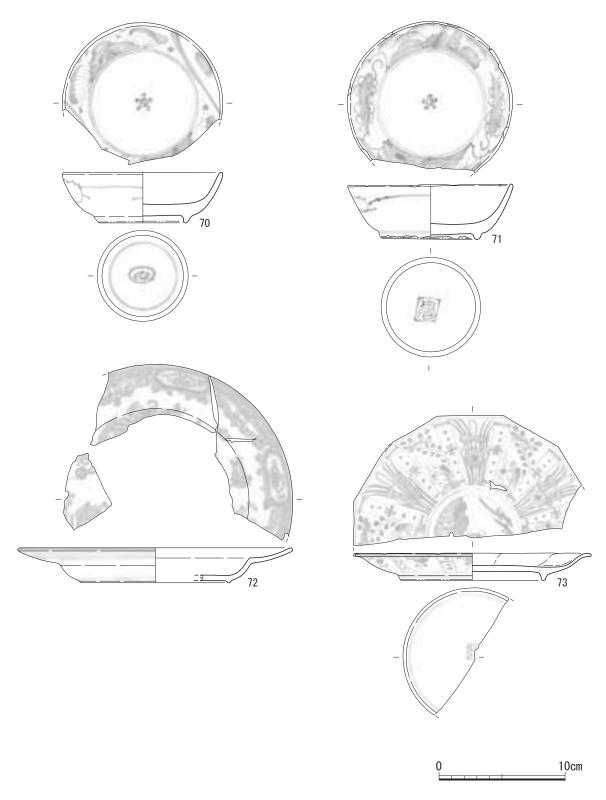
第28図 河床部トレンチ出土遺物実測図-2-



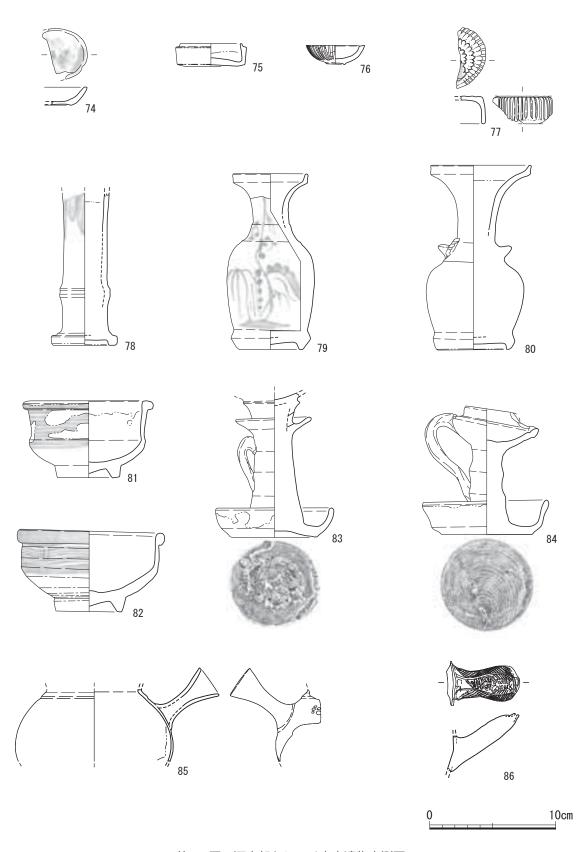
第29図 河床部トレンチ出土遺物実測図-3-



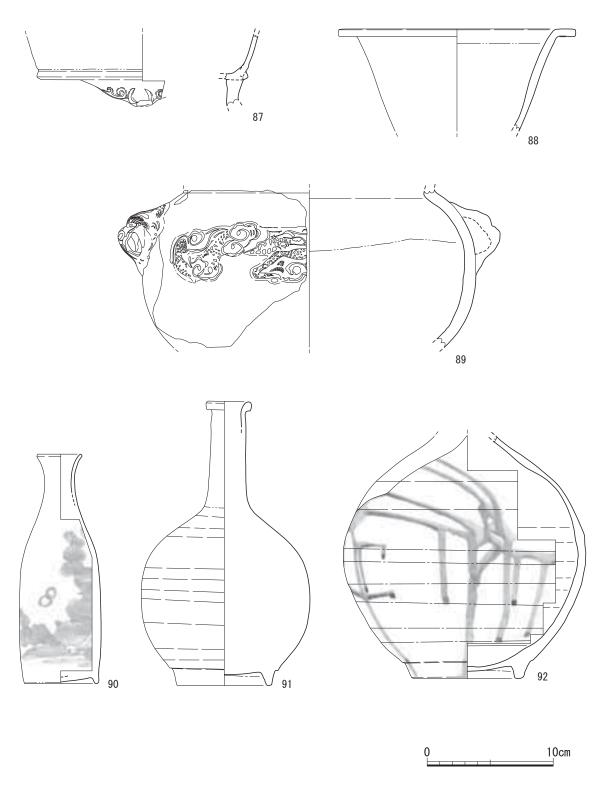
第30図 河床部トレンチ出土遺物実測図-4-



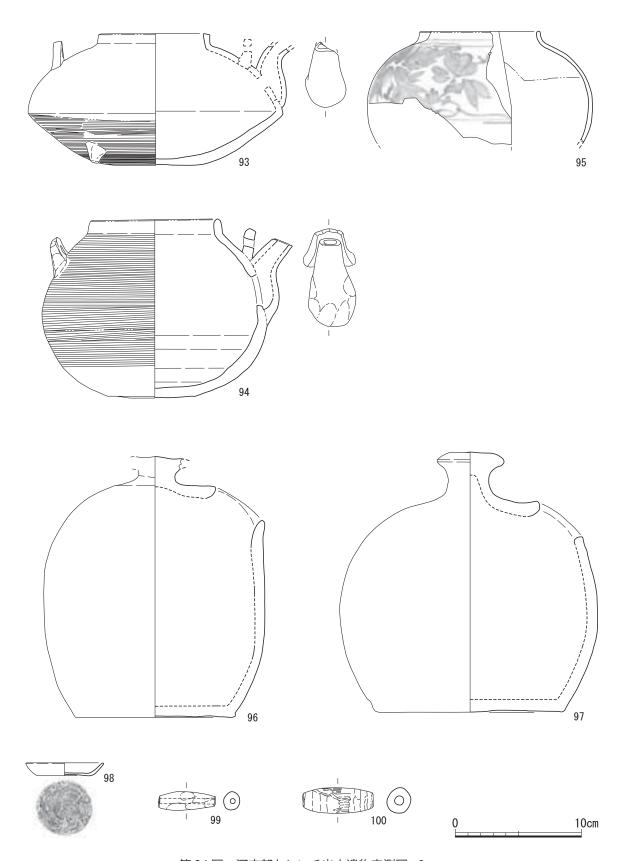
第31図 河床部トレンチ出土遺物実測図-5-



第32図 河床部トレンチ出土遺物実測図 - 6 -



第33図 河床部トレンチ出土遺物実測図-7-



第34図 河床部トレンチ出土遺物実測図-8-

第2表 平成16年度 陶磁器観察表

挿図	₩ □	1 番 ロロ	<u>B</u> ₽.1≢	4年 177	出土	位置			法量(cm)		
挿図 番号	番号	種別	器種	産地	遺構	層位	部位	口径	底径	器高	高台高	外器面
23	1	染付	ш	肥前	1Tr SK-1	_	口縁~底部	(14. 0)	(8. 2)	3. 0	0. 3	_
24	15	青磁	碗	北部九州?	1Tr	VII層	口縁	_	_	(2. 4)	_	_
24	16	染付	碗	肥前	1Tr	VI層	口縁~底部	10. 2	4. 2	5. 2	0. 7	コンニャク印判
24	17	染付	ш	肥前	1Tr	Ⅱ層	口縁~底部	(13. 8)	(6.8)	3. 2	0. 5	_
25	19	染付	蓋	肥前	4Tr SK-2	_	つまみ部~天井部	_	_	(2. 1)	_	釉の掻き
25	20	青磁	碗	中国	4Tr SK-2	_	口縁~体部	(16. 6)	_	(4. 7)	_	_
26	21	陶器	蓋	関西系	4Tr	A 層	天井部 ~口縁	(10. 2)	_	(1.4)	_	一部釉剥ぎ
26	22	陶器	碗	肥前	4Tr	A 層	底部	_	3. 7	(1. 7)	0. 5	_
26	23	染付	広東碗	肥前	4Tr	A 層	口縁~底部	11. 45	6. 2	6. 2	_	_
26	24	染付	ш	肥前系	4Tr	A 層	口縁~底部	(19. 0)	(9. 2)	3. 0	0. 5	_
26	25	染付	ш	肥前	4Tr	A 層	口縁~底部	(13. 6)	(8. 0)	3. 3	0. 45	_
26	26	陶器	蹇	肥前	4Tr	A 層	頸部~体部	頸部径 (32.2)	最大胴径 (37.0)	(15. 05)	_	波状文沈線
26	27	陶器	擂鉢	肥前	4Tr	A 層	口縁~体部	(32. 0)	_	(10. 0)	_	_
27	28	染付	小碗	肥前	3Tr 表土	_	口縁~底部	8. 2	3. 0	4. 2	0. 5	_
27	29	染付	小碗	肥前	5Tr 表土	_	口縁~底部	6. 8	3. 2	5. 0	0. 7	_
27	30	染付	小碗	有田	5Tr 表土	_	口縁~底部	7. 65	4. 2	5. 95	1. 2	_
27	31	陶器	碗	熊本	5Tr 表土	_	口縁~底部	(8. 2)	(3. 3)	5. 55	0. 65	_
27	32	染付	蓋付身	肥前	5Tr	_	口縁~底部	(8. 7)	4. 45	5. 1	0. 5	_

	調整		+	5調	備考	写真
外底面	内器面	内底面	胎土	釉		図版
釉の掻きとり 砂粒付着	_	_	ፖ イホ` リホワイト	ፖ ረቱ [*] ሀ ቱ ワረト	17c 末~ 18c 前半 内外面共に貫入有 見込み 五弁花文 コンニャク印判	10
_	_	_	シルバーク・レイ	裏葉色	小片の為、傾き不確実 蓮弁文	_
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	ハ゜ールホワイト	18c 中頃~後半 有田 コンニャク印判	13
釉の掻きとり	_	蛇の目釉剥ぎ	オイスター	フロスティク゛レイ	18c 中頃〜後半 波佐見 見込み 蛇の目釉剥ぎ	10
_	_	_	スノウホワイト	フロスティク゛レイ	18 ~ 19c 前半 (端反碗の蓋であれば 1820 ~ 1860))	10
_	_	_	ハ° ールホワイト	裏葉色	15 ~ 16c 文様(雷文陰刻)	11
_	_	_	イエローオーカー	オイスター	18c 末~ 19c 前半 内外共に貫入有 口縁部付近釉ハゲ	11
fa゙リ 目跡	— <u> </u>					
釉の掻きとり - ス/ウホワイト 藍白 1780 ~ 1810 芭蕉文 貫入有					1780 ~ 1810	13
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	フロスティク゛レイ	18c 後半~ 19c 平佐焼? (鹿児島)	10
釉の掻きとり 砂粒付着	_	-	スノウホワイト	フ゛ルーウォッシュ	17c 末~ 18c 前半 口縁は輪花と思われる凹みがあるが 1ヶ所の為図上では直線とした。 五弁花文 コンニャク印判	10
_	_	-	弁柄色	焦茶	17c後半 格子タタキ 縄目の突帯と肩部の形が特徴 (17c主体に使用) 波状の沈線は新しい感じがする	12
_	擂り目	_	れんが色	くり色	破片の口縁端に片口部の一部が残る 18c 後半~ 19c 前半	12
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	スノウホワイト	18c ~ コンニャク印判	13
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	スノウホワイト	1820 ~ 1860	13
釉の掻きとり	1820 ~ 1860 年木谷窯? セリ ー ー スノウホワイト スノウホワイト は崩れている。 変わった器形を呈す				13	
ケス゛リ	_	_	灰汁色	オリーフ゛ト゛ラフ゛	19c 印花象嵌 刷毛文様	11
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	スノウホワイト	17c 末~ 18c 前半 コンニャク印判 貫入有	13

插図					出土	位置			法量	(cm)	法量 (cm)			
挿図 番号	番号	種別	器種	産地	遺構	層位	部位	口径	底径	器高	高台高	外器面		
27	33	染付	碗	有田	5Tr	砂礫層	口縁~底部	(10. 8)	(4. 7)	6. 0	0.8	_		
27	34	染付	碗	有田	5Tr ガタ土	_	口縁~底部	(10. 1)	(4. 2)	4. 9	0. 4	_		
27	35	染付	碗	肥前	5Tr ガタ土	_	口縁~底部	(10. 0)	3. 8	4. 8	0. 3	_		
27	36	染付	碗	波佐見	5Tr 表土	_	口縁~底部	12. 05	4. 95	6. 05	0. 75	_		
27	37	染付	碗	波佐見	5Tr 表採	_	口縁~底部	11.5	4. 4	5. 95	0. 9	_		
27	38	青磁染付	蓋	肥前	5Tr	砂礫層	つまみ部 ~ 口縁	9. 9	_	3. 75	_	釉の掻き とり(雑)		
27	39	染付	碗	波佐見	5Tr	砂礫層	完形	12. 2	5. 0	5. 1	0.8	_		
27	40	陶器	ハケメ碗	肥前	5Tr	砂礫層	口縁~底部	(9. 6)	(3. 8)	5. 05	0.8	_		
27	41	陶器	ハケメ碗	肥前	5Tr	砂礫層	口縁~底部	10. 4	4. 65	6. 6	0. 7	_		
27	42	青磁染付	碗	肥前	5Tr	砂礫層	口縁~底部	(12. 4)	(5. 0)	6.8	0. 75	_		
28	43	染付	広東碗	肥前系	5Tr	砂礫層	口縁~底部	10. 05	6. 0	5. 95	1. 45	_		
28	44	染付	広東碗	肥前	5Tr 表土	_	口縁~底部	11. 3	(6. 1)	6. 35	1.6	_		
28	45	染付	広東碗	肥前系	5Tr	_	口縁~底部	(10. 95)	6. 15	6. 4	1. 2	_		
28	46	染付	広東碗	肥前系	5Tr	_	口縁~底部	(11. 7)	6. 3	7. 3	1.8	_		
28	47	染付	碗	肥前	5Tr	_	体部~底部	_	(5. 0)	(3. 2)	0. 55	_		
28	48	染付	碗	肥前	5Tr ガタ土	_	口縁~底部	11. 7	4. 45	4. 55	0. 85	_		
28	49	染付	碗	有田	5Tr	砂礫層	口縁~底部	(8. 6)	(3. 6)	5. 6	0. 45	_		
28	50	染付	碗	肥前	5Tr 表土	_	口縁~底部	(9. 4)	(3. 4)	5. 75	0. 55	_		
28	51	染付	碗	有田	5Tr 表土	_	口縁~底部	(9. 05)	4. 9	7. 0	0. 6	_		
28	52	染付	蓋付身	肥前系	5Tr 表土	_	口縁~底部	(12. 4)	(5. 0)	7. 2	0. 6	_		
28	53	染付	碗	肥前系 在地?	5Tr ガタ土	_	口縁~底部	(11. 4)	(4. 6)	6. 05	0. 75	ロクロナテ゛		
28	54	陶器	碗	熊本	5Tr 表土	_	口縁~底部	10. 35	4. 2	5. 2	0. 6	_		
29	55	白磁	碗	在地	5Tr	_	口縁~底部	10.8	3. 9	4. 75	0. 65	_		

	調整		色	.調	/##.#Z	写真
外底面	内器面	内底面	胎土	釉	備考	図版
釉の掻きとり	_	ハマ痕?	スノウホワイト	リリーホワイト	17c 末~ 18c 前半	13
神の強さこう		/代及:	አ/ ን#ንግ ቦ	ንን ጥንባ፣	内底面 3 ヶ所足付ハマ痕?	10
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	スノウホワイト	18c 前半~中頃	13
神の強さこう			አ/ ንጥንግ ኮ	አ/ ንጥንባ ቦ	ピンホール多い 貫入有	10
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	スノウホワイト	18c 前半~中頃	13
					18c 前半~中頃 高台内に渦福?	
					全体的にピンホールが多い	
釉の掻きとり	_	ハマ痕?	スノウホワイト	スノウホワイト	内底面に足付ハマ痕?2個	13
					外面雪輪文	
					// W = + +	
釉の掻きとり	_	_	ハ゜ールホワイト	フ゛ルーウォッシュ	18c 中頃	13
				ハ゜ールホワイト	│ │18c 後半 精砂粒付着	
_	_	_	ハ゜ールホワイト	裏葉色	貫入有 つまみ径 (4.0cm)	10
		蛇の目釉剥ぎ		表条巴	貝入有 フまみ任 (4.00III)	+
釉の掻きとり	_	重ね焼痕	スノウホワイト	フロスティク゛レイ	18c 中~後半	13
		里は洗扱		コーヒー ブラウ	IV期 1690~1740	+
釉の掻きとり	_	_	鳶色		17c 末~ 18c 後半 現川焼	11
		+		ン	17c 末~ 18c 前半 1690 ~ 1740	+
面取り			h. 10	レンが色		4.4
釉の掻きとり	_	_	キャメル	白ゆり色	内面、部分的に貫入有	11
-					現川焼 上手	
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	藍白	 18c 後半	13
ALC C Y			, , , , , , , , , , , , , , , , , , ,	白緑		
釉の掻きとり	_	_	フ゛ルーウォッシュ	ムーンライト	 18c 終~ 19c 初	13
ла «У <u>ла</u> с с у			, ,,,,,,	ブルー	100 112	
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	フロスティク・レイ	1780 ~ 1810	13
,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,,			, , , , , ,			
釉の掻きとり	_	_	ハ゜ールホワイト	藍白	18c 終 (1780 ~ 1820)	_
					10 + 10 + 1700 1010	
釉剥ぎ	_	_	スノウホワイト	フロスティグレイ	18c 末~ 19c 末 1780 ~ 1810	13
					コンニャク印判(魚)	_
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	スノウホワイト	18c 末~ 19c 初	_
		14 0 17 31 1 2			見込みに昆虫文 貫入有	_
釉の掻きとり	_	蛇の目釉剥ぎ	ムーンライトフ゛ルー	スカイグレイ	19c 前半	13
		後アルミナ?塗布			コンニャク印判	
釉の掻きとり	_	_	ハ゜ールホワイト	フロスティグレイ	18c 末~ 19c 初	_
					矢羽根文様 10. 古. 10. 古.	
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	スノウホワイト	18c 末~ 19c 初	13
					貫入有	
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	藍白	19c(前半)	13
		曲の日野型ン			焼き継ぎ(上外域)?	
釉の掻きとり	_	蛇の目釉剥ぎ	スノウホワイト	スノウホワイト	19c(在地か?可能性高い)	_
		砂目			見込み蛇の目剥ぎ後砂目をしく	
釉の掻きとり	_	_	ハ゜ールホワイト	リリーホワイト	19c	13
					内底面に付着物有	
釉の掻きとり	_	_	シルバーケレイ	ブ ロンス゛	19c 八代焼 内外共に貫入有	11
14のセナール		-			印花象嵌	
釉の掻きとり	_	釉剥ぎ	シルバーケレイ	オイスター	19c	12
砂粒付着					内定部の釉剥ぎは、渦巻状を呈す	

桂网					出土	位置			法量	(cm)		
挿図 番号	番号	種別	器種	産地	遺構	層位	部位	口径	底径	器高	高台高	外器面
29	56	染付	猪口	肥前	5Tr	_	ほぼ完形	6. 85	3. 55	5. 45	0. 55	_
29	57	染付	筒形碗	肥前	5Tr ガタ土	_	口縁~底部	(7. 9)	3. 9	6. 3	0. 55	_
29	58	色絵	筒形碗	有田	5Tr 表土	_	口縁~底部	5. 3	3. 9	6. 25	0. 5	_
29	59	染付	角鉢	肥前	_	_	口縁~底部	14. 15	6. 8	7. 0	0.8	_
29	60	染付	ш	在地?	5Tr	粗朶層	口縁~底部	13. 8	6. 05	(3. 4)	0.4	_
29	61	染付	ш	有田	5Tr	砂礫層	体部~底部	_	(6. 6)	(2. 4)	0. 75	_
29	62-1	色絵	ш	嬉野 吉田?	5Tr 表土	_	底部	_	_	(4. 3)	_	_
29	62-2	色絵	ш	嬉野 吉田?	5Tr 表土	_	体部~底部	_	(13. 6)	(3. 4)	0.8	_
30	63	陶器	小皿	熊本	5Tr 表土	_	口縁~底部	(9. 2)	(3. 6)	2. 3	0. 4	_
30	64	陶器	ш	関西系	5Tr 表土	_	口縁~底部	(7. 7)	_	1. 45	_	_
30	65	染付	ш	肥前	5Tr	砂礫層	口縁~底部	12. 7	8. 35	3. 0	0. 3	_
30	66	陶器	ш	肥前	5Tr	_	口縁~底部	15. 15	5. 7	4. 15	0.8	_
30	67	陶器	ш	肥前	5Tr ガタ土	_	体部~底部	-	(5. 3)	(3.9)	0. 9	ケス゛リ
30	68	染付	ш	有田	5Tr 表土	_	口縁~底部	(19. 6)	12. 3	2. 9	0. 4	_
30	69	陶器	皿 or 鉢	関西系	5Tr ガタ土	-	体部~底部	_	(17. 8)	(3. 0)	0.3	-
31	70	染付	ш	波佐見	5Tr ガタ土	_	口縁~底部	12. 75	7. 2	4. 0	0. 5	_
31	71	染付	ш	波佐見 (肥前)	5Tr 表土	_	口縁~底部	13. 1	7. 9	4. 4	0. 5	_
31	72	染付	ш	転写 ヨーロッ パ(ベグ -ト窯?)	5Tr 表土	_	口縁~底部	(21. 8)	(11. 9)	2. 75	0. 15	_
31	73	染付	ш	有田	5Tr 表土	_	口縁~底部	(18. 8)	(11. 6)	2. 15	0. 4	_
32	74	染付	散蓮 華?	肥前	5Tr 表土	_	先端部		_	(1.4)	_	_
32	75	白磁	合子 (身)	肥前系	5Tr 表土	_	口縁~底部	(4. 8)	(5. 4)	1.8		釉の掻き とり

	調整		色	色調	I++-+-	写真
外底面	内器面	内底面	胎土	釉	備考	図版
釉の掻きとり	_	_	ハ [°] ールホワイト	ムーンライトフ゛ルー	18c 後~ 19c 初	13
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	フ゛ルーウォッシュ	18c 末~19c 初 見込み 五弁花文 コンニャク印判 内面口縁下 四方襷紋	13
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	スノウホワイト	18c 前半? 丸文	13
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	藍白	19c 前半	11
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	ハ゜ールホワイト	1650~1660 全体に大きく歪む 口縁は輪花を呈す 口銹有	10
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	ハ゜ールホワイト	1690 ~ 1700 (柿右衛門窯?) 上手 貫入有	10
_	_	_	シルハ゛ーク゛レイ	オイスター	1650 ~ 1660 ? 雲龍?	11
釉の掻きとり ハリササェ痕	_	_	シルハ゛ーク゛レイ	オイスター	1650 ~ 1660 ? 雲龍?	11
釉の掻きとり ロクロナデ	_	_	灰汁色	ラセットコ゛ールト゛	19c 象嵌 南関(坂本重義報告)に似る	11
目跡	_	印刻文様	スノウホワイト	山吹色	18c後半~19c 型打ち 低火度釉 内外面に細かい貫入が見られる	11
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	ハ゜ールホワイト	18c 前半~中頃 口銹有 五弁花文のコンニャク印判	10
ケス゛リ	_	蛇の目釉剥ぎ 砂粒付着	オイスター	ラセットコ゛ールト゛	Ⅳ期 1690 ~ 1740 17c 末~ 18c 前半 現川焼	12
ケス゛リ	_	蛇の目釉剥ぎ	オイスター	ミストク゛リーン	17c 末~ 18c 前半 内山(内野山)焼(嬉野)	12
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	フロスティク゛レイ	17c 末~ 18c 前半 口縁は輪花を呈す 高台内にハリササエ痕3ヶ所と渦福	10
_	-	-	^*>* 1	_	18c後半~幕末 (交趾系統の窯) 貫入有 三彩 低火度釉 源内焼に似る 魚藻文(中国陶器に同様の文様のも の有り)	11
釉の掻きとり 砂粒付着	_	_	スノウホワイト	藍白	18c 中~後半	10
釉の掻きとり 砂粒付着	_	_	オイスター	フロスティク゛レイ	V期 1850 ~ 1860 18c 後半 五弁花文 コンニャク印判 高台に白い砂粒	10
_	_	_	ፖረቱ້ ሀቱワイト	ブルーウォッシュ うす群青	接合不可の3破片を図上復元した 口縁は輪花を呈すが単位が一定では ない為復元出来ないので直線とした 19c	10
釉の掻きとり	_		スノウホワイト	スノウホワイト	1810 ~ 1840 ? 角皿 (8 角形) 口銹有	10
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	フ゛ルーウォッシュ	19c	11
釉の掻きとり	ロクロナテ゛	_	アイホ゛リホワイト	フ゛ルーウォッシュ	18c 後半~ 19c 前半 (薬合) 内外共に貫入有	11

插図	w -	1# Pul	DD ***		出土	位置			法量(cr	n)		
挿図 番号	番号	種別	器種	産地	遺構	層位	部位	口径	底径	器高	高台高	外器面
32	76	白磁	紅皿	肥前	5Tr 表土	_	完形	4. 6	1. 5	1.5	0. 1	_
32	77	染付	水滴	肥前	5Tr	_	天井部 ~口縁	_	_	(2. 2)	_	_
32	78	染付	燭台?	有田	5Tr	_	胴部~底部	_	5. 15	(12. 1)	0. 75	_
32	79	染付	仏花器	波佐見	5Tr 表土	_	口縁~底部	(6. 0)	7. 05	13. 95	1.5	_
32	80	青磁	仏花器	波佐見	5Tr	_	口縁~底部	(8. 0)	5. 8	14. 65	1.3	_
32	81	陶器	香炉	肥前	5Tr	砂礫層	口縁~底部	(10. 35)	4. 9	6. 1	1.0	ケス゛リ ロクロナテ゛
32	82	陶器	香炉	肥前	5Tr	砂礫層	口縁~底部	11. 2	5. 2	6. 55	1.1	ケス゛リ ロクロナテ゛
32	83	陶器	燭台	熊本 天草	5Tr 表採	_	上部受部 ~底部	上部受部径 (6.0)	6. 9	(11.5)	_	ロクロナデ 穿孔
32	84	陶器	燭台	熊本 天草	5Tr	_	口縁~底部	受皿径 (10.0)	7. 2	10. 2	_	ロクロナテ゛
32	85	陶器	急須	熊本	5Tr 表土	_	把手~体部	最大胴径 (12.5)	_	(7. 4)	_	ロクロナテ゛
32	86	陶器	把手	上野 東野亭	5Tr 表土	_	把手	_	_	(4. 7)	_	型押し
33	87	陶器	植木鉢(蘭鉢)	瀬戸(美濃)	5Tr 表土	_	脚部~底部	_	(16. 0)	(5. 75)	_	3377° 77°
33	88	陶器	植木鉢	熊本?	5Tr 表採	_	口縁~体部	内 (15.5) 外 (18.8)	_	(8. 15)	_	_
33	89	陶器	火鉢	瀬戸(美濃)	5Tr 表土	_	体部	_	_	(12. 5)	_	獣頭把手 龍の貼付 装飾
33	90	染付	徳利	肥前系	5Tr	_	口縁~底部	(3. 6)	5. 9	12. 2	0. 45	_
33	91	陶器	瓶	肥前	3-5Tr 表土	_	完形	3. 6	7. 5	22. 6	_	_
33	92	陶器	瓶	_	3–5Tr	_	胴部~底部	_	8. 9	(19. 25)	_	_
34	93	陶器	土瓶	薩摩? 熊本?	河床部 5Tr	砂礫層	口縁~底部	8. 8	7. 1	_	_	が目釉の 掻きとり
34	94	陶器	土瓶	薩摩	河床部 5Tr	砂礫層	ほぼ完形	10. 4	6. 9	14. 2	_	カキ目釉の 掻きとり ケズリ

	調整		1	色調	/# -* -	写真
外底面	内器面	内底面	胎土	釉	備考	図版
_	_	_	アイホ゛リホワイト	フロスティク゛レイ	19c 型押し成形 露胎	11
_	† † *	_	ፖ ረቱ` ሀቱワイト	藍白	19c 前半 型押し成形 菊花形 口縁見通しラインは推定	11
釉の掻きとり	ロクロナテ゛	_	スノウホワイト	フロスティク゛レイ	内面上部に釉が掛かっている為、上面を釉によって接合している可能性あり 17c末~18c初 竹形	11
釉の掻きとり アルミナ付着	ロクロナテ゛	_	スノウホワイト	ハ° ールホワイト	17c 末~ 18c 前半 口縁は輪花を呈すが 1 ヶ所の残存し かなく復元出来ない	11
釉の掻きとり	ロクロナテ゛	_	スノウホワイト	ミストク゛リーン	17c 末~ 18c 前 自然釉 精砂粒付着	11
ケズリ 糸切り離し	ロクロナテ゛	† † *	キャメル	_	17c後半 (18c 始め) 化粧土と釉による文様	12
ケス゛リ	ロクロナテ゛	ケス゛リ	テラコッタ	マルーン	17c 末~ 18c 前半 銹釉による刷毛文様	12
tデ 糸切り	_	_	イエローオーカー	焦茶	18c~ 上部受部直上に2ヵ所穿孔あり、内部に粘土付着	12
糸切り離し	_	_	枯葉色	オリーフ゛ト゛ラフ゛	18c ~	12
_	ロクロナテ゛	_	鳶色	オリーフ゛ト゛ラフ゛ ラセットコ゛ール ト゛	18c 関西系 イッチン掛け	11
_	_	_	鳶色	焦茶	19c 内面のロクロ目で傾きを出しているが残存が少ない為不確実	12
_	ロクロナテ゛ ヨコナテ゛	_	クリーム色	ろくしょう	18~19c 脚1ヵ所残存、底面に 穿孔部分1ヶ所残存(全体に残存部 分が少ない為図化出来なかった) 割れ口断面に黒色の物質付着、焼き つぎ痕か?	11
_	ロクロナテ゛	_	れんが色	鳥の子色	18c後半~19c前半 白化粧後施釉 刷毛目 細かい貫入が見られる	12
-	_	_	クリーム色	ホ゛トルク゛リーン アンティックフ゛ラウン	18c末~19c 基準となる部分の残存が無い為、傾き、径は不確実 貫入有(録釉部分)	11
釉の掻きとり	ロクロナテ゛	_	ハ゜ールホワイト	リリーホワイト	19c 貫入有	11
ケス゛リ	_	_	テラコッタ	オリーフ゛ト゛ラフ゛	18c 後半~ 19c 前半 化粧土 内山(内野山)焼(嬉野)	12
ケス゛リ	ロクロナテ゛	ロクロナテ゛	鳶色	焦茶	外面底部に工具痕あり 化粧土 砂付着	12
_	_	_	^゛-ジ ュ	アンティックフ゛ラウン	18c 後半~ 19c 緑がかった釉調、横筋	12
<mark>ተ</mark> ス` ሀ	_	_	キャメル	弁柄色 オリーブドラブ	18c後半~19c 内面に薄い鉄泥漿 煤付着	12

插図	東京 番号 種別 器種 基		★ 11b	出土位置				法量	(cm)			
挿図 番号	番号	種別		産地	遺構	層位	部位	口径	底径	器高	高台高	外器面
34	95	陶器	土瓶	関西系	5Tr 表土	_	口縁~体部	(9. 6)	_	(8. 9)	_	釉の掻き とり
34	96	陶器	尿瓶	肥前	河床部	_	体部~底部	_	12. 7	20. 7	_	降灰付着
34	97	陶器	尿瓶	肥前	河床部	_	上部~底部	_	15. 1	20. 6	_	降灰付着

第3表 平成16年度土器観察表

+ ₹ [छ]				出土	位置			法量(cm)		
挿図 番号	番号	種別	器種	遺構	層位	部位	口径	底径	器高	高台高	外器面
23	2	土師器	坏	SK-3	VIII層 No. 24	底部	_	_	(1.0)	_	_
23	3	土師器	小皿	高水敷 SK-3	VIII層 No. 1	口縁~底部	(8. 0)	5. 2	2. 0	_	回転ナデ
23	4	土師器	小皿	高水敷 SK-3	Ⅷ層 No. 3	口縁~底部	8. 0	6. 0	2. 0	_	回転ナデ
23	5	土師器	小皿	SK-3	Ⅷ層 No. 4	口縁~底部	7. 75	5. 7	2. 1	_	回転ナデ役ナデ
23	6	土師器	坏	SK-3	V亚層 No. 10	体部~底部	_	(8. 2)	(3. 0)	_	回転ナデ
23	7	土師器	坏	SK-3	Ⅷ層 No. 11	口縁~底部	(12. 8)	(8. 2)	3. 7	_	回転ナテ [*] ヨコナテ [*]
23	8	土師器	坏	SK-3	VII層 No. 8	口縁~底部	(12. 2)	7. 75	3. 8	_	回転ナデ ナデ
23	9	土師器	坏	SK-3	V亚層 No. 9	口縁~底部	(12. 2)	8. 55	3. 55	_	回転ナデ
23	10	土師器	坏	SK-3	Ⅷ層 No. 12	口縁~体部	(16. 0)	_	(3. 1)	_	回転ナデ後ナデ
23	11	土師器	坏	SK-3	Ⅷ層 No. 29	口縁~底部	(15. 0)	(10.0)	3. 55	_	回転ナデ
23	12	土師器	坏	SK-3	Ⅷ層 No. 18	体部~底部	_	(11. 6)	(3. 05)	_	回転ナデ後ナデ
23	13	土師器	坏	SK-3	VIII層 No. 22	体部~底部	_	12. 3	(2. 45)	_	回転ナデ後ナデ
24	14	土師器	小皿	1Tr	WI層	口縁~底部	(9.8)	(6. 1)	2. 4	_	回転ナデ後ナデ
24	18	瓦質土器	釜	1Tr	VII層	口縁~肩部	(18. 0)	_	(5. 25)	_	回転ナデ
34	98	土師器	小皿	5Tr	砂礫層	ほぼ完形	6. 2	4. 1	1. 05	_	回転ナデ
34	99	土製品	土錘	がタ土	_	完形	最大長 4.5	最大幅 1.5	断面厚	孔径 0.4	ナデ 指頭圧痕
34	100	土製品	土錘	5Tr	砂礫層	完形	最大長 5.6	最大幅 2.0	断面厚	孔径 7.0	回転ナデ後ナデ

	調整		色	2調	/++-+v	写真
外底面	内器面	内底面	胎土	釉	備考	図版
_	ロクロナテ゛	_	香色	灰汁色	19c 外面貫入有 鉄絵 白化粧土	11
釉の掻きとり	ナデ゛ロクロナデ゛	_	鳶色	アンティックフ゛ラウン	18~19c 把手端部分欠損 煤付着	12
_	_	_	鳶色	焦茶	18 ~ 19c 緑がかった釉調、横筋	12

調整			色調		写真
外底面	内器面	内底面	胎土	備考	図版
糸切り離し	_	回転ナデ	(内外)		
		回転ナデ後ナデ	にぶい橙		_
回転糸切り離し	回転ナデ	† † *	(内)にぶい橙		10
板状圧痕			(外) 浅黄橙		10
回転糸切り離し	回転ナデ ナデ	† † *	(内)にぶい橙		10
			(外) 浅黄橙		10
回転糸切り離し	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	(内外)		10
			にぶい橙		
			浅黄橙		
回転糸切り離し	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	(内外)	内外面共に煤付着	10
			にぶい橙		
^ラ切り離し後 ナデ	ヨコナテ゛	回転ナデ	(内)にぶい褐	板状圧痕	10
		ナ テ ゛	(外)にぶい橙		10
回転糸切り離し	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	(内外)		10
			にぶい橙		10
回転糸切り離し	回転ナデ	回転ナデ	(内外)		10
		回転ナデ後ナデ	にぶい橙	焼成前に器壁を貼りあわせた部分有	10
_	回転ナデ	_	(内外)	内外面共に薄く煤付着	
			にぶい橙		_
糸切り離し	回転ナデ	_	(内外)		
			浅黄橙		
糸切り離し	回転ナデ	_	(内)浅黄橙		_
			(外)にぶい橙		
回転糸切り離し		回転ナデ後ナデ	 (内外) 橙		10
四本があり降し	ΕΙ+Δ//	<u>Θ</u> +Δ// Ø //	(P 3 7 F) 1 ±		10
糸切り離し	回転ナデ	回転ナデ			
		回転ナデ後ナデ	(内外) 灰白		10
_	回転ナデ	_	(内) 淡赤橙	近世? 煤付着 器面剥離磨耗の為調整不明	12
			(外)にぶい橙		
糸切り離し	回転ナデ	回転ナデ後ナデ	(内外)		10
			にぶい黄橙		
_	_	_	にぶい橙		12
_	_	_	明褐灰	煤付着	12
				釉:シルバーグレイ	

第2節 平成17年度の調査

石段本体の調査とし、石段個々の表面観察を行った。その調査内容は石段個別の写真撮影を行い、石 材規模、矢穴跡の確認、石段背後の状況確認を主に 行った。

1. 石段部トレンチ

(1) 土層堆積の状況

石段の構築下部構造の把握が、調査の最大の焦点であり、その手がかりを得るために石段部分を縦断するようにトレンチ調査を行った。個々の石段や、 裏込め材の状況について、確認された土層や出土した遺物についての説明を行う。

今回の土層確認において、当初想定されていた裏込め石間の充填土や、構築時の高低差解消のための整形土、基面整形ライン、裏込め石が充填された層直下の層を細分した。層の細分にあたり、多くの層位が認められたため、A層、B層、C層とした。なお、石段構築の基面整形は3段の階段状であることが調査で明らかとなっていることから、これを上段部、中段部、下段部とし説明を加える。

A層の堆積は、石段直下より確認された。石段の最終据え付け時に伴うものである。土質は水の影響も考えられるが、大きく粘質土と砂質土に分けられる。裏込め石間の充填土は、基本的に粘質土である。砂質土がみられるのは、根石や石段1~9段目付近の石段背後の一部分で、湧水や潮位による影響であろうが、本来は粘質土が充填されていたと考えられる。出土した主要な遺物は、近世の陶磁器や昭和初期の薬瓶、最近のペットボトルなどが検出された。以上のようにA層の堆積は新しい時期のものであり、近世期の石段構築時のものではない。

次に B 層であるが、根石背後の裏込め石を含む 充填土を細分したものである。土質は細砂、粗砂で 鉄分を斑状に含むことに特徴があることから、潮位 や湧水の影響を受けている。10~30cmの円礫を多 く含んでいる。石段1,2段目背後のB層の上位と A 層の層境は土質、特徴ともに判然としないが、B 層の充填がA層の堆積よりは古いものと考えられ

る。

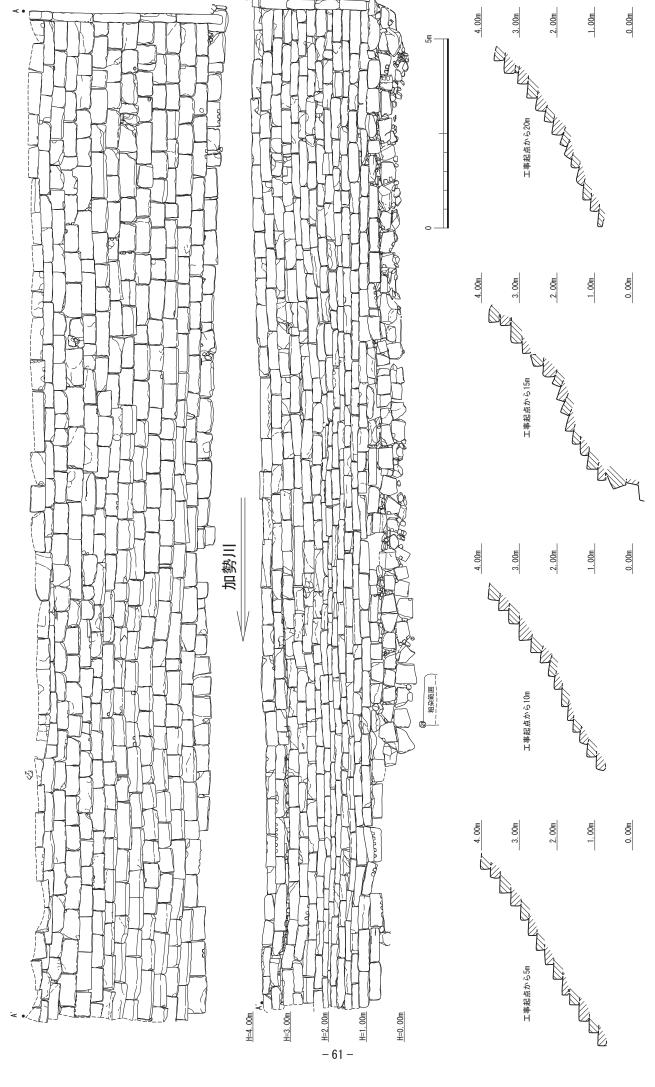
土層確認時に C層と認定したものが、今回の確認層位の中で最も古いものである。階段状に整形された基面の上位に存在する。よって上段部と中段部に分け説明を加える。

上段部堆積する C 層上位部分は版築状に地業が行われている様子も窺え、基盤層である地山などのブロックが混入する。 $C-3\sim9$ 層にみる堆積状況がそうであり、その他の C 層とは明らかに性質が異なる。また、これらの層と $C-10\sim11$ 層は切り合い関係を有していると考えられることから、堆積時期に時期差が想定される。上段部層下位の堆積は「ガタツチ」で構成され、一部ブロック状に褐色粘土が混入し、粗朶が層上位に包含される。しかし粗朶の混入状況は顕著ではなく、層全体にまばらに混入している。

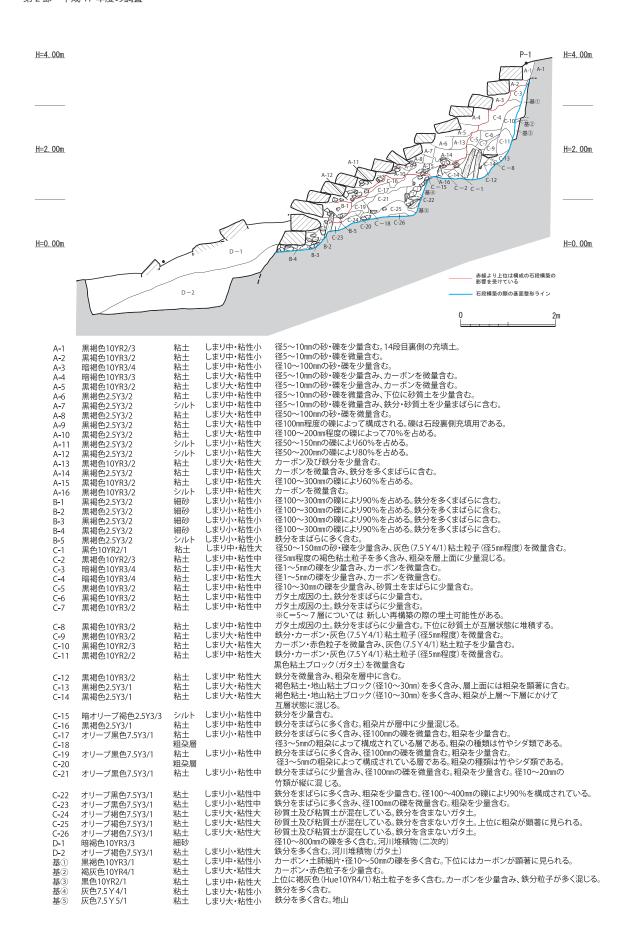
中段部はその堆積のほとんどが「ガタツチ」で構成される。層最下位には地山ブロックを多く含んだ層であり、固くしまっていた。その上位には粗朶を多く含む層が充填され、また杭の前後面には縦に径2~4cm程度の竹が設置され、基面とその竹柵の間に円礫が充填されていた。その上位にはさらに粗朶を多く含む層が確認された。また、中段部の根石近くには顕著に粗朶が層として確認されている。

以上のようにC層の堆積は石段構築時のものと 一部は考えられるものであるが、上段部の上位層は 再構築時の可能性も考えられる。

最後に基面層であるが、地山(基④層)の上位には基①層、基②層、基③層の3層が確認された。基③層は中世前期の遺物を含む遺物包含層である。基②層との層境は不整合面であり、また基②層の層厚や状況から基②層は整地層と考えられる。基①層については、明代の青花や白磁、青磁を含む層であり、層の堆積状況から人為的な成因である。



第35 図 平成17年度 石段平面・立面実測図(1/100)



第36図 石段部~河床部トレンチ土層断面 (1/80)

(2) 杭及び粗朶、竹類の検出(第38・39・40図) 昨年のトレンチ調査では、河床に向かって傾斜する胴木と、縦に打設された杭が一体となり設置されていた。また、胴木と木杭との継ぎ手は、「ホゾ」と「ホゾ穴」による。斜めに設置された胴木の設置角度は12度と28度である。その長さと径はともに120cm程度、径12~15cmを測る。表面の整形には面取りがなされていた。

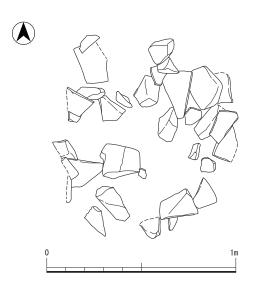
しかし、今回のトレンチ調査で検出された杭は全て縦に打設されたものであり計20本が確認された。全てC層中より検出され、A層に充填に伴う再構築の際に杭頭部が欠損したと考えられるものがほとんどである。昨年検出された斜位の胴木は、今回の調査により基面中段部において設置されていたことが明らかとなった。

打設位置に着目すると、大きく平坦部と基面斜面部に分けられ、下段部と中段、上段部でも打設位置に相違点が見られる。まず、下段と中段を分割、斜面部には斜面及び斜面下位に打設される。中段平坦部には C 層中の竹類による土留め処理部や粗朶の確認位置に相当するように配置される。また、中段部と上段部間の斜面にも杭が認められる。中段にて確認された杭の中には頭部を切断されているものも確認された。

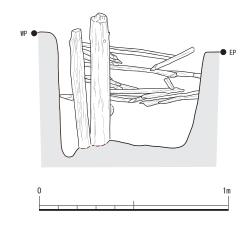
杭の断面形状は6角形に面取加工を行ったもの と加工がなされていないものが確認された。樹種に ついては、そのほとんどが松材と考えられる。

今回の調査では列として木杭を検出することはできなかったが、胴木の全面にまとまる木杭は、川の流れと平行するように数列単位で設置されているものと考えられる。また、その間から検出された竹類は、出土状況から土留め的な役割を果たしていたと推測される。先に述べた土層と今回の杭の検出状況により、杭の打設タイミングは基面整形後ということが明らかとなった。なお、杭間の充填土(C層)は、いわゆる「ガタツチ」であり、杭の保全などを考慮した土の選定が行われたことが示唆される。

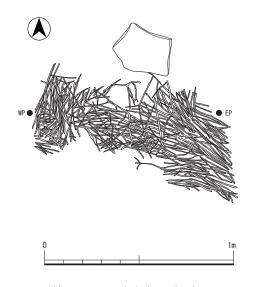
粗朶は C 層に広く確認されているが、顕著にまとまりを有する粗朶層は 2 箇所存在する。C-18 層と C-20 層である。粗朶はトレンチと直行する



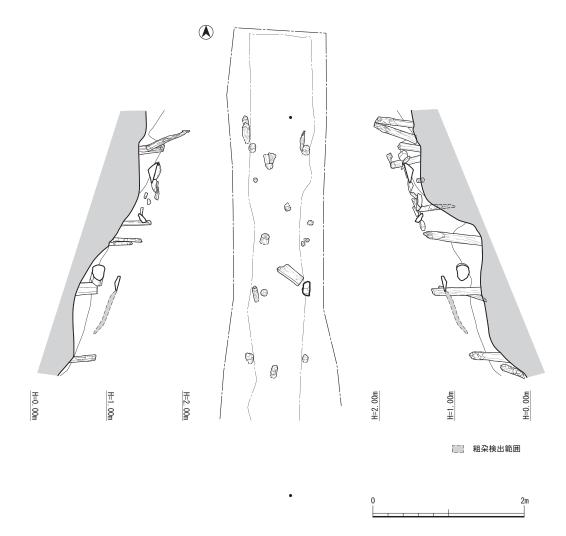
第 37 図 石段部礫実測図 (1/20)



第38図 石段部土留め材実測図 (1/20)



第 39 図 石段部粗朶実測図 (1/20)



第40図 石段部木杭実測図 (1/50)

ように設置されており、土留め処理や土滑り防止のためと考えられる。粗朶の下位には竹類が存在し、竹類の設置とセットとなり機能していた可能性がある。粗朶の確認範囲は C 層全体であるが、中でも C 層の下位層に多くみられるようである。

また、竹類による土留め柵であるが、昨年の調査においてもその一部が確認され、今回の調査でその全容が明らかとなった。粗朶同様にトレンチと直行するように、杭の前後面に設置されている。竹の直径は1~3cmであり、残存状況は極めて悪い。また、竹類は割竹ではない。竹類の設置タイミングはC層下位の粗朶設置後であり、竹柵設置後に礫による斜面保護、「ガタツチ」の充填が行われている。

以上のように、杭の打設、竹柵の設置、粗朶の設置は基面整形後の処理であり、石段背後の基礎構造

といえる。

2. 河床部トレンチ (第 41・44 図)

河床トレンチは、高水敷部にて設定したトレンチを、そのまま河床まで伸長した範囲で、作業部会の指示のもと設定した。河川堆積物の除去には重機を使用した。掘削の結果、石段を保護するような捨石は確認されず、敷石や捨石構造は認められなかった。よって、調査は河床での石段構造に伴う基礎やプライマリーな捨石の検出に努めた。

河床でみられた土層の堆積は、大きく 2 層に分層した。現在までの遺物を包含する D - 1 層(砂礫層:河川堆積物)D - 2 層(「ガタツチ」)である。 D - 1 層の堆積は最も厚く、下流になると薄く堆積する。掘削に伴い陶磁器や寛永通宝、瓦、現代の通貨が出土した。また、矢穴がみられる礫も多く検出

堆積し、多くの粗朶が確認された。D-2層の堆積 る。河床での粗朶と竹類との比率は竹類が圧倒的に は地山直上に位置し、地山は石段前面よりほぼ直に 整形されていた。以上のことから D-2層の体積 が人為的なもので、下位には石段構築に伴う構造物 が存在する可能性があろう。

3. 河床調査 (第 42 · 43 図)

石段前面の土砂撤去に伴い、河床部分の調査を実 施した。河床の調査により打設された杭や竹・粗朶 がまとまって確認された。確認層位は D-2層中 である。

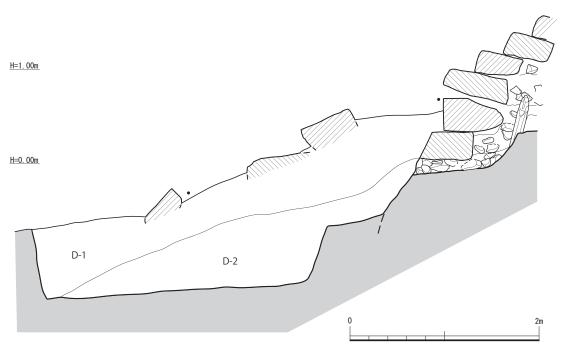
検出された杭は川の流れと直行するように縦や横 方向に設置されている。また、竹類はトレンチ調査 で確認したような柵状に設置されており、土留め的 な性格を有していると考えられる。トレンチ部分 以外の地山がどのように整形されていたのかは不明 であるが、粗朶や杭の設置が地山未検出部に存在し

された。D-2層の堆積は河床へと傾斜するように ていることから、安定を保つための処置と考えられ 多い。また面的に鉛直方向に竹類が設置されている ことから、土留め的な役割を果たしていたと考えら れる。杭については、杭頭を意図的にカットしてい るものもみられる。

4. 根石調査

河床調査とともに、根石の立面図(縮尺 S=1/20) の実測を行った。上流側の根石は、基本的に1段 であり、その下位に間詰石が多くみられる。下流側 の根石は2段積みであり、その前面には杭や竹柵 による処置が施される。根石前面や下部には粗朶や 打設された杭などが確認された。

H=2.00m



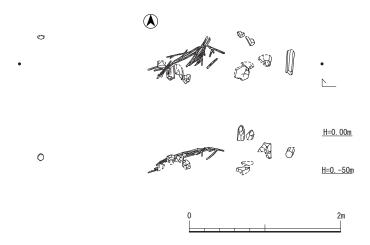
D-1 暗褐色10YR3/3

細砂 径10~800mmの礫を多く含む。河川堆積物(二次的)

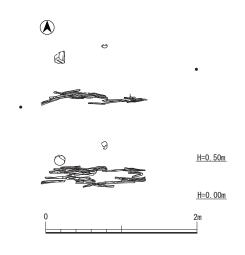
D-2 オリーブ褐色7.5YR3/1 粘土

しまり小・粘性大 鉄分を多く含む。河川堆積物(ガタ土)

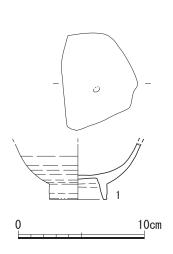
第41図 河床部トレンチ土層断面実測図 (1/40)



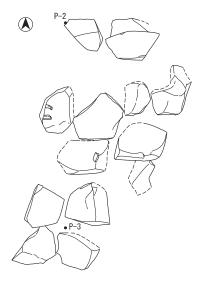
第 42 図 河床部杭・竹類実測図 (1/50) -1-



第 43 図 河床部杭・竹類実測図 (1/50) -2-



第 45 図 平成 17 年度調査出土遺物実測図





第 44 図 河床部捨石実測図 (1/50)

第3節 平成18年度の調査

1. 石段部調査

石段規模の記録として、石段個々の表面観察を行い石材の幅・高さ・奥行きの計測及び矢穴箇所の確認作業を行った。

(1) 石材の整形及び矢穴

石段1~14段目を対象とし、石材の整形観察を行った。14段目石段の表面は、表面・裏面ともにはつり(削り)により整形されている。その他の石段1~13段目の表面は、ノミによる整形を基本としているが、一部14段目と同じ加工の石材も数点確認された。また、石段の噛み合わせ部分には、さらに丁寧なノミ整形がみられ、石段が滑りにくくするための工夫が施されていた。これは、昨年度の調査でも同様の傾向がみられた。このような丁寧な天端・踏面の整形に対し、裏面では単に割っただけの整形に止まっている。

平成19年3月9日「第1回川尻地区文化財調査護岸設計検討委員会」での、西輝喜委員の発言では、昭和40~50年の間に地元より建設省(現:国土交通省)へ14段目の改修依頼があり、現在みられる14段目はその時期に設置されたものとの指摘があった。また、昭和40年代にも全面的な改修があったとのことだった。

今回の工事区間で確認された矢穴は多数に及ぶ。 ここでは確認された矢穴の特徴や傾向を述べる。

先に述べたように、現在の 14 段目は昭和の改修 であるため確認された矢穴幅は 6 cm程度と小さい。 $2 \sim 13$ 段目にて確認された矢穴幅は $7 \sim 10$ cmの間にあり、特に 9 cmの石材が 7 割を占める。 1 段目や根石の矢穴では $10 \sim 12$ cmがほとんどである。 各個体における矢穴跡の確認位置は石段上面・正面に確認されるものが最も多い。

石材に確認される矢穴の形状は、以上のような特徴があり、 $2 \sim 13$ 段目の石材は数回の改修があったものと考えられる。

2. 石段部トレンチ

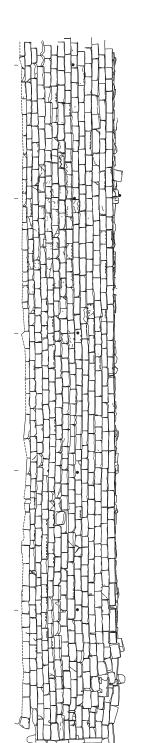
(1) 土層断面(第47図)

今回の調査では、石段の下部構造の把握が調査の

目的であり、その手がかりを得るために石段部分を 縦断するようにトレンチ調査を行った。ここでは、 確認された土層や出土した遺物についての説明を行 う。

当初想定していた裏込め石間の充填土や、構築時の高低差解消のための整形土、基面整形ライン、裏込め石が充填された層直下の層を基準として、土色、土質、包含物により層の細分を行った。多くの層位が認められたため、アラビア数字の1,2…というように層名を付した。

1層は、現在の表土である。2,3層は14段目据 付及び整地層である。2層より30cm角の多くの凝 灰岩が検出され、整地材として使用されている。3 層には14段目と同じ石材の破片が介石として14 段目据付時に使用されている。4層は13段目整地 面と考えられる。5層は13段目据付時のものであ る。7~9層は、いずれも石段据付時のものと考え られ、裏込め材が含まれる。10・21-2・21-1 層の 堆積は、以下の2とおりの解釈が想定される。① 上位石段との時期差、②石段改修時の工程の画期で あるが、堆積状況から②の可能性が高い。11~14 層には多くの裏込め材が顕著に見られ石段据付に伴 う構築土である。15・19層の堆積は12層と同様に、 ①・②の可能性があるが、水の影響や裏込め材の 混入が顕著なことから判然としない。しかし、15・ 19層の上下層と裏込め材に大きな変化が存在する ことから、①の可能性が高いと考えられる。16~ 18・41 層は石段据付に伴う構築土である。22 ~ 24層は一連の堆積であり、時期差は認められない。 24 層より 18 世紀の染付の出土があり、それ以降 の堆積物である。25-2層とは土質、土色から明ら かに異なる。25~31層は、粘質土、シルトの堆 積であり、土留状遺構の上位に堆積するものであ る。一部粗砂の混入も認められるが、時期差は認め られない。32層は25~31層に近い性格の堆積物 と考えられる。33 層は粗朶層である。34,35,37 層 は粗朶層間の充填土である。36層は粗朶層である。 38 層は竹を含む粘質土である。以上の 32 ~ 38 層 は一連の作業工程の中で設置された堆積物であり、 粗朶層及び竹の設置時に作業工程での画期が窺え



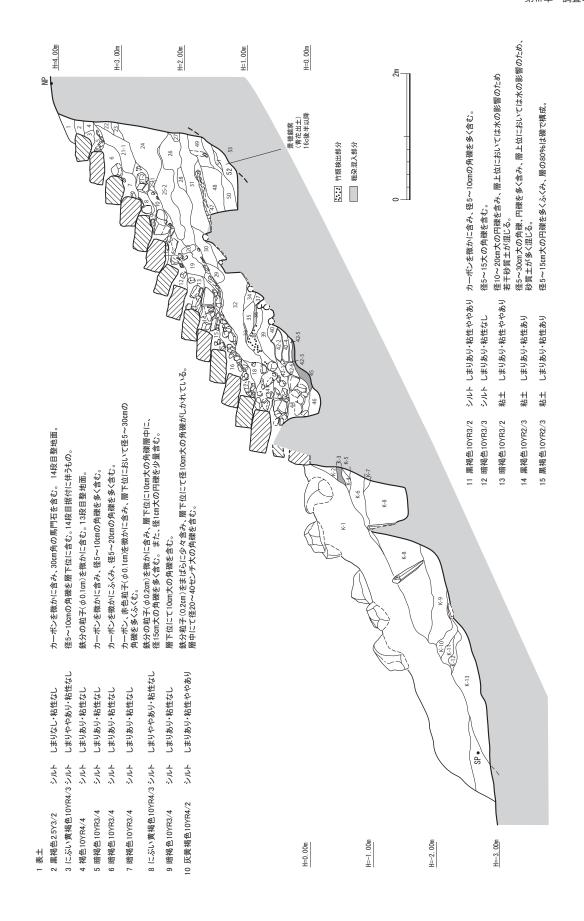


石段平面・立面実測図 (1/200) 平成 18 年度 第46図



石段部全景 (下流より) 平成18年度調査

H=3.00m H=2.00m



第 47 図 石段部~河床部トレンチ土層断面図 (1/60)

16	暗褐色10YR3/3	粘土	しまりあり・粘性あり	径5~15cm大の円礫を多く含む。
17	黒褐色2.5Y3/2	シルト	しまりややあり・粘性あり	鉄分粒子(φ1cm)を多く層全体に含み、10~20cm大の円礫を多く含み、 層の90%は礫で構成。
18	オリーブ黒色5Y3/2	シルト	しまりあり・粘性あり	鉄分(φ1cm)を多く層全体に含み、3/2下位において径20cm大の円礫を含む。
19	黒褐色2.5Y3/2	粘土	しまりあり・粘性あり	カーボン、赤色粒子を微かに含み、層上位に径10㎝大の円礫を含む。
20	灰黄褐色10YR4/2	シルト	しまりあり・粘性あり	鉄分粒子(φ1cm)を層全体に含み、ブロックとして構成している。
21-(1)	褐色土10YR4/4	シルト	しまりあり・粘性あり	鉄分粒子(φ1cm)を層全体に含む。
21-(2)	褐色土10YR4/4	シルト	しまりあり・粘性ややあり	鉄分粒子(φ1cm)を層全体に含む径5~20cm大の角礫、円礫を含む。
22	暗オリーブ褐色2.5Y2/2		しまりあり・粘性あり	鉄分粒子(φ1cm)を層全体に多く含む。
23	オリーブ褐色2.5Y4/5	粘土	しまりあり・粘性あり	暗オリーブ褐色粘土をブロック状に多く含む。
24	暗オリーブ褐色2.5Y3/3		しまりあり・粘性ややあり	カーボン赤色粒子を微かに含む。
	オリーブ褐色	粘土	しまりあり・粘性あり	暗オリーブ褐色粘土をブロック状に多く含む。
	暗オリーブ褐色	粘土	しまりあり・粘性あり	鉄分粒子(φ1cm)を層全体に多く含む。層上位において、鉄分の沈着がみられる。
26	黒褐色2.5Y3/2	細砂	しまりあり・粘性ややあり	赤色粒子を微かに含む。
27	暗オリーブ褐色2.5Y3/5		しまりあり・粘性あり	鉄分粒子(φ1cm)を層全体に多く含む。
28	暗オリーブ褐色2.5Y3/5		しまりあり・粘性あり	鉄分粒子(ゆ1cm)を層全体に多く含む。
29	暗オリーブ褐色2.5Y3/3		しまりあり・やや粘性あり	カーボン赤色粒子を微かに含む。
30	暗オリーブ褐色2.5Y3/5		しまりあり・粘性あり	鉄分粒子(φ1cm)を層全体に多く含む。層上位において、鉄分の沈着がみられる。
31	黒褐色2.5Y3/2	砂頁工	しまりややあり・粘性あり	赤色粒子を微かに含む。層中位の下位において粗砂がみられる。
32	オリーブ黒褐色5Y3/1	粘土	しまりあり・粘性あり	層上位において鉄分粒子(ゆ1cm)を多く含む。層下位においては 細砂の薄い層が体積する。
33	粗朶層			φ0.3~0.5cmの粗朶層。
34	オリーブ黒褐色5Y3/1	粘土	しまりあり・粘性あり	下層との層離面に粗朶を微かに含む。
35	オリーブ黒褐色5Y3/1	粘土	しまりあり・粘性あり	下層との層離面に粗朶を微かに含む。
36	粗朶層			φ 0.2~0.3cmの粗朶層。
37	オリーブ黒褐色5Y3/1	粘土	しまりあり・粘性あり	下層との層離面に粗朶を微かに含む。
38	オリーブ黒褐色5Y3/1	粘土	しまりあり・粘性あり	竹(φ0.5~1.5cm)を含む。
39	黒褐色5Y2/1	シルト	しまりあり・粘性あり	黒色粘土(5Y2/1)黒色シルト(5Y2/1)が瓦層状態となる。
40	黒色	細砂	しまりあり・粘性をおびる	
42-1	オリーブ黒色5Y3/1	粗砂	しまりあり・粘性なし	白色粒子(φ 0.5~1cm)を含む。
42-2	オリーブ黒色5Y3/1	粗砂	しまりあり・粘性なし	白色粒子(φ0.5~1cm)を含む。
42-③	オリーブ黒色5Y3/1	粗砂	しまりあり・粘性なし	白色粒子(φ0.5~1cm)を含む。
42-4	オリーブ黒色5Y3/1	粗砂	しまりあり・粘性なし	白色粒子(φ0.5~1cm)を含む。
42-(5)	オリーブ黒色5Y3/1	粗砂	しまりあり・粘性なし	白色粒子(φ0.5~1cm)を含む。
42-6	オリーブ黒色5Y3/1	粗砂	しまりあり・粘性なし	白色粒子(φ0.5~1cm)を含む。
41	オリーブ黒色5Y3/2	シルト	しまりあり・粘性あり	鉄分粒子(ϕ 1cm)を多く層全体に含む。径15~20cm大の角礫を多く含む。 層の90%は角礫で構成。
43	オリーブ黒褐色5Y3/1	粘土	しまりあり・粘性あり	鉄分の粒子(φ1cm)を少し含む。径20~25cm大の角礫を多く含む。 層の90%は角礫で構成。
44	オリーブ黒褐色5Y3/1	粘土	しまりあり・粘性あり	鉄分粒子(ϕ 1~2cm)を少し含む。径20cm大の角礫を多く含む。 層の90%は角礫で構成。
45	粗朶層			φ0.5~0.8cmの粗朶層。
46	オリーブ黒褐色5Y3/1	粘土	しまりややあり・粘性あり	層上位にて竹(ϕ 0.5~1cm)が含まれる。
47	暗オリーブ褐色5Y3/1	粘土	しまりあり・粘性あり	鉄分粒子(φ1cm)を層全体に多く含む。層上位において、鉄分の沈着がみられる。
48	オリーブ黒色5Y3/2	粗砂	しまりあり・粘性ややあり	オリーブ黒色粘土(5Y3/1)をブロック(φ3~5cm)を多く含む。
49	オリーブ黒褐色5Y3/2	粘土	しまりあり・粘性あり	部分的にオリーブ黒色粗砂のシルト(5Y3/2)を多く含む。
50	オリーブ黒褐色7.5Y3/1	粘土	しまりややあり・粘性あり	粘性あり時に含むものなし。
51	オリーブ黒褐色7.5Y3/1	粘土	しまりあり・粘性ややあり	
52	オリーブ黒褐色7.5Y3/1	粘土	しまりややあり・粘性あり	粘性あり時に含むものなし。
53	灰色7.5Y4/1	粘土	しまりあり・粘性あり	
K-1	河床表土			
K-2	黒褐色2.5Y3/1	粘土	しまりややあり・粘性あり	層下位にて細砂層がみられる。
K-3	粗朶層			(K-2)中1粗朶φ0.5~0.8cmが顕著にみられる。
K-4	黒褐色2.5Y3/1	粘土	しまりなし・粘性あり	ブロックの礫が多くみられる。
K-5	黒褐色2.5Y3/1		しまりなし・粘性あり	φ0.1~0.2cmの礫を多く含む。
K-6	黒褐色2.5Y3/1	粘土	しまりなし・粘性あり	φ 0.2cmの礫が多くみられる。
K-7	黒褐色2.5Y3/1		しまりなし・粘性あり	φ 0.1~0.2cmの礫を多く含む。
K-8	黒褐色2.5Y3/1	粘土		灰色粘土(7.5Y4/1)のブロック(φ1~3cm)を微かに含む。
K-9	黒褐色2.5Y3/1	粘土	しまりあり・粘性あり	灰色粘土(7.5Y4/1)のブロックφ1~3cmを少し含む。
K_10	灰色7.5Y4/1	粘土	しまりあり・粘性あり	層上位にて粗朶が微かにみられる。 灰色粘土ブロックと黒褐色粘土ブロック(ともにφ5cm)に混じる層。
				スロールファンス 無限 ロールフェック (Cで) マッUIII/I に比しる店。
	黒褐色2.5Y3/1 里色5Y2/1	細砂シルト	しまりあり・粘性なし	
	黒色5Y2/1		しまりあり・粘性なし	屋内にて仅20~20~20 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0
K-13	黒褐色2.5Y3/1	粘土	しまりあり・粘性あり	層中にて径20~30cmの礫が多く含む。

る。43~44層は根石設置時の裏込め充填土であり、多くの裏込め材が顕著に包含される。39~42層は、土嚢状の堆積がみられる。45層は粗朶層であり、上位の粗朶層と比べ非常に厚い。46層は根石直下の粘質土である。47~52層は土留状遺構下位の堆積物であり、52層より中国産(景徳鎮窯)の青花が出土した。このことよりこの堆積は青花の年代観より16世紀後半以降と判断できる。53層が地山である。

以上のように地山である 53 層の上位層は全て人 為的な堆積土である。昨年の調査では、地山を階段 状に基面整形を行うことで、基礎構造を構築してい たが、今回の調査では地山が非常に北に後退してい た。このことについては、人為的なものなのか自然 的なものなのか不明である。しかし、その上位に法 面を人為的に構築し、土留状遺構を設置しているこ とが明らかとなった。

また、土層の堆積より、作業工程に何回かの画期が存在している。33,36,45層の粗朶層や、高低差解消のための盛土層(32~38層)である。これは、石段や根石の設置と深く関係しており、特に根石付近においてはその工程が確認できる。

石段直下を除き、土層に見る再構築の痕跡は、22~24層の堆積が明確であり、また15・19層の堆積においてもその可能性が残される。石段の再構築が仮に表面上で行われていれば土層の堆積に見るのは困難である。最後に基面そうであるが、地山(基④層)の上位には基①層、基②層、基③層の3層が確認された。

(2) 土留状遺構(第48図)

平成17年度のトレンチ調査では、階段状に基面整形された上に木杭の打設・粗朶の設置・竹柵による土留処理が確認されている。今回の調査では、その構造は異なる遺構が検出された。検出された遺構の構造は以下のとおりである。また、文中に示した角度は水平を基準とした角度である。

① 構造

土留状遺構の構成は、斜位 40°に設置された竹と、 それを留めるための木材からなる。竹は横位に設置 された木材の上位にも確認されている。また、その

上位に斜位 40°に設置された木材が確認された。最も上位の横位木材から北側は設置角度 19°の河流方向に直行する木材が北へ伸び、さらに縦に設置された木材が存在する。これは、地山部分に打ち込まれている。

土留状遺構に利用されている樹種は全てサクラであり、樹種の選択には統一感がある。竹の設置状況も同一間隔の設置であれば、竹が重なることはない。

土留状遺構の南側には河流方向に直行する方向で 横位に木杭が確認されている。その一部は土留状遺 構に伴うものではない。

土留状遺構の背後については、掘削していないた めその構造は不明である。

この遺構の性格としては、①法面保護、②土留、 ③滑り防止とともに、④石段を意識した基礎土の嵩 上げが考えられる。

(2) 根石設置前後の作業工程

土留状遺構前面には、粗朶の堆積や土嚢状の堆積 がみられ、当時の作業工程にいくつかの特徴的手法 が認められた。

① 粗朶と粘土の互層堆積(32層~38層)

32 層の除去後、粗朶層(33 層)を検出した。径 5mm程度の直木であるが長さに統一性はない。粘土 層を挟み再度、粗朶層(36 層)を検出した。径 1 ~ 2mmの粗朶であり、シダ類と考えられる。その下の粘土層(38 層)の掘削時には、まずその粘土中から径 1mm程度の竹を検出した。その下位には、径 3mmの竹が同一方向に出土した。

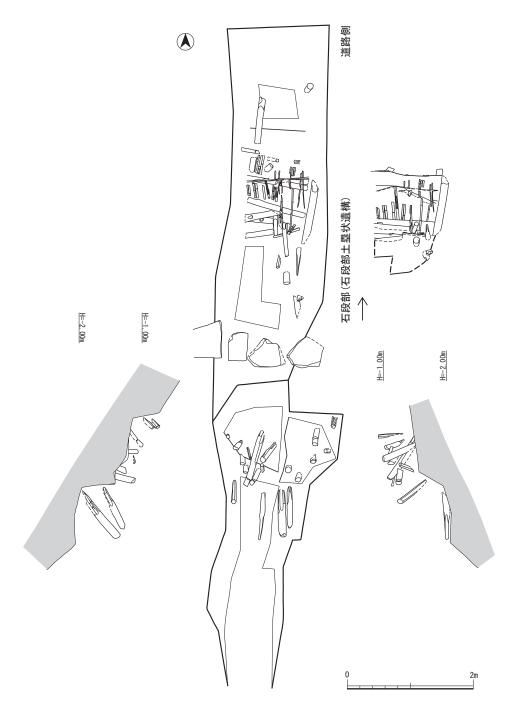
② 土嚢状の堆積(42層)

繊維質の厚みは 2~5㎜程度である。残存状態が 非常に悪く断面にてその形状を図示した。土質は粗 砂を基本とし、白色粒子が少量混じる。上位の 38 層とは明らかに土質が異なる。土嚢状の堆積の単位 まで確認が可能であり、粗朶層(45 層)の上位に 3 個体分確認した。

③ 根石側で確認した木材

調査当初は、土留状遺構の一部と予測したが、粗 朶や竹・粘土の堆積により、根石設置前後の作業工 程の一部である可能性が高い。

その根拠としてa, 設置角度が水平に対し30°と



第48図 石段部~河床部木・杭実測図 (1/60)

緩やかである。

- b, 打ち込む側の先端が先細りに加工されている。
- た。これらの木材の径は7cm程度であり、すべて面 取り加工がなされているか、角材である。

3. 河床部トレンチ

(1) 土層 (第47図)

を、そのまま河床まで伸長した範囲で、作業部会の 指示のもと設定した。河川堆積物の除去には重機を c, 裏込め石と同時に木材は粗朶の下位で検出され 使用した。河床でみられた土層の堆積は、以下のと おりである。

K-1 層は河床表土である。寛永通宝、近世陶磁器、 瓦など多く遺物が確認された。K-2層は粘土であり、 層下位に粗朶が見られる。この K-2 層上面に根石 河床トレンチは、高水敷部にて設定したトレンチ が設置されている。K-3 層は粗朶層である。K-4~

9層はシルト、粘土層であり、K-9層には粗朶が若 干混じる。また、下位の K-9 層との間には工程に 画期が認められる。それは、K-9 層上面にて木杭を 河流方向と直行するように横位に設置されているこ とからも明らかである。K-9層は粗朶が包含された 黒褐色粘土、K-10層は5cm大の地山ブロックを多 く含んだ粘土、K-11 層は黒褐色細砂、K-12 層は黒 色シルトである。K-13 層は黒褐色粘土であり、径 30cmほどの円礫が上面に多く検出された。掘削し た範囲において、地山が検出されなかった。このよ うな土工の工程の中で、木杭の設置タイミングや粗 朶層の堆積場所に作業工程の画期を見出すことがで きる。K-13 層上面にて検出された円礫は沈下防止 の処理と考えられる。また、シルト、細砂、地山粘 土の堆積、その後木杭の設置は一連の工程と考えら れる。河床トレンチにて多く検出した斜位、縦位に 設置された木杭は、打設されたものと考えられ、そ のタイミングは地山の上位に造作された法面状の土 工の後と考えられる。

(2) 検出した木杭(第48図)

河床トレンチにて検出した木杭は計19本である。 検出した木杭は、南北方向に対して縦位、斜位、横 位に設置されている。最も南側で検出した木杭(Na 1)は横位に設置された可能性が高い。木杭のレベ ルもその他のものとは格段に低い。また、木杭には 面取り加工が確認された。設置角度は-10°である。

その他の木杭は先端部の手斧加工により打設され たと考えられる。各杭の属性は以下のとおりである。

杭の配置及び打設角度に統一感はない。しかし、 検出されたレベルに着目すると、- 1 mm~-1.5 mmに 集中していることが分かる。このような木杭の機能 として、滑り防止及び土留的な性格が窺える。

4. 煉瓦構造物

(1) 煉瓦の積み方と構造(第50図)

割肌の石材、板石を基準とすると、既存煉瓦構造物の東西に煉瓦による上部構造を想定することが可能である。煉瓦が西側に一部確認され、これを補強する。

煉瓦の積み方に着目すると煉瓦構造物の下位は、 一段に煉瓦の長手と小口を交互に積む「フランス積 み」であり、中位はフランス積みと煉瓦を長手だけの段、小口だけの段と一段おきに積む「イギリス積み」の混合、上位はイギリス積みと積み方に統一性は認められない。県内における煉瓦構造物に、このような積み方に統一性のない構造物はない。アーチ状に積まれた屋根部分においても、高さを合わせるための煉瓦本体への加工(薄く削っている)が確認される。

煉瓦構造物左側面(西側)には、煉瓦長手部分が 上面になるように積まれている。また、その長手部 分には斜めにモルタルが残存していることから、こ の部分からアーチ状に積み上げられた可能性があ る。トレンチ調査時にアーチ状の煉瓦が検出されて いることからも窺える。煉瓦構造物左側面(西側) はアーチ状の天井を有する構造であったと考えられ る。

(2) 内部構造(第51・52図)

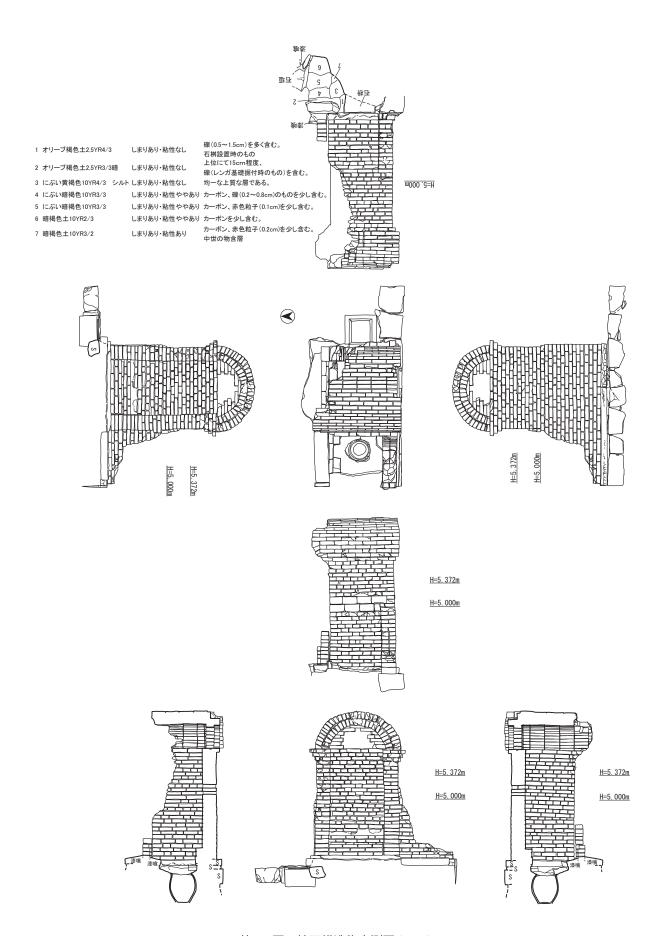
① 上位便槽甕(第53図)

調査当初より、トイレとしての機能が想定されており、その内部構造の確認を行った。現況においては、馬門石の板石により蓋がされ、その蓋石を撤去するとモルタル製便座が検出された。便座は中央部が窪んでおり甕との設置部分は穴が開いている。モルタル製便座の下位には馬門石の角材が3石検出され、その中央に便槽甕が検出された。馬門石により嵩上げがなされている状態で、便座と馬門石角材の間には多くの現代の遺物が検出され、トイレとしての機能が現代まで存続していたことが判明した。

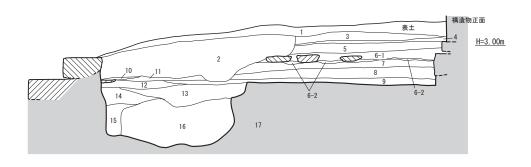
② 下位便槽甕(第54図)

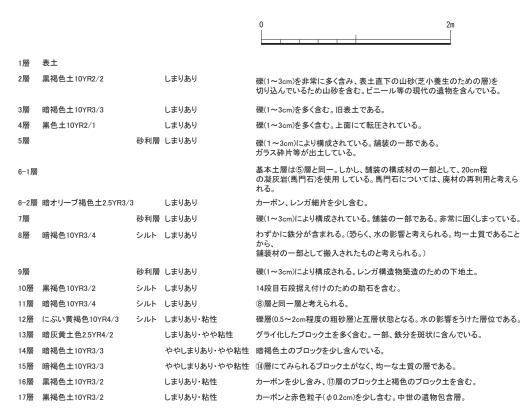
上部便槽甕の下から、初期の便槽甕が検出された。 便槽甕の周囲は漆喰により便槽甕の口縁部を固定していることが確認された。漆喰の直下には径5cm程度の円礫が充填されており、これは便槽甕の固定材として使用されていると考えられる。便槽甕の内部からは、径3~5cmの円礫が埋土上位~中位にかけて多く検出された。埋土下位は黄褐色粗砂が堆積し、廃棄が一時期に行われたことが窺える。遺物の出土はない。

煉瓦構造物の西側においても、このような傾向に あり、下位便槽甕の上位に便槽甕が据付けられてい

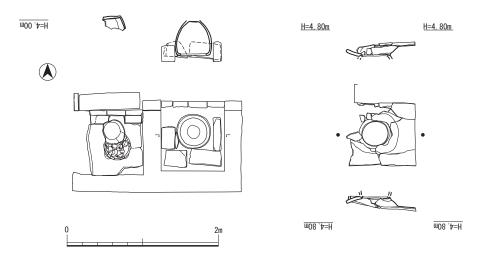


第 49 図 煉瓦構造物実測図 (1/60)

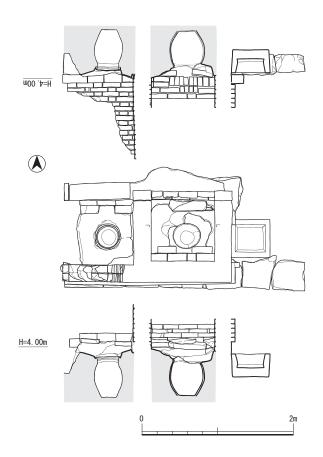




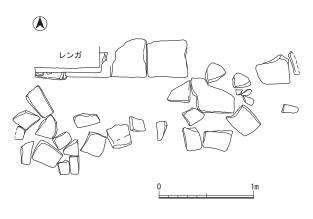
第50図 煉瓦構造物内部土層断面実測図 (1/40)



第 51 図 煉瓦構造物上層平面·断面実測図 (1/50)

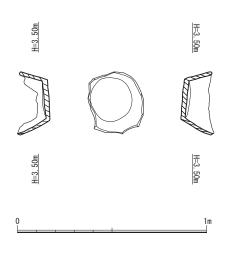


第52図 煉瓦構造物内部下層実測図 (1/50)

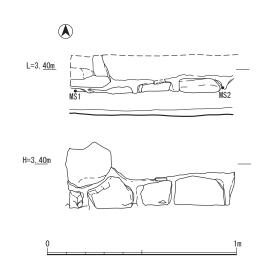


第 53 図 凝灰岩実測図 (1/40)

る。上位便槽甕の残存状態は非常に悪く、底部のみの出土であった。下位にて検出した便槽甕の内部には径3~5cmの円礫が多く充填されており、一時期に廃棄されたことが分かる。



第 54 図 上位便槽実測図 (1/20)

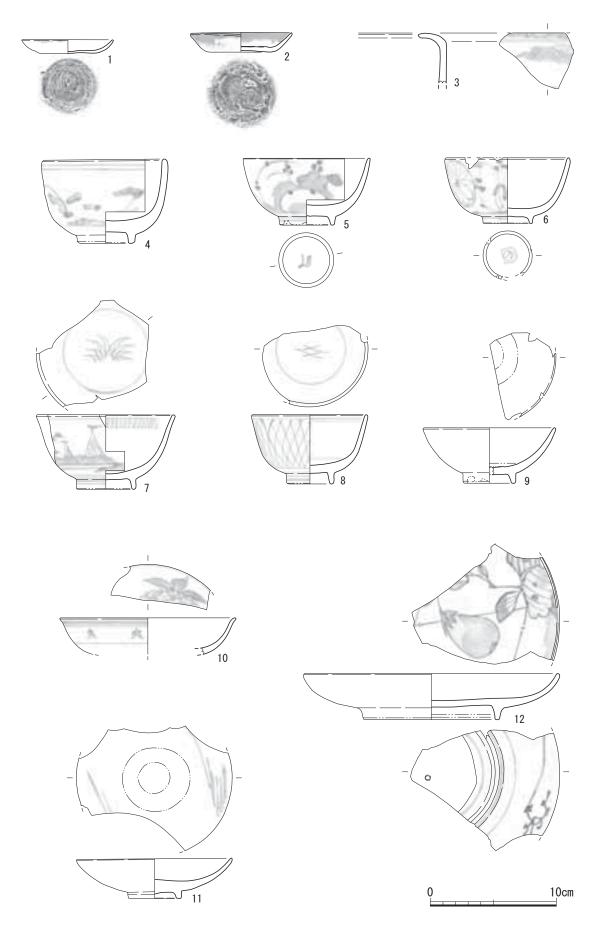


第55図 煉瓦構造物下位の石積実測図 (1/20)

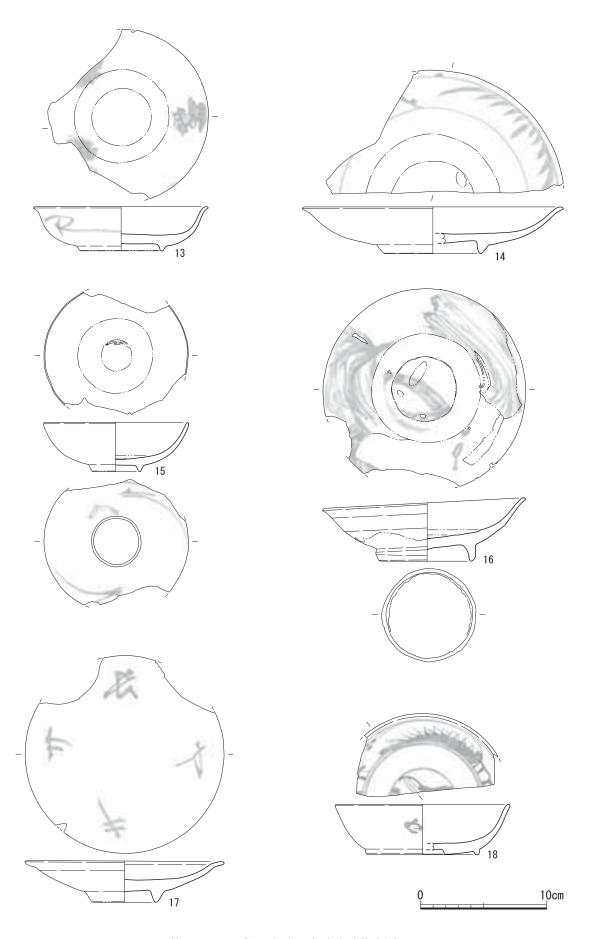
③ まとめ

以上のように、確認された便槽構造は陶器甕の設置によるもので、ともに初期の便槽甕廃棄後に嵩上げされた状態で新たに便槽甕を設置している構造である。

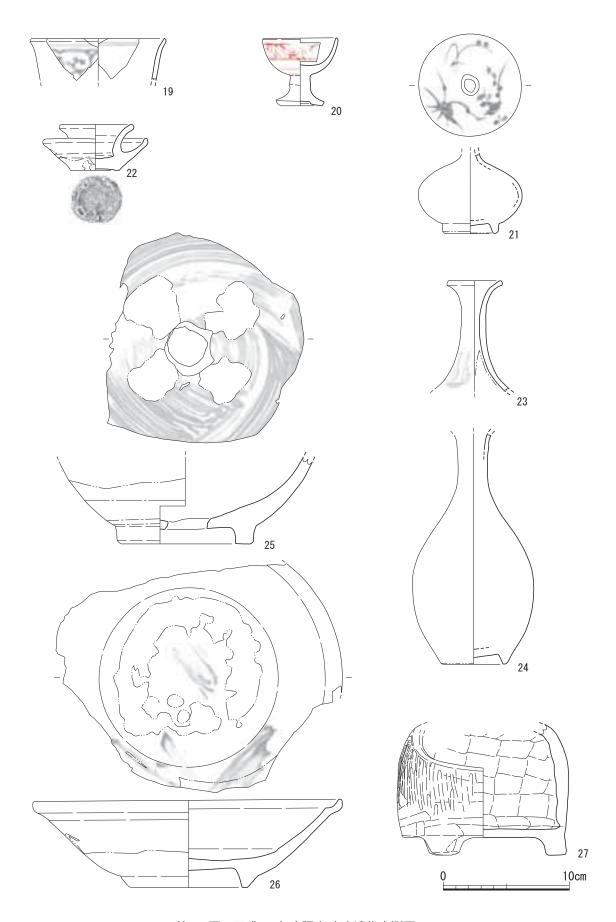
甕底部は穿孔を有せず、汲み取り式のトイレである。 煉瓦構造物中央部及び西側の上位、下位の便槽甕で は時期差が確認される。しかし、煉瓦構造物中央部 と西側の上位、下位便槽の使用時期はそれぞれ重な るものと考えられる。



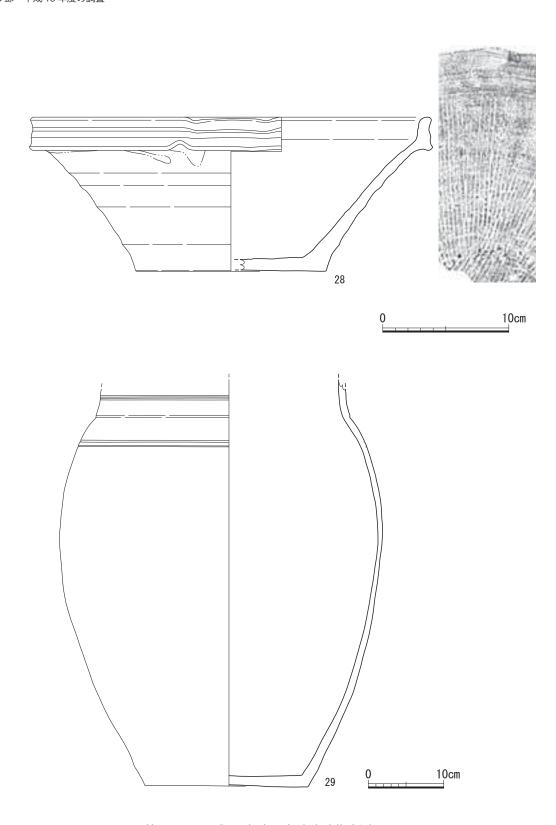
第 56 図 平成 18 年度調査 出土遺物実測図 -1 -



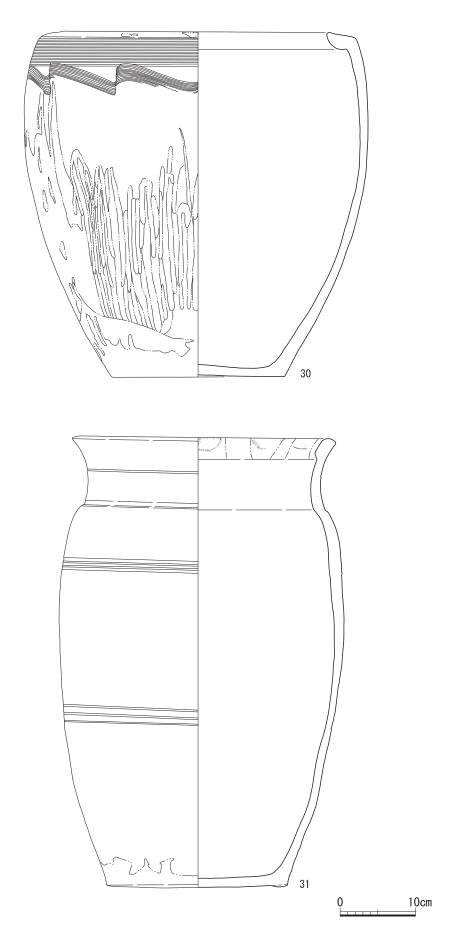
第 57 図 平成 18 年度調査 出土遺物実測図 - 2 -



第 58 図 平成 18 年度調査 出土遺物実測図 - 3 -



第59図 平成18年度調査出土遺物実測図-4-



第60図 18年度調査出土遺物実測図-5-

第 4 表 平成 17 年度 陶磁器観察表

插図	図 番号 種別 器種 産地		出土位置									
挿図 番号			遺構	層位	部位	口径	底径	器高	高台高	外器面		
45	1	陶器	碗	肥前?	2Tr	_	体部~底部	_	(4. 6)	(4. 5)	1. 2	工具痕

第5表 平成18年度 陶磁器観察表

括図		13, 10 4/3		10世(天文	出土化	置			法量(cm)		
挿図 番号	番号	種別	器種	産地	遺構	層位	部位	口径	底径	器高	高台高	外器面
56	3	染付	六角形 香炉?	有田	2Tr 表採	_	口縁	_	_	(4. 0)	_	_
56	4	陶胎染付	碗	肥前	2Tr 表採	_	口縁~底部	9. 9	4. 55	6. 7	_	_
56	5	染付	碗	波佐見	2Tr 表採	_	口縁~底部	(10. 1)	4. 35	5. 3	_	_
56	6	染付	碗	肥前	2Tr 表採	_	口縁~底部	9. 95	3. 9	5. 2	_	_
56	7	染付	碗	肥前	最下流 石張	_	口縁~底部	(11. 0)	4. 7	5. 9	_	_
56	8	染付	碗	肥前系	2Tr 表採	_	口縁~底部	(9. 25)	3. 7	5. 5	_	_
56	9	陶器	碗	肥前	2Tr 表土	_	口縁~底部	(10. 5)	(4. 2)	4. 4	0.8	_
56	10	染付	ш	有田	2Tr 表採	_	口縁~体部	(14. 0)	_	(2. 9)	_	_
56	11	染付	ш	肥前	2Tr 表採	_	口縁~底部	12. 35	4. 15	3. 2	_	_
56	12	染付	ш	肥前	2Tr 表採	_	口縁~底部	(20. 3)	(10. 8)	3. 65	0. 95	_
57	13	染付	ш	肥前	2Tr 表採	_	口縁~底部	(11. 85)	6. 65	3. 5	_	_
57	14	磁器	ш	肥前系	2Tr 表土	_	口縁~底部	(20. 7)	(7. 8)	3. 7	_	_
57	15	染付	ш	肥前	2Tr 表採	_	口縁~底部	11. 5	3. 95	3. 9	0. 55	_
57	16	陶器	ш	内野山	2Tr 表採	_	口縁~底部	16. 15	7. 9	5. 0	1. 35	ハケ模様 ケス゛リ
57	17	染付	ш	肥前系	2Tr 表採	_	口縁~底部	15. 8	5. 2	3. 3	_	_
57	18	染付	ш	肥前系	2Tr 表採	_	口縁~底部	(13. 9)	(9. 0)	4. 0	0. 45	_
58	19	染付	猪口 (小鉢)	肥前	2Tr 表採	_	口縁~体部	(10. 8)	_	(3.3)	_	_
58	20	色絵	仏飯器	有田	2Tr 表土	_	完形	6. 0	3.8	5. 4	_	_

	調整		色記	問	(+t+ -t	写真	
外底面	内器面	内底面	胎土	釉	備考	図版	
T					18c後半 高台に特徴あり 鉄釉	16	
釉の掻きとり	ハマ痕か?	_	キャメル	エホ゛ニーフ゛ラック	内底の一部に細かい貫入有		

	調整		色	色調	/++ +v	写真
外底面	内器面	内底面	胎土	釉	備考	図版
I	一部露胎(ケズリ)	_	ハ [°] ールホワイト	ハ゜ールホワイト	17c 末	15
釉の掻きとり	_	_	キャメル	灰汁色	17c 末~ 18c 前半 貫入有	15
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	藍白	18c 前半	15
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	藍白	18c 後半 付着物有	15
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	藍白	1820 ~ 1860	15
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	藍白	1820 ~ 1860	15
ケス゛リ	_	蛇の目釉剥ぎ	クリーム色	油色	17c 末~ 18c 前半 畳付部まで釉が流れる	15
_	_	_	スノウホワイト	藍白	17c 末 口銹有	-
ケス゛リ	_	蛇の目釉剥ぎ	スノウホワイト	スノウホワイト	17c 末~ 18c 前半	15
釉の掻きとり 釉剥ぎ ハリササエ跡	_	_	シルハ゛ーク゛レイ	フロスティク゛レイ	17c 末~18c 前半 口銹有 高台内にハリササエ跡 1ヶ所残存 内外面に貫入有	15
釉の掻きとり	_	蛇の目釉剥ぎ	スノウホワイト	リリーホワイト	18c 前半~中頃 付着物有	15
_	文様	蛇の目釉剥ぎ	ハ° ールホワイト	ミストク゛リーン	18c 後半~ 19c 前半 付着物有	15
釉の掻きとり	_	蛇の目釉剥ぎ	スノウホワイト	リリーホワイト	18c 後半 砂粒付着 外面に文様有 鉄絵?	15
ケス゛リ	ハケ模様	蛇の目釉剥ぎ ハケ模様	鳶色	オリーブドラブ 油色 サロー	18c 後半~ 19c 前半 砂粒付着	15
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	リリーホワイト	19c	15
釉剥ぎ	_	_	ハ [°] ールホワイト	フロスティク゛レイ	19c 前半 蛇の目凹型高台	15
_	_	_	スノウホワイト	藍白	17c 末~ 18c 初	-
ケス゛リ	_	_	ハ [°] ールホワイト	ハ° ールホワイト	19c 前半	15

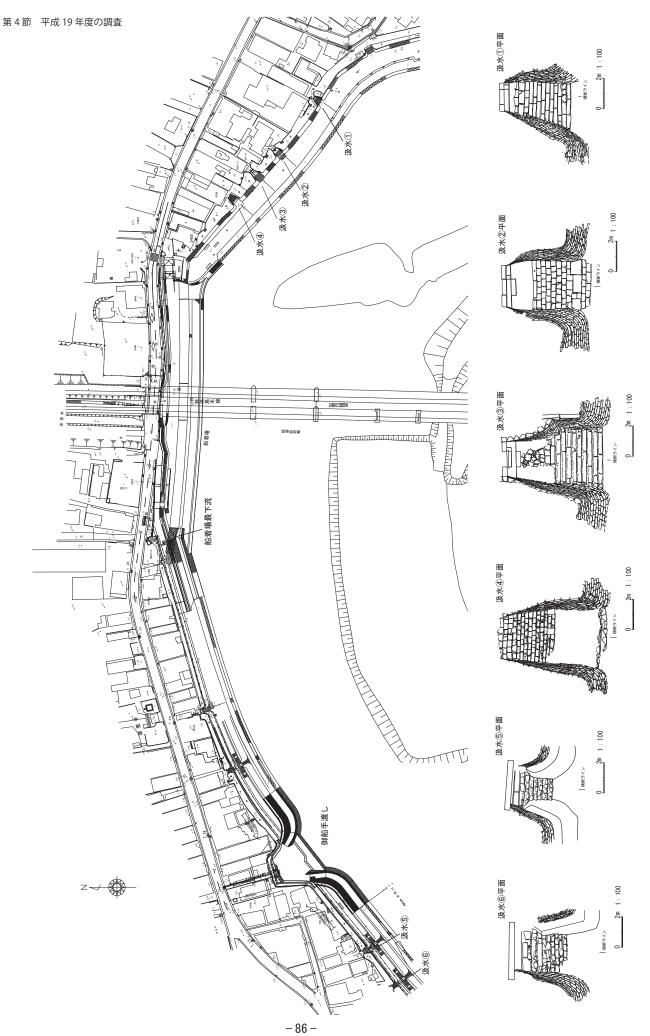
±€1071					出土位	置			 法量	(cm)		
挿図 番号	番号	種別	器種	産地	遺構	層位	部位	口径	底径	器高	高台高	外器面
58	21	染付	瓶(油壺)	肥前	2Tr 表採	_	胴部~底部	_	4. 4	(6. 4)	0.8	_
58	22	陶器	灯明皿	肥前	2Tr 表土	_	口縁~底部	5. 9	3. 9	3. 65	_	回転ナデ
58	23	染付	瓶	肥前	2Tr 表採	_	口縁~頸部	(4. 4)	_	(8.8)	_	_
58	24	白磁	瓶	肥前	2Tr 表採	_	頸部~底部	_	(5. 25)	(18. 3)	_	工具跡?
58	25	陶器	鉢		2Tr 表採	_	底部	_	10. 8	(6. 9)	_	ケス゛リ
58	26	陶器	鉢	肥前	2Tr 表採	_	口縁~底部	(24. 6)	9. 25	7. 0	0.9	ロクロナテ゛ケス゛リ
59	28	陶器	擂鉢	信楽?	2Tr 表採	_	口縁~底部	(31. 8)	(15. 1)	12. 25	_	ロクロナテ゛ ケス゛リ
59	29	陶器	甕 (便漕)	肥前	本体 I 期	_	肩部~底部	_	21. 7	(53. 85)	_	沈線
60	30	陶器	甕(便漕)	肥前	レンガ (トイレ)	_	完形	内 34.0 外 41.6	22. 8	45. 8	_	胎土目跡
60	31	陶器	甕(便漕)	肥前	西側I#	_	完形	34. 85	24. 0	59. 95	_	胎土目跡ロクロナデ

第6表 平成18年度 土器観察表

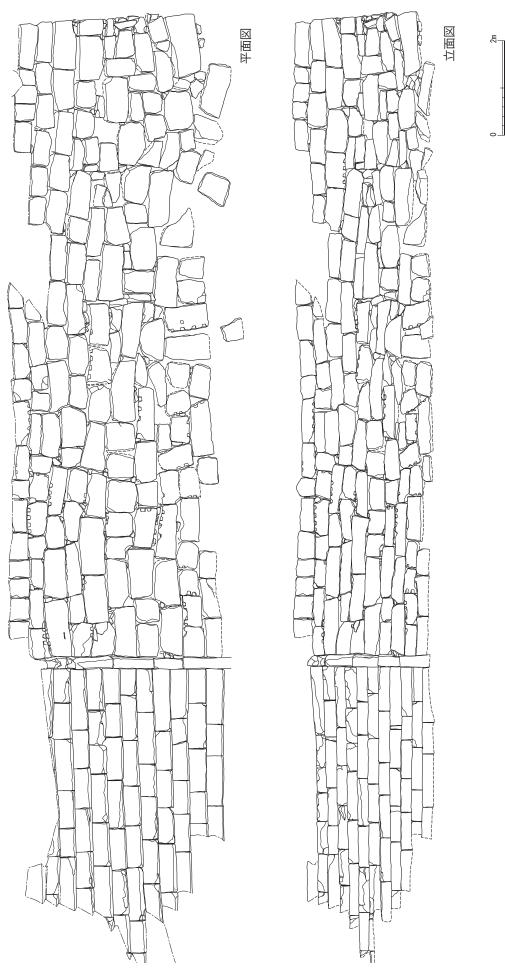
挿図	亚口	14 Dil	ᅃᅊ		出土	出土位置部位		法量	(cm)		
挿図 番号	番号	種別	器種	産地	位置	部位	口径	底径	器高	高台高	外器面
56	1	土師器	小皿	_	2Tr 表採	口縁~底部	7. 25	4. 3	1. 1	_	回転ナデ
56	2	土師器	灯明皿	_	2Tr 表採	ほぼ完形	8. 1	5. 4	1. 55	_	回転ナデ
58	27	瓦質土器	手焙り	久留米? 柳川?	2Tr 表採	体部~底部	_	13. 0	(10. 4)	_	板状工具によるナデ 板状工具によるナデ 後、縦方向のミガキ ナデ

	調整		色	調		写真
外底面	内器面	内底面	胎土	釉	備考	図版
釉の掻きとり	ロクロナテ゛	_	アイホ゛リホワイト	フロスティク゛レイ	18c 後半	15
回転糸切り離し	_	_	テラコッタ	焦茶	17c 末~ 18c 受け皿口径 (8.3cm) 鉄釉内底面まで釉が垂れる	15
_	ロクロナテ゛	_	ハ゜ールホワイト	リリーホワイト	17c 後半	15
釉の掻きとり	_	-	シルバーク・レイ	フロスティク゛レイ	17c 前半~中頃 碁笥底高台 釉の厚みが不均等 体部の釉の下のケズリの一部が見える	15
ケス゛リ	砂目	_	テラコッタ	ミストク゛リーン 焦茶	17c 後半 底部に穿孔有	14
ケス゛リ	部分的に露胎 部あり ロウロナデ	_	樺色	鳶色	18c 前半 内底面に砂粒付着	14
† ₹* ?	擂り目ロクロナデ	_	クリーム色	ラセット コ゛ールト゛	17c~ 明石(佐土原)の影響	14
_	_	_	スティールク゛レイ	鳶色	18c ~ 19c 前半 砂粒付着 本体 I 期	14
_	付着物有	_	鳶色	焦茶	19c 中央便漕 格子9件 口縁部に胎土目跡 外面口縁下に計目、櫛描波状文 外面柿釉の上に不透明の白っぽい釉 が掛かり全体に垂れた状態	14
ケズリ 胎土目 2 ヵ所 残存	_	-	鳶色	焦茶	18c後半~19c前半 西側 I 期 青海波タタキ 口唇部と底面に胎土目有 口縁部平面楕円形を呈す	14

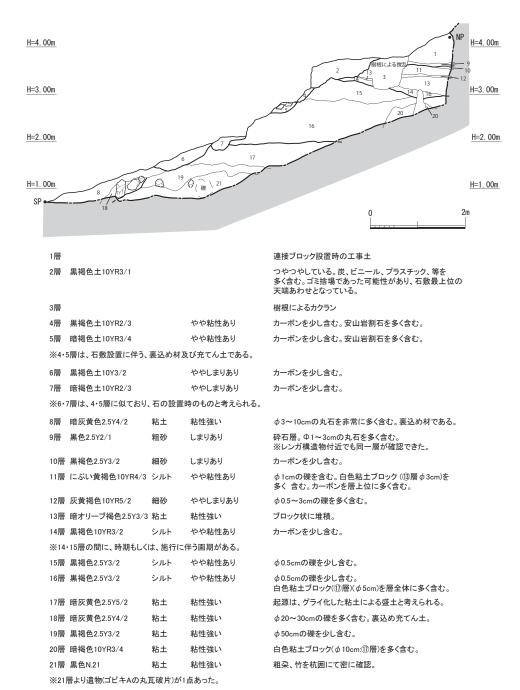
	調整		色調	/## ** /-	写真
外底面	外底面 内器面 内底面		胎土	備考	図版
糸切り離し?	回転ナデ	ナデ゛	(内外)灰白	(灯明皿)	15
回転糸切り離し	回転ナデ	回転ナデ	(内外) 橙色	内外面ともに口縁部全体に油煙が付着する	15
†デ 板状工具による †デ後、指ナデ				17c 末~ 18c(18c 中心) 三足 脚1足欠損 窓部完全に残存しない為、詳細は不明	15



第 61 図 船着場周辺遺構図 (1/200)

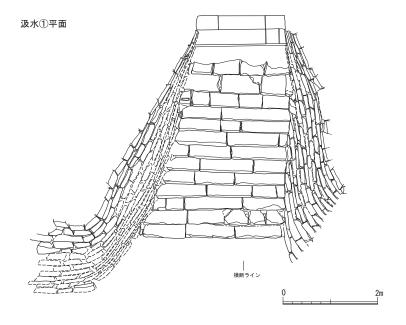


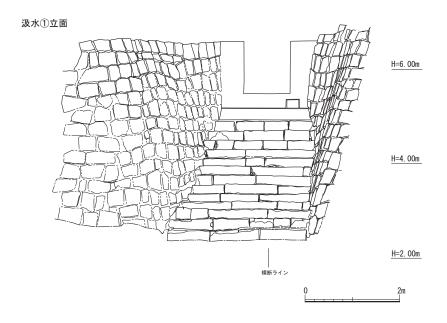
第62 図 平成19年度 最下流石段平面·立面実測図(1/80)

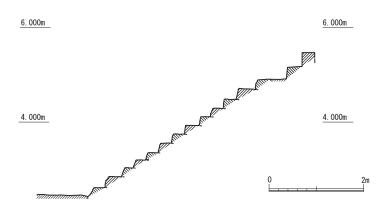


※17より上位層は再構築に伴う盛土と考えらえる。最も古の造作に伴うのは17・19・21である。

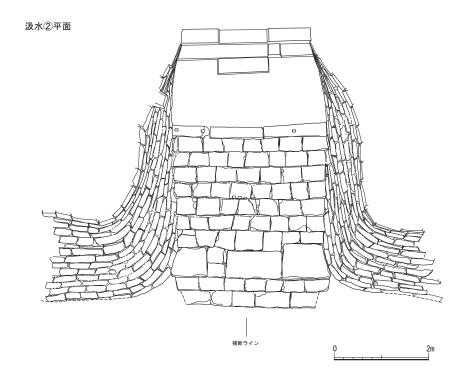
第63 図 最下流石敷土層断面図(1/80)

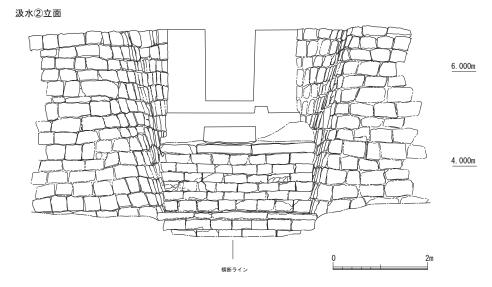


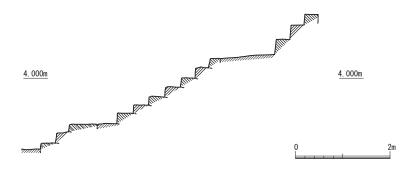




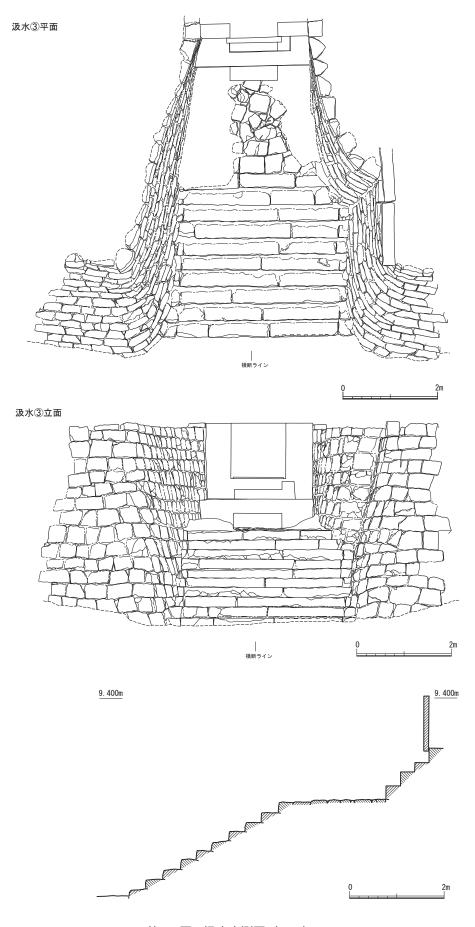
第 64 図 汲水実測図 (1/80) - 1 -



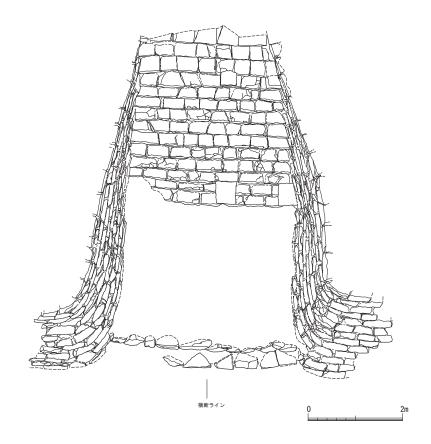




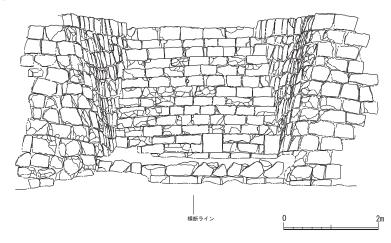
第 65 図 汲水実測図 (1/80) - 2 -

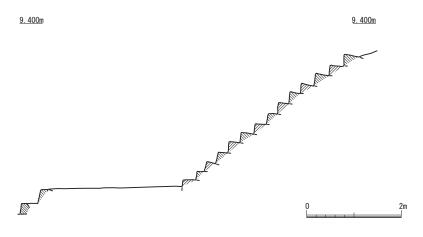


第 66 図 汲水実測図 (1/80) - 3 -

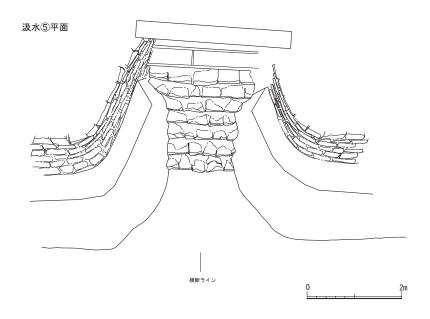


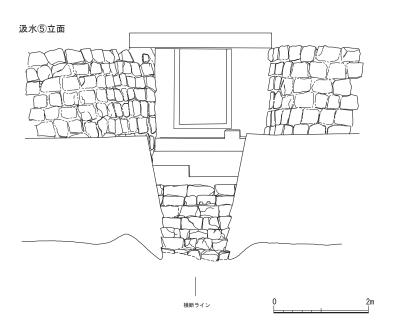
汲水④立面

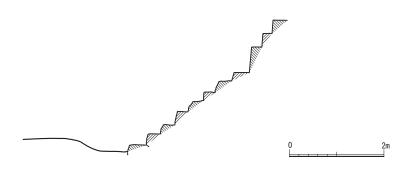




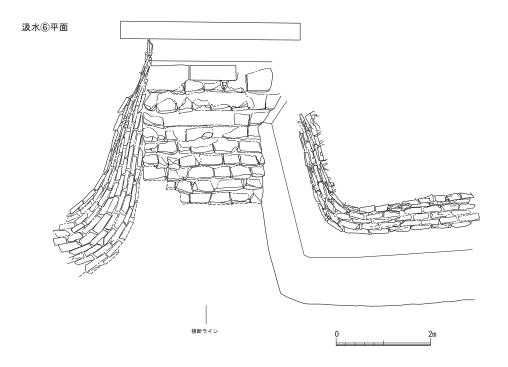
第 67 図 汲水実測図 (1/80) - 4 -



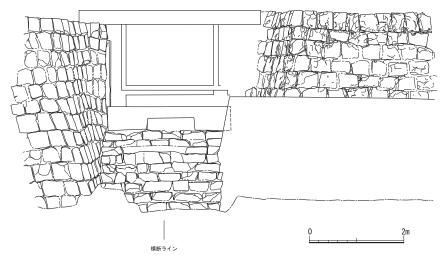


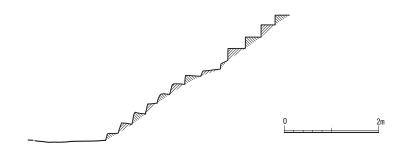


第 68 図 汲水実測図 (1/80) - 5 -



汲水⑥立面





第69図 汲水実測図(1/80)-6-

第5節 平成20年度の調査 第Ⅲ章 調査の成果

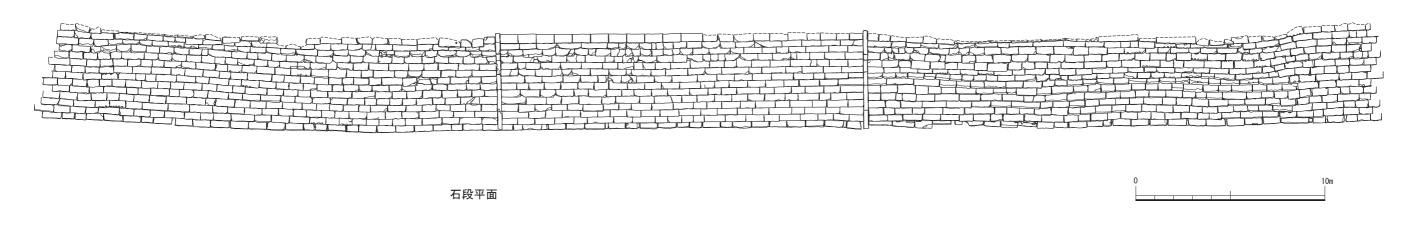
第5節 平成20年度の調査

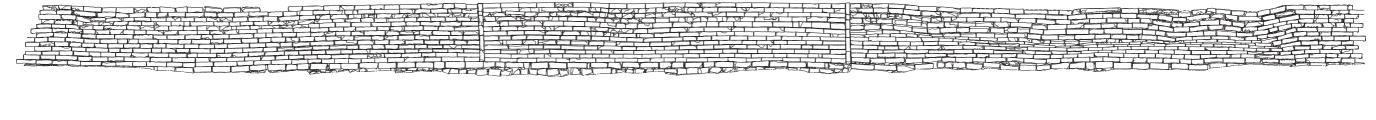
1. 船着場の調査

特定することを目的として実施した。また、調査が

船着場は、加勢川の右岸に所在する。今年度の調 複数年度にわたっているため、過去の調査成果の差

査は、船着場の基礎構造を明らかにし、構築時期を 異を把握することに留意した。





第70図 平成20年度石段平面・立面実測図(1/200)

石段立面



平成 20 年度調査 石段部全景(下流より)



平成 20 年度調査 石段部全景(上流より)

(1) トレンチ1 (第71・72図)

このうち、8a~19層までが①にあたる。階段 状に整形した後に裏込め石と土が充填されているため、下層よりしまりが弱い。このうち、1~7段目 直下の17~19層からは現代の遺物、ガラス瓶の 破片が出土した。現代の遺物は、プラスチックなど 重量の軽いものが多く、隙間から落ち込んだもので ある可能性が高い。

しかし、ガラス瓶の破片は、直下の暗緑灰色粘土 層との層境に近い位置で種類の異なるものが数点出 土しており、この土層の形成時期を示す証拠となる。 ②のうち細砂を多く含んだシルト層が、20~ 23,25~30層である。これまでの調査成果により、

23,25~30層である。これまでの調査成果により、 石段構築時の盛土層に含まれることが分かっている 褐色砂質土ブロックを含んでいる。包含される遺物 は、土師器坏、小皿と白磁の小片に瓦、石鍋の破片 が数点である。土色、土質が似ているものの、含ま れるブロックの大きさが上層にいくにつれて小さく なることや、傾斜がついた堆積もみられることから、 盛土は数回にわたって行われたと推測される。

③は24,33~44層である。暗緑灰色粘土と砂が混じる層、砂で構成される。粗朶は、薄い層状のものが3ヶ所(31,32,24層)で確認できるのみである。層中に先端を尖らせた木杭が入るが、頂部がまったく潰れておらず、打ち込んで杭として使用した痕跡が認められない。出土状況と観察から、木杭としては未使用であると推測される。構造物と表現できる状態の柵や土嚢などは検出されず、一見すると水成堆積のようであるが、粘土と砂は層状でなく、ブロックの状態で混じるため、盛土であることが分かる。これまでの調査成果で、通称「ガタ土」と表現されてきた、土留状遺構を構成する粘土層である。地山である自然堆積層に直に載る状態であるため、石段構築時の盛土層である可能性が高い。

河床部の土層は、①現在の復元工事に伴う埋め戻し土、②土留状遺構を構成する土層で構成される。

①にあたる1,2層はプラスチックやジュース缶が混じるが、直下は石段部でも確認された通称「ガタ土」の3~5層である。石段に対して直角に設置された木杭は、樹皮付きのものと六角形に面取り

されたものと2種類あり、長い方の六角形の木杭は、 根石の下位まで続いている。そのため、根石の設置 以前に構築されたものであることが分かる。木杭の 間には竹を、直下には盛土と粗朶層を確認した。木 杭よりも下位の盛土は、土色、土質が異なるものが、 断面で少なくとも2種類は確認された。粗朶は粗 朶のみで層をなすものと、粘土層の中にまばらに含 まれるものとがある。根石と裏込めによって土層が 分断された状態となっているものの木杭の検出状況 から、石段部、河床部の土留状遺構は一体のものと して構築されたことが推測される。トレンチ1の 調査で注目されることは、石段基礎の構築時期を想 定できる木簡が出土したことである。木簡は、木杭 よりも下位で粗朶をまばらに含む粘土層の中から出 土した。「ガタ土」層中では、土師器の破片が数点 出土したのみである。

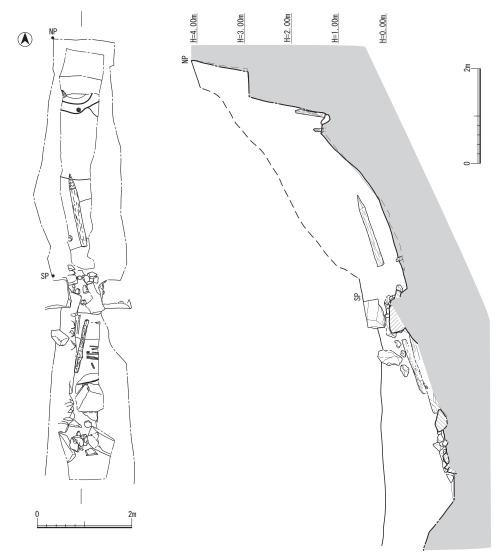
(2) トレンチ2 (第73・74図)

土層は石段部で大きく2種類に区別できる。トレンチ1と異なるのは、木杭の頭部が確認できる深さまで掘削されていた点で、シルト、砂質土層の盛土(19,20層)は、ごく一部で確認されたのみであった。木杭の直上層である12,13層には、ビール瓶の破片やごく細かい破片になった発泡トレー、プラスチック製の梱包用の紐などの現代の遺物が含まれていた。現代の石段が構築される際に、この深さまで掘削の影響を受けたことが分かる。

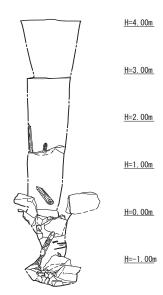
掘削が自然堆積層 (地山) にまで及んでいたため、 検出できた「ガタ土」層は薄かったが、26 層上面 で粗朶層を確認した。また、自然堆積層 (地山) に 並んで打ち込まれた木杭の背面で、横方向に設置さ れた竹を検出した。この竹もトレンチ1と同様、柵 状ではなく、土の中に含まれている状態であり、土 留めの役割を果たすものであると推測される。29 層までが「ガタ土」層である。

「ガタ土」盛土の直下は自然堆積層(地山)で、石段の1段目から3mほど河床部側まで検出した。それよりも河床部側は湧水のために掘削できず、自然堆積層は確認できなかった。石段部の自然堆積層(地山)は、これまでの調査で確認されてきたように、階段状に整形されていた。

平面図



立面図



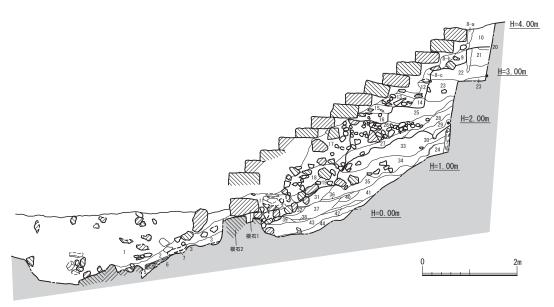
石段部で注意しなければならないのは、根石が検出されなかった点である。根石があるべき位置は、礫を多く含んだ土層が占めており、河床部側で長さ40~80cm程度の石がまとまって出土した。石は、直方体に整えられたものと矢穴が確認できるものとがあり、その石の上に根石が検出されなかったことを合わせると、石段を構成していた一部が流出した可能性が高い。

下流側トレンチ1平面・立面・断面実測図 (1/80)

71 🗵

(3) トレンチ 3(第75・76図)

深度 70cmという掘削ではあったものの、トレンチの河床部側で「ガタ土」層と、並んで打設された木杭の頭部を確認した。木杭の背面に木材を、周囲では粗朶を検出した。この状況はこれまでの調査成

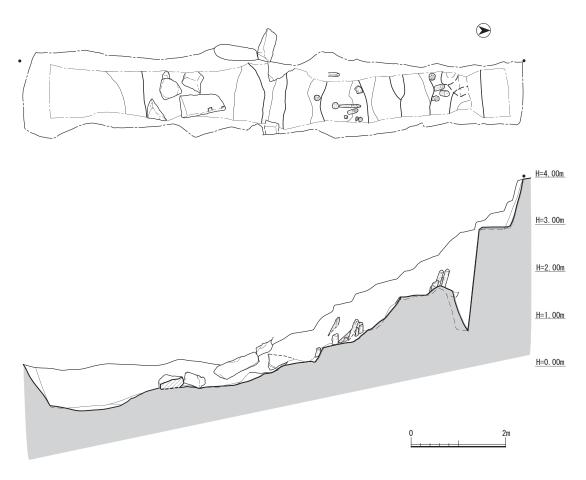


1.	層 オリーブ褐色2.5Y4/1	砂	しまり小	粘性小	シルト・砂・礫(φ0.2~50cm大)を秩序なく包含する。空き缶、ブラスチックなどを含み、 工事の敷かれた最も新しい撹乱土。 トレンチ内も埋土の中でもっとも赤みが強い。
2	層 灰オリーブ褐色5Y4/2	砂	しまり小	粘性小	砂(φ0.2~30cm)を大量に含む。層全体の隙間に下層の粘土を含む為。上層より青みが強い
3	層 黄灰色2.5Y4/1	粘土	しまり中	粘性中	粒が小さい均一の砂が時折まとまって混入する。同一方向でない竹(φ1.5cm以下)が稀に混じる
4	層 灰黄褐色10YR5/2	粘土	しまり中	粘性大小	褐色粘質土ブロック(¢2cm以下)を稀に含む。砂を含んだ粘土で赤味の強いもの。断面には現れないがこの層の下部にお札(荷札)を包含していた。4層自体には、横位の木杭(面取りされているものは、170cm。樹皮つきのものは、135cm)を包含している。
5	層 灰色7.5Y4/1	粘土	しまり中	粘性大小	粗砂と細かな礫を層状に含む。
6	層 灰色5Y4/1	粘土	しまり中	粘性大小	隙間に粗砂が多く含まれる。層中、黄味の強い部分と黒味の強い部分が混沌した 状態。腐食していない木質を稀に含む。人為的に盛土。
7	層 灰オリーブ灰色5G5/1	砂	しまり小	粘性小	単一な砂の均一層。木杭の裏でのみ確認できる。表面を水が流れた痕跡か?
8	層 灰黄褐色10YR4/2	シルト	しまり中	粘性小	10層と色調は同じであるが、しまりが極端に小さい。 $a\sim$ cは別々の時期に埋まったもの。 $a>$ c。 $8-a$ 以外は礫(ϕ $8\sim$ 15cm)を多く含む。
9	層 褐灰色10YR4/1	シルト	しまり中	粘性中	礫(φ4~20cm大)を含む。炭化物(φ1cm以下)褐色粘質ブロックが混じる。21層に裏込め石を 含んだ土層。
1	0層 灰黄褐色10YR4/2	シルト	しまり中	粘性中	粗砂・礫(ϕ 0.2~6cm)を含む。時折、山砂も混じる。直下の土層に隙間が多い。
1	1層				
1:	2層 黒褐色10YR4/2	シルト	しまり中	粘性中	円礫(φ5~10cm) 礫(φ20cm)を多く含む。
1	3層 黒褐色10YR4/2	シルト	しまり中	粘性中	円礫(ϕ 5~10cm) 礫(ϕ 20cm)を多く含む。礫は平たい面にして配置される。
1-	4層 灰黄褐色10YR4/2	シルト	しまり中	粘性中	礫(φ5~10cm)を含む。
1	5層 灰黄褐色10YR4/2	シルト	しまり中	粘性中	石段にごく近い位置でのみ円礫(ϕ 5~10cm)、礫を含む。
1	6層 灰黄褐色10YR4/2	シルト	しまり中	粘性中	石段にごく近い位置でのみ円礫(ϕ 5~10cm)、礫を含む。
1	7層 暗褐色10YR3/4	粘土	しまり小	粘性大	円礫(ϕ 10~15cm) 礫(ϕ 30~40cm)を多く含む。礫は、石段に近い方に配置される。
18	8層 暗褐色10YR3/4	粘土	しまり小	粘性小	礫(φ20~40cm)が平面をそろえるように並べて配置される。
1	9層 暗灰色2.5Y5/2	砂	しま中	粘性中	上層の粘土と(ϕ 3cm以下)粒が細かい砂が混じる。円礫(ϕ 5~15cm)礫とに区別されずに規則性なく含まれる。
2	D層 灰黄色2.5Y6/2	粘土	しまり大	粘性中	稀に礫を含む。粘質土と表現する方が適当。石段に近くなるとブロックの状態であるが、 それ以外では、粘質土のみの堆積である。
2	1層 褐灰色10YR4/1	シルト	しまり中	粘性中	小さめの礫(ϕ 0.2~4cm).炭化物(ϕ 1cm以下)褐色粘質土ブロックを含む。下層より褐色粘質土ブロックの粒が小さい。
2	2層 褐灰色10YR4/1	シルト	しまり中	粘性中	小さめの礫(ϕ 0.2~4cm).炭化物(ϕ 1cm以下)褐色粘質土ブロックを含む。上層との層境に褐色粘質土ブロックが まとまって層状に入る。層全体がブロックの層合体という印象で斑文様を呈する。
2	3層 黒褐色10YR3/1	シルト	しまり中	粘性中	褐色粘質土ブロック(φ0.5~4cm)を層状に含む。暗橙色土粒(焼土?)炭化物」が混じる。
2	4層 黄灰色2.5Y5/1	粘土	しまり大	粘性大	オリーブ灰(10YR6/2)粘土ブロックを含む。変色しているが検出時は、空色の粘土。打段された周辺の基盤層に堀り窪められ、粗朶層が敷かれている(厚さ6cm)
	5層 灰黄褐10YR4/2		しまり中		砂・炭化物・粘土を含む。褐色粘質土ブロックも稀に混じる。22・23層同様、自然堆積でない為、 粘土、砂、シルトはブロック状に混じり合っている。
	6層 灰黄褐10YR5/2		しまり大		円礫(05~16cm)を層状に含む。粘土は、円礫の隙間を充順している状態で礫層と表現してもよい程の割合である。
2	7層 暗灰黄色2.5Y5/2	砂	しま中	粘性小	小さめの礫(φ0.2~4cm)を含む。砂の粒子は細かく砂質土とも表現できる。層全体に鉄分の 沈着が認められる。
2	8層暗灰黄色2.5Y5/2	砂	しま中	粘性小	小さめの礫 $(\phi 0.2 \sim 4 cm)$ シルトを含む。層全体に細かな鉄分の沈着が認められる。
2	9層 灰黄色2.5Y5/1	砂質」	:しま中	粘性小	上層28に黄灰色粘土を含む為、上層よりは粘性が大きい。橙色焼土粒、炭化物を含む為、 上層より黒味が強い。
3	0層 暗灰黄色2.5Y5/2	砂質」	しま中	粘性小	粘土の多い部分砂の多い部分が層状に認められる。23層によく似る。

第72図 トレンチ1 土層断面図 (1/80)

トレンチ1土層注記

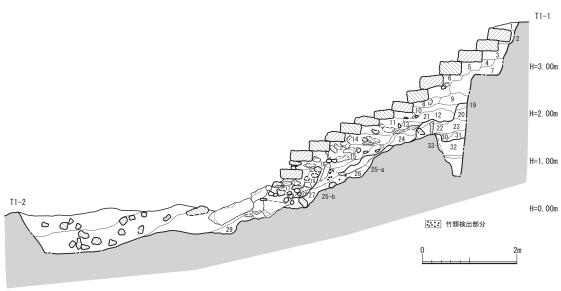
31層 暗褐色5G4/1	粘土	しまり中	粘性大	時折、渦巻いたような砂を含む。上層と境に粗朶層が確認できる。
32層 暗褐色5G4/1	粘土	しまり中	粘性大	上層より砂を多く含む。上層との境に粗朶層が確認できる。
33層 黄灰色2.5Y5/1	粘土	しまり中	粘性大	砂を含む。大きめの礫は全く含まれない。層中に砂の多い部分、粘土の多い部分、 いずれも存在するが層上の堆積ではない。
34層 黄灰色2.5Y5/1	粘土	しまり中	粘性中	砂、礫(ϕ 5~20cm)を含む。層全体に少量の粗朶が混じる。
35層 暗緑灰5G4/1	粘土	しまり中	粘性大	砂、粗朶を含む。粗朶は層全体に点々と混入している。
36層 暗緑灰5G4/1	砂	しまり小	粘性小	砂のみの層。他に何も含まない。
37層 暗緑灰5G4/1	粘土	しまり中	粘性大	所々で砂が層状に含まれる。上層との層境で粗朶層が確認できる。
38層 暗緑灰5G4/1	砂	しまり小	粘性小	わずかに粗朶を含む。
39層 暗緑灰5G4/1	粘土	しまり中	粘性大	砂を層状に含む。わずかに粗朶を含む。
40層 暗緑灰5G4/1	粘土	しまり中	粘性大	粘土のみの層
41層 暗緑灰5G4/1	粘土	しまり中	粘性大	砂を多く含む
42層 暗緑灰5G4/1	砂	しまり中	粘性大	
43層 暗オリーブ灰色2.5G4/1	粘土	しまり中	粘性大	層全体に満遍なく砂を含む。腐食しない木質を含み、上層より黄、黒味が強い。
44層 オリーブ黒色5Y3/1	砂	しまり小	粘性小	砂鉄のように直っ黒な砂層。地山である岩盤層。日が経っても変色しない。



第73図 トレンチ2平面・断面図 (1/80)

果や、トレンチ1,2で確認してきた「ガタ土」層 の盛土層と同様で、下位に土留状遺構が存在してい ると推測される。断面で打設された木杭の頭部が検 出された高さは標高 1.7 mである。トレンチ 2 で

部の標高 1.9 m、下段の木杭頭部の標高 1.0 mの中 間にあたる。これにより、トレンチ2では削平さ れて消失している部分が、トレンチ3では残存し ていると推定される。一部で確認できたに過ぎない 確認された木杭の高さと比較すると、上段の木杭頭 が、トレンチ3周辺では、トレンチ2周辺よりも



1層	黒褐色10YR3/2	シルト	しまり中・粘性中 黄褐色の礫の場合、山砂を層状に含む。礫(φ0.2~10cm)摩耗した遺物を稀に含む。
2層	黒褐色10YR3/2	シルト	しまり中・粘性中 礫(φ10~15cm)を含む。石段の裏に入っているものと同様の大きさ、形状の礫である。
3層	黒褐色10YR3/2	シルト	しまり中・粘性中2よりも含まれる礫の量が多い。
4層	黒褐色10YR3/2	シルト	しまり中・粘性中 土色は上層と同じであるが礫を含まない。
5層	黒褐色10YR3/2	シルト	しまり小・粘性中 4層と同じ色調であるがしまりが極端に小さい。
6層	黒褐色10YR3/1	シルト	しまり中・粘性中 礫(φ10~15cm)を石段に近い位置で含む。
7層	暗褐色10YR3/3	シルト	しまり大・粘性中 小さめの礫(φ5cm以下)炭化物を稀に含む。上層よりは色調明るい。盛土?
8層	黒褐色10YR3/1	シルト	しまり小・粘性中 石段に近い位置に礫を含む。隣接する9層の砂を多く含む。
9層	オリーブ褐色2.5Y4/3	砂	しまり中・粘性小 粒度の小さい砂地にシルトが混じった層。 礫 $(\phi 10 \sim 15 \mathrm{cm})$ を稀に含む。 生物の通り道?の痕跡が多く層中に隙間が多い。
10層	暗灰黄色2.5Y5/2	砂	しまり中・粘性小 石段に近い位置に礫(ϕ 10 \sim 15cm)を含む。上層よりは黒味が強い。現代の物を含むため最終構築時の埋土。
11層	暗灰黄色2.5Y5/2	シルト	しまり小・粘性中 石段に近い位置に礫(φ10~15cm)を含む。
12層	暗灰黄色2.5Y5/2	シルト	しまり中・粘性小 砂、シルトがブロックの状態で混じり合う。現代の物(ビニール、トレー、 バラン)を含む。
13層	暗灰黄色2.5Y5/2	砂	しまり中・粘性中 12層と同様に砂、シルトがブロックの状態で混じり合う。ただし砂は層全体に多く含まれている。
14層	暗灰黄色2.5Y5/2	シルト	しまり中・粘性中 石段に近い位置に礫を含む。層全体に砂を含む。
15層	暗灰黄色2.5Y5/2	粘土	しまり中・粘性大石段に近い位置に礫を含む。粗砂を層状に含む。
16層	暗灰黄色2.5Y4/2	粘土	しまり中・粘性大石段に近い位置に礫を含む。粗砂を層状に含む。上層よりは黄味が強い。
17層	灰黄褐色10YR412	粘土	しまり小・粘性大 $^{\mathfrak{R}(\phi 10 \sim 15 cm)}$ を大量に含むため層中に隙間が多い。昭和の再構築の際に大量に入れられた礫と推測される。 トレンチ1の礫層の埋土と酷似する。
18層	暗灰黄色2.5Y5/2	砂	しまり中・粘性中 礫(ϕ 10~15cm)を大量に含む。礫の隙間を埋めるように粘土が入る。
19層	黄灰色2.5Y4/1	粘土	しまり大・粘性大 黒褐色(2.5Y3/1)粘土、上層の暗灰黄シルトを細かいブロックの状態で含む。稀に礫(φ1cm程度)、 炭化物を含む。直上・直下の土層がブロックで混じった土層。
20層	黄灰色2.5Y4/1	粘土	しまり大・粘性大 褐色粘質土ブロック(φ0.2~8cm程度)を含む。土師片・瓦・炭化物などを稀に含み周囲の土層に 比べ極端に黒味が強い。トレンチ1で石段構築時の盛土と認識した土層とよく似る。
21層	暗灰黄色2.5Y5/2	粘土	しまり中・粘性大 13層と色調はよく似るが含まれる砂が若干少なく粘性が大きい。上層との層境に木質が入る (この木質そのものは石段構築時のものである可能性があるが再構築時に上層の土に混じったもの)。
22層	灰色5Y5/1	粘土	しまり中・粘性大 粗砂を多く含む。上層より下層(盛土)の色調に近いが砂が多いため再構築時の影響を 受けている可能性が大きい。
23層	暗灰黄色2.5Y4/2	粘土	しまり中・粘性大鉄分が層全体に点々と沈着している。20層よりは色調が明るい。石段構築時の盛土。
24層	暗灰黄色2.5Y5/2	粘土	しまり中・粘性大 粘土と砂とがブロックの状態で混じる。鉄分が層全体に沈着しており、時に層下部に顕著に認められる。
25層	暗オリーブ灰色2.5GY4/1	粘土	しまり中・粘性大 層全体に粗砂、礫(φ0.2~1cm)を含む。木杭の裏側には竹(φ2cm)が横位(東西方向)で入っている。瓦出土。
25-b	暗オリーブ灰色	粘土	しまり中・粘性大 木杭の裏側に竹(ϕ 1.5cm以下)が横位(トレンチと直行する方向)で入る。
26層	暗緑灰色10GY4/1	粘土	しまり中・粘性大 層全体に粗砂、礫(φ0.2~1cm)を含む。上層との層境にわずかに粗朶層がみとめられる。
27層	暗オリーブ灰色2.5GY4/1	粘土	しまり中・粘性大 ②上層より砂の割合が大きいため白味が強く見える。①層全体に粗砂、礫(ゆ0.2~1cm)を含む。 25-b層と同様に木杭の裏には竹が入る。ただし竹は構造物そのものでなく層として入る状態。
28層	暗灰黄色2.5Y5/2	粘土	しまり中・粘性大 粗砂を含む。上-下層(18, 27層)が混じった層であるため再構築時の影響を受けていると推定される。
29層	黄灰色2.5Y4/1	砂	しまり小・粘性小 礫(∮10~20cm)を含む。稀に竹が入るが横位でないため元位置を留めていない可能性あり。
30層	暗緑灰色10G4/1	粘土	しまり小・粘性大 粗砂を大量に含む。鉄分が縦方向に沈着する
31層	暗灰黄色2.5Y5/2	粘土	しまり大・粘性大 上層よりは色調が明るい。色以外の特徴は23層とよく似る。下層との層境に鉄が固まりの状態で沈着。 床土層のように固い。
32層	黄褐色2.5Y5/3	粘土	しまり大・粘性大礫を全く含まない。層中に黒褐色粘土が層状に入るが人為的なものでなく自然堆層である。地山。
33層	暗緑灰色10G4/1	粘土	しまり大・粘性大 礫を全く含まない。32層の層中と同じ高さで黒褐色粘土が入る。地山。

第74図 トレンチ2 土層断面図 (1/80)

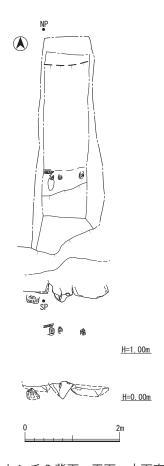
石段下位の構造物の残存状況が良い可能性がある。

また、トレンチ 3 周辺では表面で観察できる石 段直下の裏込め石の残存状態がよく、円礫の多さが 目立つ点が指摘された。石段のすぐ後ろに円礫が入 れられ、15cm以上で平らな面を持つ礫が、面を構 成するようにしかれている状況が確認された。時代 は不明であるが、石段が最終的に構築された際に、 施工者が意識して、丁寧な仕事を行った可能性があ るとの指摘を受けた。ただ、トレンチ 3 を掘削し た際に遺物が出土しなかったため、施工された時期 は不明である。

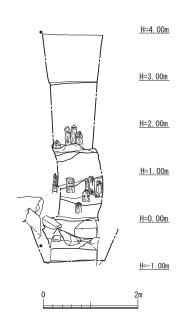
河床部の掘削は行わなかったが、河床部表面で根石前面に打ち込まれた木杭が確認された。根石の前面に沿わせるように打設されている。これまでのトレンチ調査で確認されてきた木杭の倍以上の太さで、直径26cmであった。木杭に接している根石を基準とした場合、その両隣の根石は河床部側にせり出た状態になっていた。この木杭は根石がせり出したり流出したりするのを防ぐ目的で打設されたものである可能性があり、今回の調査で初めて検出されたものである。

(4) 杭の観察

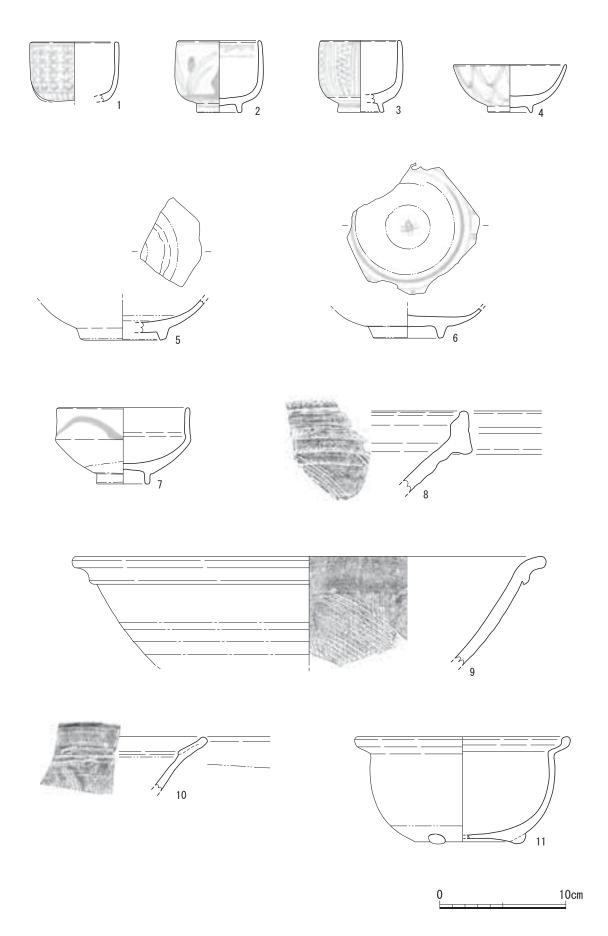
トレンチ1で14本、トレンチ2で6本、トレンチ3で5本の木杭を確認した。出土状況は、自然堆積層に打設されているか、打説されずに倒れた状態で「ガタ土」層中に入っているかいずれかであった。樹種、形状、直径の中に、これまで調査で確認されたものと共通点がみられた。樹種は調査時に認識できたもので松と、樹皮が付いたままの桜とが共通しており、形状は表面が加工されていないものと六角形に面取りされているものとが確認された。直径は8~9cmのものが全体の半数近くを占めており、使用する木材に規格があったことが推定される。



第75図 トレンチ3背面・平面・立面実測図 (1/80)



第76図 トレンチ3平面実測図(1/80)



第77図 平成20年度調査 出土遺物実測図

第7表 平成20年度陶磁器観察表

/13 / 3		1-30 20 1 13	СТОРАДИИ	H073 (L)								
插図		14 Dil	0014	★ 114	出	土位置			法量	(cm)		
挿図 番号	番号	種別	器種	産地	遺構	層位	部位	口径	底径	器高	高台高	外器面
77	1	染付	小碗	肥前	1Tr 表採	_	口縁~ 体部	(7. 0)	_	(4. 7)	_	_
77	2	染付	小碗	肥前	最下流 石張	_	口縁~ 底部	(6. 7)	3. 5	5. 7	_	_
77	3	染付	小碗	肥前	最下流 石張	_	口縁~ 底部	(6. 4)	(3. 7)	5. 7	_	_
77	4	染付	碗	肥前	2Tr	34・35 層	口縁~ 底部	(9. 0)	(3. 6)	3. 8	0. 5	_
77	5	白磁	碗	肥前?	1Tr	1-2 層	底部~ 高台部	_	(6. 8)	(3. 25)	1. 0	_
77	6	染付	ш	肥前系	2Tr	13-15 層	底部	ı	5. 55	(2. 4)	_	_
77	7	陶器	鉢	肥前	2Tr	34・35 層	口縁~底部	(10. 5)	4. 2	6. 05	0.8	ケス゛リ 文様
77	8	陶器	擂鉢	備前	2Tr	34・35 層	口縁	_	_	(6. 5)	_	ロクロナテ゛
77	9	陶器	擂鉢	肥前	2Tr	34・35 層	口縁~体部	(37. 6)	_	(8. 65)	_	_
77	10	陶器	擂鉢	肥前	2Tr	_	口縁	-	_	(4. 3)	_	ロクロナテ゛
77	11	陶器	鍋	関西系	2Tr	34・35 層	口縁~底部	(17. 1)	(7. 6)	8. 5	_	ケス゛リ

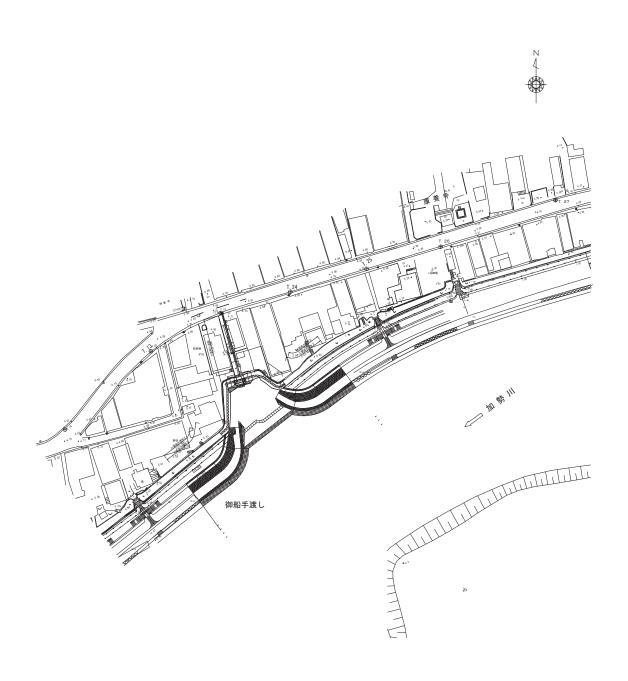
	調整		色	調	/## **	写真
外底面	内器面	内底面	胎土	釉	備考	図版
_	_	_	スノウホワイト	藍白	19c 前半	16
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	藍白	19c 前半 1810 ~ 1820 貫入有	16
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	藍白	1820 ~ 1860	16
釉の掻きとり	_	_	シルハ゛ーク゛レイ	フロスティク゛レイ 藍色 濃藍	18c 後半 網目文	16
ケス゛リ	_	蛇の目釉剥ぎ 重ね焼痕	アイホ゛リホワイト	ミストク゛リーン	18c 貫入有 高台端部の削り特徴的	16
釉の掻きとり	_	蛇の目釉剥ぎ	ハ゜ールホワイト	リリーホワイト	19c 前半	16
ケス゛リ	_	_	小麦色	ベージュ ろくしょう	18c 前半貫入有 削りだし高台 銅緑釉	16
_	擂り目ロクロナデ	_	(内外)鳶色	_	16c 末~ 17c 沈線 別個体の熔着痕	16
_	擂り目	_	弁柄色	黒柿色	18c	16
_	ロクロナデ 擂り目	_	れんが色	エボニーブラック 白ゆり色	17c 後半	16
ナデ゛ケズリ	_	_	ハ° ールホワイト	アンティックフ゛ラウン	19c	16

第6節 平成19・21年度の調査

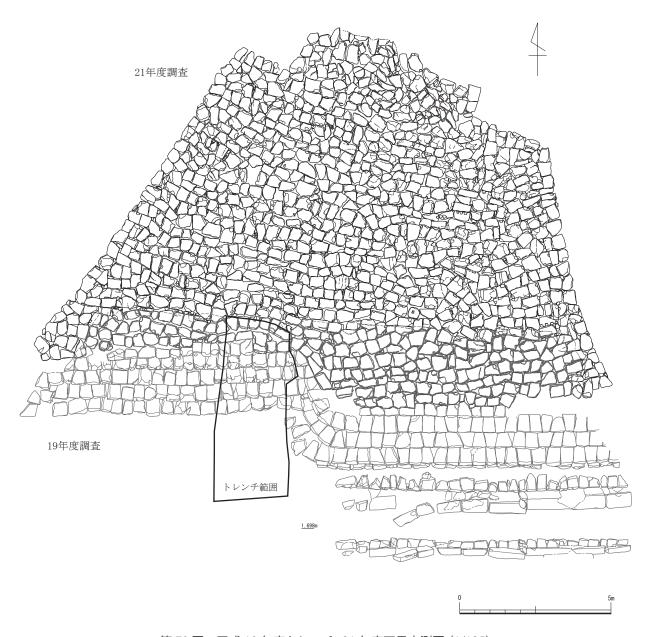
1. 御船手渡しの調査

御船手渡しは、加勢川の右岸に所在する。潮位を 写真資料を見る 勘案した構造である 14 段の石段護岸の下流に位置 ことが分かる。 する。

御船手渡しの構造は、丸角を有する 4~5段の石段に、緩やかに傾斜した石敷きが取り付く構造である。『川尻町史』(昭和15年)に掲載されている写真資料を見ると、現在の形態とほぼ一致していることが分かる。



第78図 御船手渡し 調査位置図(1/1500)



第79図 平成19年度トレンチ・21年度石畳実測図(1/125)

(1) 土層堆積(第80図)

今回の調査で確認した構造物を、土層堆積状況と 出土した遺物から検討する。今回は40層に区分す ることができた。また、層序の様相から3つの時 代を特定することができ、それぞれ、S-1~3とした。 構築に伴い、20~22層の下位にて河床面を想定

① S-1 (第81図)

瓦、円礫の廃棄は6層に包含され、8層はS-2を被の下位における31,32層との境が不整合であるこ 9層は全て人為的な堆積である。10層以下は全てた、堆積にある程度の期間があったと考えられる。

河川堆積物である。なお、1層の堆積は、昭和15 年以降に行われた改修によるものである。

② S-2(第82図)

構築は31層の上面において造作される。S-2の でき、石材(角閃石デイサイト、凝灰岩、砂岩)の 3-1層~8層までの堆積の中で造作される。目板 投棄が確認されている。23~30層の堆積と、そ 覆するとともに、S-1の形成面となっている。1~とから、河床面を想定することも可能であり、ま 28,30 層の上面においても同様に不整合であることから、河床面の想定をし得る。このような状況は、S-2 構築後にある程度の期間があったための結果と考えられる。

③ S-3 (第83図)

31~40層の河川堆積物に被覆される。この層は、 礫、粗砂、細砂、シルトと互層状態を呈している。 このため S-3 の埋没は、S-3 被覆層最下位に位置す る 40 層出土遺物から 18 世紀末~19 世紀初頭と 考えられ、S-3 構築はそれ以前に遡る。

23~40層からの出土遺物は、近世の遺物が主体を占める。22層からコバルト釉、紙型摺の技法を有する陶磁器を含むようになる。コバルト釉、紙型摺の技法の出現が明治10年頃との見解があることから、22層の堆積時期はそれ以降となる。23~40層にかけて、出土遺物は18世紀後半~19世紀中頃の陶磁器が主体であるが、堆積順が新しくなるにつれ、新しい遺物の割合が高くなる傾向にある。31層上面にて造作されるS-2は19世紀中頃の所産と考えられ、その機能時にはコバルト釉、紙型摺段階の陶磁器を含む堆積がある。S-2の天端面まで河川堆積物が堆積した時期に、S-1が構築される。その時期は8層からの出土遺物から19世紀末~20世紀初頭と考えられる。しかし、その後も数度の改修を受ける。

(2) 確認した構造物

① 石段及び石敷きと石段構築に伴う基礎構造 (S-1)

人為的な盛土である 5 層を除去すると、8 層の上面より掘り込みを確認した。掘り込み自体は緩やかに河床に向かって傾斜し、河床面へと続く。埋土は粘土質の強い暗褐色土であり、それを掘削すると、目板瓦、石材を検出した。目板瓦は廃棄されたような状況で検出され、その下位には径 10~30cm程度の川石と割石が確認できた。出土した目板瓦、石材の構造と現在の石段は一体のものである可能性が高いため S-1 とした。

検出した石材は、現在の石段1段目の前面を境に様相が異なる。石段1段目より上位では、目板 瓦とともに10~30cm程度の川石、割石を使用し ており、まれに漆喰も混入する。石段1段目より下位では、径50~100cm程度の割石が積み重なっている。これは現在の石段の構造と配置が一致し、石段1段目より上位は、石段の基礎材として機能し、石段1段目より下位は石段の捨石として機能しているものと考えられる。

今回検出した目板瓦、石材の充填は、石段部分に おいてこれらを被覆する 4,5 層が人為的な盛土であ ることから、現在の石段構築に伴う基礎構造である 可能性が高い。よって、目板瓦、石材の充填から現 在の石段までを一連の構造物としてみることができ る。

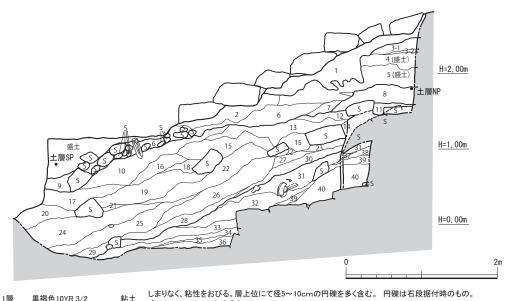
石段の構築時期は、昭和15年に発刊された『川 尻町史』に掲載された写真が現在の石段と一致する ことから、同年以前に遡るのは確かである。しかし、 埋土から薬瓶やアンプルなどが出土しているため、 その後も数度の改修を受けている可能性が考えられ る。それは土層堆積における1層の堆積状況から も窺える。8層の堆積がS-2を被覆し、S-1に掘り 込まれるため、8層から出土した遺物をもって構築 年代を推測すると、19世紀末~20世紀初頭には 現在の景観に近い石段を呈していたと考えられる。 しかし、その石段も数回の改修を受けている可能性 は高い。

② 石積み護岸 (S-2) (写真 = S-2の検出、S-2 階段の河床面、S-2 構築)

現在の石段及び石敷きより 1 m下で検出した。河川に向かって緩やかに傾斜するように形成されている。

平坦面に使用される石材は比較的、規格化された石材である。傾斜部分の石材は角がとれており丸みを帯びている。石材は角閃石デイサイト(島崎石)である。

S-2下部には基礎構造はなく、河川堆積物(31 層)の上面に直に設置していることが確認された。31 層の堆積要因は水成によるものであるが酸化の度合いが著しく、S-2 が機能していた期間がある程度長い可能性が示唆される。S-2 前面の河床部分には、径 60~80㎝の石材が投棄されたような状態で確認された。S-2 構築後に投棄されたものと考えられ、



```
1層
     黒褐色10YR 3/2
                   粘土
                        ビニール、スチール缶を含む。
2層
     黒褐色10YR 3/2
                   粘土
                       しまりなく、粘性をおびる。Φ5~10cmの円礫、角礫を多く含む。層全体に河川の影響のため砂がまじる。
3-1层
     黒褐色10YR 3/2
                   粘土
                        ややしまりあり、やや粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。
                                                             現石段構築時の盛土
3-2屋
     暗褐色10YR 3/3
                   粗砂
                        ややしまりあり、やや粘性をおびる。カーボンをわずかに含む。
                        しまりあり、粘性をおびる。Φ0.5~1cmの礫、カーボンを少量を含む。(現石段構築じの盛土)
     暗褐色10YR 3/3
                   粘土
4層
                        部分的に黒褐色粘土ブロック(φ10cm)を少し含む。
5層
     暗褐色10YR 3/3
                   粘土
                       しまりあり、粘性をおびる。Φ0.5~1cmの礫、カーボンを少量を含む。(現石段構築じの盛土)
                        しまりあり、粘性をおびる。カーボンを少量を含む。\Phi0.5 \sim 4cmの円礫を多く含む。(S-1埋土である。
6層
     黒褐色10YR 3/2
                   粘土
                        目板瓦が北側において多量に出土)
7層
     暗オリーブ褐色2.57 3/3 シルト しまりあり、粘性をおびる。カーボンを少量を含む。(8層をベースとしている。S-1埋土)
                        非常にしまっており、粘性をおびる。カーボンを少量含む。(盛土:S-1の遺構面である。工事面と考えられ
8層
     暗オリーブ褐色2.5Y 3/3 シルト
                        る。)*上面においては硬化している。
9層
     暗オリーブ褐色2.5Y 3/3 シルト しまりあり、やや粘性をおびる。7層と同一であるが、わずかに粗砂がまじる。(河川の影響)
10層
     黒褐色2.5Y 3/1
                   粗砂 しまりあり、粘性なし。Φ0.1~0.5cmの礫を多く含む。貝殻や木片を多く含む。
     黒褐色2.5Y 3/2
                   粗砂 しまりあり、粘性なし。Φ0.2~0.5cmの礫を多く含む。(S-2)を覆う。
11層
12層
     黒褐色2.5Y 3/1
                   礫
                       しまりあり、粘性なし。Φ0.5~1cmの礫を多く含む。
13層
     黒褐色2.5Y 3/1
                   礫
                       しまりあり、粘性なし。\Phi0.5~2cmの礫を多く含む。湧水のためか、一部酸化している。
14層
    黒褐色2.5Y 3/2
                   粗砂 しまりあり、粘性なし。Φ0.5~1cmの礫を多く含む。前面の礫間に落ち込んだ形での堆積。
    オリーブ黒5Y 3/2
                   粗砂 しまりあり、粘性なし。Φ0.5~2cmの礫を多く含む。
15層
16層
    オリーブ黒5Y 3/1
                   粗砂 しまりあり、粘性なし。Φ0.5~1cmの礫を多く含む。
17層
    オリーブ黒5Y 3/2
                   粗砂 しまりあり、粘性なし。Φ0.5~1cmの礫を多く含む。貝殻 木片を少し含む。
    オリーブ黒5Y 3/1
                   粗砂 しまりあり、粘性なし。
18層
19層
    オリーブ黒5Y 3/1
                   シルト ややしまりあり、やや粘性をおびる。流木を含む。炭化した木片を少し含む。
20層
    オリーブ黒5Y 3/1
                   粗砂 しまりあり、粘性なし。
21層
    オリーブ黒5Y 3/2
                   礫
                       しまりあり、粘性なし。Φ1~2cmの礫を多く含む。
22層
    黒褐色10YR 3/2
                   礫
                       しまりなく、粘性なし。Φ0.5~1cmの礫を多く含む。
23層
    オリーブ黒5Y 3/1
                   礫
                        しまりあり、粘性なし。Φ0.2~1cmの礫を多く含む。貝殻、繊維質の植物遺体を含む。
                       しまりあり、粘性なし。Φ0.2~1cmの礫を多く含む。貝殻、繊維質の植物遺体を含む。
24層
     黒色5Y 2/1
                   細砂
25層
                        ややしまりあり、粘性なし。
     オリーブ黒5Y 3/1
                   粗砂
26層
    オリーブ黒5Y 3/1
                   粗砂
                        ややしまりあり、粘性なし。25層と似るが25層とは不整合である。
27层
    オリーブ黒5Y 3/1
                   礫
                        しまりあり、粘性なし。Φ0.5~2cmの礫を多く含む。
28層
    オリーブ黒5Y 3/1
                   粗砂
                       しまりなく、粘性なし。下位にて安山岩礫(φ50cm)が1個堆積。
29層
    オリーブ黒5Y 3/1
                   礫
                        しまりあり、粘性なし。
30層
                   シルトしまりあり、粘性なし。
    灰色5Y 4/1
31層
    オリーブ黒5Y 3/1
                   礫
                        しまりあり、粘性なし。Φ0.5~2cmの礫を多く含む。木片植物繊維、貝殻が含まれる。
    オリーブ黒5Y 3/1
                   細砂 しまりなし、粘性なし。
32層
33層
    オリーブ黒5Y 3/2
                   礫
                        しまりなし、粘性なし。Φ0.5~2cmの礫を多く含む。
34層
    オリーブ黒5Y 3/1
                   粗砂 しまりややあり、粘性なし。
35層
    オリーブ黒5Y 3/1
                   細砂 しまりなし、粘性なし。
36層
    オリーブ黒5Y 3/2
                   礫
                        しまりあり、粘性なし。Φ0.5~2cmの礫を多く含む。
37層
    オリーブ黒5Y 3/1
                   シルトしまりあり、粘性なし。
38層
    オリーブ黒5Y 3/2
                   礫
                       しまりあり、粘性なし。Φ5~10cmの礫を多く含む。
39層
    黒色5Y 2/1
                   シルトしまりあり、粘性なし。
40層
    オリーブ黒5Y 3/1
                   礫
                      しまりあり、粘性なし。Φ0.1~3cmの礫を多く含む。
```

第80図 御船手渡しトレンチ土層断面図 (1/50)

河床に向かって不規則に点在する。その中には未使 用の墓石も含まれる。石材は角閃石デイサイト、凝 灰岩、天草砂岩などである。

S-2の構築時期については、31層に含まれる遺物の年代から19世紀中頃の構築と考えられる。河床における堆積は全て河川堆積物であり、S-3を被覆する堆積物と変わらないが、出土遺物には違いが認められる。江戸時代の陶磁器とともに、コバルト釉、紙型摺の技法を有する陶磁器を含むようになる。

③ 石敷き及び石段(S-3)(写真=石敷き及び石段、S-3を被覆する河川堆積物)

掘削したトレンチの最下位に位置し、確認した構造物の中で最も古い。石積み護岸(S-2)の下位で検出した。

流水と並行するように平坦面を石敷きによって形成しており、河川側は面を揃えている。その前面には階段の存在を窺わせるような石材が1石確認される。この並びの石材が欠如している部分を精査すると、裏込め材が確認された。平坦面を形成する石材は、現地産の角閃石デイサイトであり、比較的規格化されている。

この石敷きの一部を覆うように岸側に板石敷きがあり、厚さ 10cmの板石が階段状に 2 段設置されている。石材は角閃石デイサイトであるが、色調は赤みを帯びている。板石の表面調整は、ノミによる仕上げである。

なお、平坦面を形成する石材の中には、幅 11cm、深さ 5 cm程度の矢穴跡が確認される。底突きノミ痕は認められず、形態は半円形や逆台形状を呈し、1600 年前後の石割技法が窺える。

S-3 は河川堆積物により被覆され、それらを人為的に撤去したような痕跡はみられない。S-3 からS-2 形成時までの堆積が、全て河川堆積物によるものであることから、埋没からS-2 構築時までの間にはある程度の時間差が予想される。

S-3 を被覆する最も古い堆積層である 40 層から 出土する遺物の年代が 18 世紀末~ 19 世紀前半で あることから、S-3 の構築はそれ以前に遡ると考え られる。

(3) 石積護岸と石畳の構築の先後関係

石積護岸を覆うコンクリート壁が撤去された際に、構築の順序を確認した。階段⇒石積護岸⇒石畳(石敷き)の順序である。この状況は、階段が存在する状態で石積が構築されたことを示している。また、階段の直下に石畳は敷かれていなかった。逆に、階段の周囲を取り巻くように石畳が構築されており、石段を設置した後、石畳を敷いたことが分かる。

調査の主目的であったコンクリート壁直下の石畳は、石積護岸を覆う形で確認された。これは、石積 護岸の後に石畳が敷かれた状況を表している。以上 の状況は、構築の順序を表すが、時期差を示すもの ではない。階段の上に石積が載る状況が確認でき、 階段を撤去した後の状況である。階段の周囲を取り 巻くように石畳が敷かれていることが分かる。

護岸が石畳の下に入っている状況である。護岸の 上に石畳が敷かれていることが分かる。



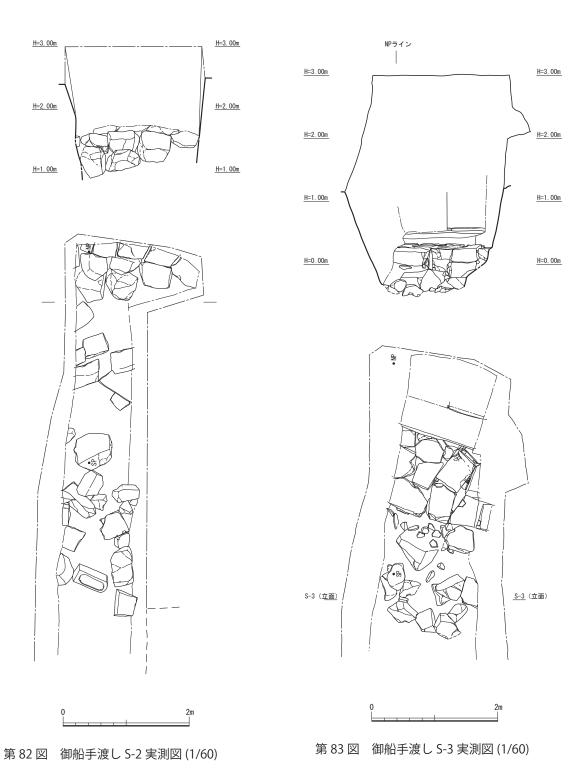
御船手渡し S-2 に伴う河床状況 (遠景)



第81図 御船手渡しS-1実測図(1/60)



御船手渡し 石敷き及び石段 (S-3)



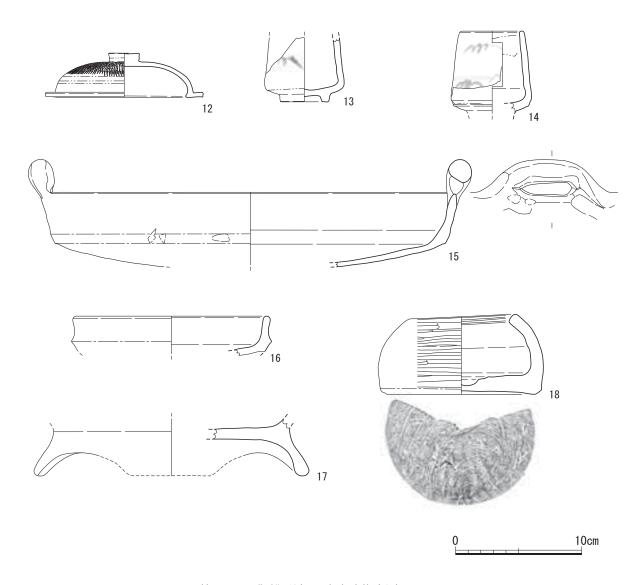
- 112 -



第84図 御船手渡し 出土遺物実測図 -1-



第85図 御船手渡し 出土遺物実測図-2-



第86図 御船手渡し 出土遺物実測図-3-

第8表 御船手渡し 陶磁器観察表

第8章	X 1E	胎于波		器観祭? 				;+ □ (aua)				
挿図 番号	番号	種別	器種	産地		上位置	部位		法量	1	ホ ハギ	H
田写					遺構	層位	티기자	口径	底径	器高	高台高	外器面
84	1	染付	広東碗	肥前系	S-3	32 層	口縁~底部	11. 35	6. 45	6. 2	1. 5	_
84	2	染付	碗	肥前	S-2 S-3	31 層	口縁~底部	12. 2	4. 7	5. 4	0. 75	_
84	3	染付	小碗	肥前	S-2 • 3	26・27 層	口縁~底部	(8. 6)	(4. 1)	4. 95	0. 45	_
84	4	染付	碗	肥前系	S-2	31 層	口縁~底部	(12. 1)	(5. 0)	6. 65	0. 95	_
84	5	色絵	小坏 (紅皿) (鉄漿)	肥前	S-2	15 層	口縁~底部	(9. 0)	(3. 8)	3. 6	0. 9	赤絵
84	6	染付	碗 (筒型)	肥前	S-3	34・35 層	口縁~底部	(7. 5)	(3. 6)	6. 2	0. 4	_
84	7	染付	碗 (筒型)	肥前	_	22 ~ 23 層	口縁~底部	(6. 3)	(3. 4)	5. 35	0. 5	_
84	8	染付	血(輪花)	肥前	粗砂	18・19 層	口縁~底部	10. 9	6. 4	2. 4	_	_
84	9	染付	Ш	肥前系	セクション	33 層 P-10	口縁~底部	(16. 1)	9. 25	1. 95	0. 2	_
84	10	色絵	Ш	肥前	S-1	10 層	高台部~底 部	_	(11. 4)	(2. 7)	0.8	_
85	11	色絵	大皿	肥前	_	20 21 層	口縁~底部	39. 8	22. 2	6. 9	0.8	_
86	12	陶器	蓋	関西系	S-2	砂層	つまみ部~	(12. 5)	_	3. 5	_	ケス゛リ ロクロナテ゛ トヒ゛カンナ
86	13	陶器	灰 おとし	関西系	S-3	40 層	体部~底部	_	3. 85	(5. 1)	0. 65	鉄絵 ケズリ
86	14	陶器	灰 おとし	関西系	S-2 • 3	32 層	口縁~体部	5. 1	_	(6. 55)	_	^{ケス゛リ} 文様

	調整	T		色調	備考	写真
外底面	内器面	内底面	胎土	釉	V用 ク	図版
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	リリーホワイト 藍色	1780 ~ 1810	20
釉の掻きとり		蛇の目釉剥ぎ	2/445/1	リリーホワイト	18c 後半~ 19c 前半 波佐見	00
付着物有	_	重ね焼痕	スノウホワイト	藍色	内面見込み蛇の目釉剥ぎ	20
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	藍白藍色	19c 前半	20
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	藍白スレートブルー	19c 前半	20
釉の掻きとり	赤絵	鉄釉	パ゜ールホワイト	藍白 焦茶 ラッカーレッド 鉄釉:枯葉色	19c 前半 内外面に粗い貫入有	20
-	_	_	スノウホワイト	藍白 藍色	18c 後半 コンニャク印判	20
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	うす水色 藍色	18c 後半	20
釉の掻きとり	_	_	スノウホワイト	藍白 紺青色	幕末~明治 1810 ~ 1840 口銹有	20
釉の掻きとり 釉剥ぎ 朱書き有	_	ハマ痕	パ゚ールホワイト	藍白藍色濃藍	19c 焼き継ぎの痕跡がある 見込みに三足ハマ痕 蛇の目凹型高台 釉剥ぎ後泥漿塗付し朱書き「外上び ぜんや三」	20
釉の掻きとり	色絵	色絵	パ゚ールホワイト	7ロスティケ レイ 濃藍、柿色、鳶 色、ろくしょう	明治有田	20
釉の掻きとり 付着物有 パザェ狼有 焼きれ゛有 墨付着	色絵器面剥離部分有	_	スノウホワイト	リリーホワイト 墨色、マホカ゛ニー、 柿色、とくさ色、 オリーフ゛ク゛リーン、 と きわ色、 ビリテ゛ィ アン、オールト゛ロース゛、 焦茶、濃藍、 金色	19c 前半 1840 ~ 1860 有田 焼き継ぎ痕有 金彩 「大明成化年製」銘 タコ唐草 ピンホールが多い	20
-	_	_	オイスター	(内) プロンス゚ (外) コーヒー プラウン	19c 内面貫入有 行平鍋の蓋	20
ケス゛リ	_	_	クリーム色	油色 ラセットゴールド	18 ~ 19c 江戸後期 貫入有	20
_	ロクロナテ゛	_	アイホ゛リホワイト	油色 ラセットゴールド	18 ~ 19c 前半 貫入有	20

第9表 御船手渡し 土器観察表

插図	₩ □	1 4 D.J	0014	÷ 1.1.	出土位	置			法量 (cm)		
挿図 番号	番号	種別	器種	産地	遺構	層位	部位	口径	底径	器高	外器面
86	15	瓦質土器	焙烙 (鍋)	肥前	S-2 · 3	26 · 27 28 · 32 層	口縁~底部	(32. 7)	(31. 0)	(8. 5)	ナデ [*] 回転ナデ [*] ケス [*] リ
86	16	土師器	焙烙?	_	S-3	32 層	口縁部	(15. 7)	_	(3. 1)	回転ナデ 回転ヘラケズリ 接合痕? 剥離?
86	17	瓦質土器	火鉢?	_	_	砂層 15 層	高台部 ~底部	_	(21.8)	(4. 5)	ヨコナテ゛
86	18	瓦質土器	火入れ?	_	S-2	_	口縁~底部	8. 5	12. 9	6. 35	ミカ゛キケス゛リ



馬門石 石段検出状況

	調整		色調		/#: **	写真
外底面	内器面	内底面	胎土	釉	備考	図版
ケス・リ?摩耗の為 不明瞭	† Ţ `	† Ţ *	(内)にぶい黄橙、 灰黄褐 (外)黒、灰黄褐	_	18c ~明治 肥前では 17c、天草では明治 把手 1 ヶ所残存 煤付着	20
_	回転ナデ	_	(内)黒、にぶい 黄褐 (外)黒	_	18 ~ 19c 煤付着	20
3377° 77°	_	ナデ ヨコナデ	(内外)にぶい黄橙	-	近世 煤付着 高台には4ヶ所の切り込みがあったと 思われる (脚は1ヶ所残存するが径からみて)	20
回転糸切り離し	ロクロナテ [*]	ロクロナテ゛	(内)にぶい黄橙(外)オリーブ黒、にぶい橙	_	近世 炭素を塗って焼く	20



御船手渡し 全景



6 竹田銭



2 浅草銭



3 吉田銭



4 松本銭



5 高田銭





7 岡山銭



8 建仁寺銭



9 沓谷銭



10 鳥越銭



11 四ッ宝銭



12 四ッ宝銭



13 耳白銭



14 丸屋銭



15 伏見手



16 重揮通無背



17 猿江銭



18 輪十鋳銭



19 虎ノ尾寛小字



20 亀戸大字



21 縮字(吉田島)





22 秋田大字 23 平野新田十万坪手 24 島屋文







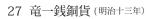
25 聖宋元宝

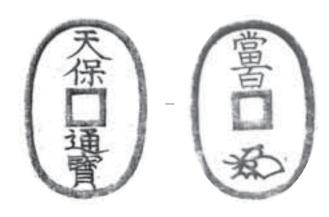


26 康熈通宝

第87図 古銭拓本① (S=1/1)







28 天保通宝

第88図 古銭拓本②(S=1/1)

第10表 古銭観察表

挿図 番号	番号	銭貨名	材質	出土地	点			法量(cn	n/g)		備考	写真 図版
番号	番写	鼓貝名	付貝	遺構	層位	外径	穿径	厚さ	幅	重量	1 順考	
87	1	寛永通宝	銅	河床部	-	2.5	0.45	0.1	0.25	3.1		18
87	2	寛永通宝	銅	河床部	-	2.5	0.6	0.1	0.25	3.6		18
87	3	寛永通宝	銅	河床部	-	2.5	0.5	0.1	0.3	3.0		18
87	4	寛永通宝	銅	河床部	-	2.5	0.5	0.1	0.25	3.7		18
87	5	寛永通宝	銅	河床部	-	2.5	0.6	0.1	0.2	3.8		18
87	6	寛永通宝	銅	河床部	-	2.5	0.55	0.1	0.25	3.5		18
87	7	寛永通宝	銅	河床部	-	_	_	16.0	_	49.3	13 枚重ね	18
87	8	寛永通宝	銅	河床部	-	2.6	0.6	0.1	0.3	3.5		18
87	9	寛永通宝	銅	河床部	-	2.45	0.5	0.1	0.25	3.0		18
87	10	寛永通宝	銅	河床部	-	-	-	3.0	-	8.9	3 枚重ね	18
87	11	寛永通宝	銅	河床部	-	2.4	0.6	0.1	0.25	2.7		18
87	12	寛永通宝	銅	S-3 直下	-	2.3	0.6	0.1	0.2	2.6		18
87	13	寛永通宝	銅	河床部	-	2.4	0.5	0.1	0.2	3.6		18
87	14	寛永通宝	銅	河床部	-	2.6	0.6	0.1	0.3	3.6		18
87	15	寛永通宝	銅	S-3	-	2.4	0.6	0.1	0.25	2.8		18
87	16	寛永通宝	銅	河床部	-	2.4	0.6	0.1	0.3	3.8		18
87	17	寛永通宝	銅	河床部	-	2.4	0.6	0.1	0.2	2.4		18
87	18	寛永通宝	銅	河床部	-	2.3	0.6	1.0	0.2	2.0		18
87	19	寛永通宝	銅	御船手渡し	-	2.3	0.6	0.1	0.25	2.1		18
87	20	寛永通宝	銅	河床部	_	2.4	0.65	0.1	0.2	3.3		18
87	21	寛永通宝	銅	河床部	-	2.3	0.7	1.0	0.2	2.3		18
87	22	寛永通宝	銅	S-3 直下	-	2.4	0.6	0.1	0.2	2.6		18
87	23	寛永通宝	銅	河床部	-	2.4	0.6	0.1	0. 25	2.6		18
87	24	寛永通宝	銅	河床部	-	2.5	0.55	0.1	0. 25	3.3		18

挿図 番号	番号	銭貨名	材質	出土地	也点			法量(c	n/g)		備考	写真 図版
番号	钳力		们貝	遺構	層位	外径	穿径	厚さ	幅	重量	1佣行	図版
87	25	聖栄元寶 (真)	銅	河床部	-	2.5	0.55	0.1	0.3	3.5		18
87	26	康熈通宝	銅	S-2 下位 S-3 下位	_	2.3	0.6	0.1	0.3	2.1		18
88	27	竜一銭 銅貨	銅	河床部	-	2.9	-	0.15	0.15	7.0	一銭	18
88	28	天保通宝	銅	河床部	-	長 5.0 短 3.4	0.6	0.15	0.3	19.6	當百(トウヒャ ク)	18

第 11 表 煙管観察表

番号	器種·器形	分類	材質	出土	地点			法量(cm/g)			備考	写真
ш 7	カロイ王 カロバン	類	内兵	遺構	層位	最大長	羅宇径	吸口径	最大高	火皿径	重量	UHI''	図版
1	煙管・雁首	IV	銅合金	河床部	_	6.2	<0.8>	_	2.0	1.6	8.0	小口破損	18
6	煙管・雁首	ш	銅合金	河床部	_	6.6	0.9	-	2.6	1.8	8.7		18
7	煙管・吸口	IV	銅合金	河床部	-	8.5	0.8	0.4	-	-	7.9	小口変形	18
8	煙管・吸口	IV	銅合金	河床部	_	6.7	1.1	0.7	_	-	11.6	小口変形	18
9	煙管・雁首	IV	銅合金	河床部	砂礫層	8.1	1.2	-	2.8	1.8	23.2	小口破損	18
10	煙管・雁首	IV	銅合金	河床部	砂礫層	<9.0>	<1.1>	_	2.7	1.6	12.2	小口破損・変形	18
11	煙管・雁首	Ш	銅合金	河床部	砂礫層	<6.7>	<0.7>	_	2.4	1.6	7.3	小口破損	18
12	煙管・雁首	IV	銅合金	河床部	砂礫層	<8.5>	<1.2>	_	2.0	1.6	10.1	小口変形	18
13	煙管・雁首	ш	銅合金	河床部	砂礫層	7.0	0.9	_	2.6	1.8	12.0	小口破損	18
14	煙管・雁首	IV	銅合金	河床部	砂礫層	5.7	0.9	_	2.5	1.6	9.2		18
15	煙管・吸口	v	銅合金	河床部	砂礫層	<5.2>	<0.9>	<0.4>	_	-	2.9	小口変形	18
16	煙管・雁首	v	銅合金	河床部	砂礫層	6.1	0.9	_	1.9	1.7	9.3		18
17	煙管・雁首	IV	銅合金	河床部	砂礫層	<5.8>	<1.2>	_	2.8	1.7	9.2	小口変形・破損	18
18	煙管・雁首	IV	銅合金	河床部	砂礫層	6.4	1.0	_	2.2	1.5	18.0		18
19	煙管・吸口	IV	銅合金	河床部	砂礫層	<9.0>	⟨1.1⟩	0.3	_	_	11.8	一部破損	18
20	煙管・雁首	?	銅合金	河床部	砂礫層	<7.8>	<1.0>	_	_	_	7.3	火皿なし	18
21	煙管・雁首	?	銅合金	河床部	砂礫層	<5.9>	0.8	_	_	-	5.3	火皿なし・変形 欠損あり	18
22	煙管・羅宇?	_	銅合金	河床部	砂礫層	<3.1>	-	-	-	-	0.9	羅宇残存	18
23	煙管・雁首	IV	銅合金	河床部	砂礫層	6.8	0.9	-	2.2	1.5	9.0		18
24	煙管·吸口	IV	銅合金	河床部	砂礫層	6.4	0.8	0.4	_	-	4.7	羅宇一部残存	18
25	煙管・吸口	V	銅合金	河床部	砂礫層	6.1	1.0	0.3	_	-	5.7	小口変形・破損	18
26	煙管・吸口	IV	銅合金	河床部	-	7.7	1.1	0.4	_	-	9.4		18
27	煙管・雁首	IV	銅合金	河床部	-	8.9	0.6	-	2.9	1.7	12.1	一部変形・破損	18
28	煙管・雁首	IV	銅合金	河床部	-	8.7	0.7	_	2.2	0.9	6.3	一部変形・破損	18

第12表 御船手渡し 煙管観察表

番号	器種·器形	分類	材質	遺構			法量(cm/g)			備考	写真図版
	HATT HATT	類	1,,,	22.117	最大長	羅宇径	吸口径	最大高	火皿径	重量	, with 3	凶版
2	煙管・吸口	v	銅合金	Tr	5.6	1.0	0.4	_	_	5.7		18
3	煙管・吸口	ш	銅合金	S-3	6.0	1.0	0.4	-	-	6.3	狭義の吸口が四角になっ ている。	18
4	煙管・吸口	V	銅合金	S-2下S-3上	5.1	1.1	0.4	-	-	5.5		18
5	煙管・吸口	IV	銅合金	S-2 前面	<5.6>	<0.9>	0.7	-	-	11.3	小口破損	18



第89図 平成16年度瓦の刻印 (S=2/3)











第90図 平成18年度瓦の刻印(S=2/3)

第 91 図 平成 20 年度瓦の刻印 (S=2/3)











第92図 平成19年度瓦の刻印(S=2/3)

第13表 古銭集計表

No	古銭の種類	枚数	No	古銭の種類	枚数	No	古銭の種類	枚数	No	古銭の種類	枚数	No	古銭の種類	枚数
1	芝銭	17	7	岡山銭	3	13	耳白銭	6	19	虎ノ尾寛小字	3	25	聖宋元宝	1
2	浅草銭	9	8	建仁寺銭	10	14	丸屋銭	4 20		亀戸大字	5	26	康熈通宝	1
3	吉田銭	24	9	沓谷銭	4	15	伏見手	33	21	縮字(青田島)	4	27	竜一銭銅貨	2
4	松本銭	8	10	鳥越銭	5	16	重揮通無背	4	22	秋田大字	4	28	天保通宝	3
5	高田銭	3	11	四ッ宝銭 (広永)	4	17	猿江銭	13	23	平野新田十万坪手	6		その他	59
6	竹田銭	5	12	四ッ宝銭 (座寛)	4	18	輪十鋳銭	7	24	島屋文	21		合 計	272

第14表 瓦観察表

							ı			
年度	番号	器種	出土地点	法	量 (cm/g)		瓦当表凸面	 瓦当裏凹面	備考	写真
			遺構	全長	全幅	厚さ				図版
16 年度	1	軒丸瓦	5 トレンチ	(2.65)	-	-	摩耗 ナデ	摩耗	瓦当面紋様は三巴紋	18
16 年度	2	軒平瓦	5 トレンチ 表土	(9.1)	(19.3)	2.2	ケス゛リーナテ゛	ケス゛リーナテ゛	平部の紋様不明	18
16 年度	3	軒桟瓦	表採	-	(16.5)	1.9	^ラナデ ナデ	ナデ゛	丸部に三巴紋 平部の紋様不明	18
16 年度	4	軒平瓦	5 トレンチ 表土	(7.2)	(7.4)	2.2	ナデ	ナデ゛	平部に九曜紋	18
18 年度	5	軒丸瓦	2 トレンチ	(8.9)	_	(1.8)	摩耗 ナデ	ナデ゛	刻印有 瓦当面文様 は九曜紋	18
20 年度	6	軒桟瓦	最下流	(14.15)	(13. 2)	3.8	一部摩耗 ^ラナデ ナデ	<u>^ラナデ</u>	丸部に九曜紋	18
20 年度	7	軒平瓦	河床部 表土	(16.7)	(17.5)	-	ナデ	ナデ	平部に九曜紋	18

(御船手渡し)

19 年度	8	軒平瓦	S-1	(12.1)	(13.2)	2.0	ナデ゛	ケス゛リーナテ゛	平部の紋様不明	20
"	9	軒平瓦	S-3	(7.7)	(17.0)	2.0	ナデ	ナデ゛	平部の紋様不明	20

第15表 瓦集計表

	1545		軒平	Ž.		<u> </u>	平瓦				軒丸			丸	瓦			
年度	種類						刻印							刻	印		その他	小計
	トレンチ名	軒平	刻印	その他	平瓦	丸	角	記号	模様	軒丸	刻印	その他	丸瓦	丸	角	紐後		
16 年度	高水敷トレンチ	_	_	_	43	2	_	_	_	_	_	_	2	_	_	_	規格外 2	49
	高水堤防 トレンチ	_	_	_	12	_	_	_	_	_	_	_	12	_	_	1	_	25
	石段部トレンチ	_	_	_	19	_	_	_	_	_	_	_	3	_	_	-	_	22
	河床部トレンチ	_	_	鬼瓦? 1	329	3	3	_	浪1	7	1	釘穴1	53	2	1	_	不明 4	422
17 年度	階段部トレンチ	-	_	_	3	-	_	_	_	_	_	_	_	_	_	-	_	3
18 年度	階段部トレンチ	_	_	_	5	_	_	_	_	_	_	_	_	_	_	-	_	5
	河床部トレンチ	_	_	_	12	_	_	_	_	2	角 1	_	3	1	1	-	_	20
	旧高水堤防	_	_	_	6	_	_	_	_	_	_	_	_	_	_	_	_	6
20 年度	トレンチ1	_	_	_	15	_	_	_	_	_	_	_	1	_	_	_	_	16
	トレンチ 2	1	_	_	54	_	2	_	_	_	_	_	9	_	_		_	66
	最下流石張	1	_	_	2	_	_	_	_	_	_	_	_	_	_	_	_	3
	河床部表採	3	_	_	-	_	_	_	_	_	_	_	_	_	_	_	_	3
小計		21	_	1	500	5	5	_	1	9	2	1	83	3	2	1	6	
合 計		22			511						12			98	5		640	

年度	種類	軒平		平瓦						車	軒丸		丸瓦				
		軒平	刻印	その他	平瓦		刻印		模様	釘穴	軒丸	その他	丸瓦	刻印		その他	合 計
	トレンチ名	T1 1	≫1⊓•		1 24	丸	角	記号	大小					丸	角		
19 年度	御船手渡し	4	-	_	239	_	3	1	3	2	1	_	7	-	_	_	260
小計		4				248					1		7		_	260	

第IV章 総括

加勢川河川改修事業に伴う船着場跡及び御船手渡し の発掘調査を実施した。その結果、両遺構の構築に係 る多くのデータを得ることができた。

これらの遺構群は、中世以降、白川、加勢川、緑川 などの河川が集中する立地条件から、良好な河港を背 景に周辺地域の物資の集散地として発展してきた「川 尻」の歴史を考える上で、中心的な施設として重要で ある。

加藤氏の肥後入国以降に河港としての整備を進めら れた川尻の状況は、中国明代の『図書篇』に肥後の有 名な港として為牙子世六(八代)、為阿麻国撤(天草)、 為昏陀(宇土)、為一国撤介烏刺(軍浦)、為開懷世利 (川尻)、為達加什(高瀬)と記され、国際中継貿易港 としてアジア諸国にも広く認識され繁栄していたこと が類推される。その後、加藤氏が改易となり、細川氏 が入国して以降、御府内の「熊本」と並び「高瀬」・「高 橋」・「八代」・「川尻」は「五ヶ町」と呼ばれ、熊本町 以外には町方支配の下、各所に町奉行が置かれた。「官 職制度考」によると、川尻町奉行は、役高五百石物頭 級の家臣が任命されており、高瀬や八代、高橋におけ る町奉行の役高二百石級と比較すると、川尻が別格の 扱いを受けていることが分かる。また、川尻町は加藤 氏の時代より地子を免除され、江戸時代を通して税制 的、経済的優遇措置がとられていた。川尻には藩の御 船手と称される船団員の組織が数十隻の軍船とともに 配置されており、天正17年10月には小西行長の天 草五人衆の一揆討滅の援軍が川尻から出兵するなど肥 後藩の軍港的な様相もなしていた。

しかし、近代、徐々に鉄道網や道路網が整備されたことにより輸送手段が、河川を利用した舟運から鉄道、自動車を利用した陸運へと変化したことや、農業用水の取水、水害防止を目的とした河川改修等の実施により緑川が流路を変え加勢川と合流しなくなったことから、加勢川が眼前を流れるようになった。このような河川流路の変化は、船着場の前を流れる河川水量を減少させ、水勢が弱まったことで河床への土砂堆積物が増加し、結果的に船の航行に大きく影響を与えることとなった。昭和17年には、六間堰から農業用水を取

水するため整備が行われたことで航路が塞がれること から、六間堰上流2kmにわたる新たな河道新設に併せ て、加勢川と緑川を結ぶ中無田閘門が建設された。

以下、船着場及び御船手渡しの調査成果をまとめる。

1、船着場の遺構について

今回の調査によって、石段の下部構造が想像以上に 堅固な構造であることが判明した。河川の氾濫の度に、 構築物の維持管理のための補修や改修が繰り返される ことから、構築頭初の状態が保持されにくい。このよ うな環境の中で、整地面や胴木などが確認できたこと は大きな成果といえよう。

また、大正期の高水敷堤防石積みや、明治期の橋台 石積みなどの遺構についても、近代の石積み構築技術 を知る上で重要であり、貴重な文化的構造物である。

これらの船着場跡は、構築後の経年変化に伴う維持 補修や河川の氾濫の度に石段等の修築が繰り返され る

以下、年度ごとに行った各地点の調査成果をまとめ る

(1) 高水敷及び高水敷堤防、陸閘部

平成 16 年度に実施した高水敷におけるトレンチ調査によって、III層とV層の2面で硬化面を検出した。間層であるIV層で検出した遺構(SK-1)から17世紀末~18世紀前半の肥前染付(H16-1)が出土したことから、III層の堆積はそれ以降と考えられる。近世の陶磁器はV、VI層でも出土したが、VII層には近世の遺物は含まれない。VII層上面で検出された遺構(SK-3)では、13世紀末~14世紀初の土師坏、大坏、小皿が出土している。これらは、石段構築以前の川尻を知る重要な資料であり、VII層の形成はそれ以前であると考えられる。

堤防におけるトレンチ調査では、VII層から 16 世紀末~17 世紀初の丸瓦や平瓦が出土したことから、同層形成の下限は 16 世紀末~17 世紀初と考えられる。

(2) 石段

石段の調査は、平成 16~18年度及び 20年度に 実施した。調査において、石段の裏込め石の隙間土(A 層)から17世紀末~19世紀前半の陶磁器が出土した。 しかし、同層には現代の瓶片やプラスチック片も含まれていることから、戦後、修築されたものと考えられる。

また、最後に修築された時期は、現在の地形へと推移する以前の昭和 $30 \sim 40$ 年代である可能性が高い。このことは平成 17 年度の調査において、石段部トレンチの杭周りの裏込め石の隙間土(A層)から現代の遺物が出土したことから裏付けられた(註 1)。また、平成 20 年度トレンチ 20 12,13 層からも現代の遺物(註 2)が出土したことから、石段は昭和 $30 \sim 50$ 年代に修築された蓋然性が高いことが指摘できる。

石段下部には、城郭同様に石段の荷重を分散させるために胴木が組まれ、土留め材の設置や粗朶も確認された。石段本体の根石部分で、トレンチより上流と下流ではその構造が異なり、上流側では1段、下流側は2段構造である。下流部分は、根石下部が不安定であったものと考えられる。根石からは慶長期まで遡るような矢穴跡とともに、石段で見られるような幅7~8cm程度の矢穴跡も確認されている。これらのことから根石についても再構築された可能性が考えられる。

また、14段目裏側の充填土には昭和の遺物が混入 しており、現在の14段目の構築は比較的新しいもの であると類推されるが、石段が当初13段であったと する物的証拠は確認できなかった。

石段構築の基面は、下段・中段・上段の3段構成で 階段状に整形される。基面は、地山の上に堆積する遺物包含層や、整地土と考えられる白色粘土、人為的な盛土を切り込むように整形され、最上位の盛土層からは明代の青花や青磁・白磁が出土している。杭や粗朶の設置は、基面整形後に杭が設置され、その後、粗朶の充填、竹類による柵の設置、粗朶層の形成などの土留め、土滑り防止処理が施されていることが確認された。これらの下部構造物の設置は、土層堆積状況から基面整形直後と考えられる。

上段部のC層の堆積状況から、修築が数度行われた可能性が窺える。石段1~3段目の背後には裏込め石が充填され、19世紀前半~幕末の陶磁器が出土しているため、低段位の石段も構築当初のものではない蓋然性が高い。

(3) 河床

平成17年度の河床におけるトレンチ調査では、多くの陶磁器が出土した。旧河床土として形成された砂礫層にも、比較的新しい遺物が含まれていることから、この砂礫層の堆積はごく最近のものと考えられる。

また、同トレンチでは、粗朶や杭などの構造物は確認されなかったが、トレンチより下流域では地山が確認されず、杭や粗朶、竹柵などが確認された。このことは、地山よりも地盤が不安定であることから、確認された構造物はその補強のための措置と考えられる。河床調査とともに、根石の構造を確認した。上流側の根石は、基本的に1段であり、その下位に間詰石が多くみられる。下流側の根石は2段積みであり、その前面には杭や竹柵による処置が施され、根石前面や下部には粗朶や打設された杭などが確認された。確認された根石からは慶長期まで遡るような矢穴跡とともに、石段でみられるような矢穴幅7~8㎜程度の矢穴跡も確認されていることから、根石についても再構築された可能性が高い。

平成20年度の調査では、これまでの調査成果と同様に、地山が階段状に整形されている状況を確認した。

また、「ガタ土」層と竹、粗朶、木杭を用いた土留 状遺構を確認した。使用されている木杭の樹種は、松 と樹皮がついたままの桜である。

土留状遺構の盛土中から木簡が出土した。自然堆積層の上に載る「ガタ土」の盛土層の形成時期は、調査の開始段階から 16世紀後半~17世紀頃と想定されていたが、今回、土留状遺構の中から加藤期の内容を示す文字資料である木簡が出土したことで裏付けられた。土留状遺構は、土層の状況から自然堆積層(地山)を整形した直後に構築されており、石段そのものが構築された時期を示すものと判断できる。

木簡について(註3)

出土した木簡は、長さ 14mm、幅 20mmである。上部は 7mm程度の切れ込みを左右対称に有し、紐を掛けて使用したと推定できる。また、下部は三角形状に細く削られており、何かに刺して使用したものと考えられる。

表裏面に見られる墨書は、右のとおりである。 第一面の「矢部」は、現在の上益城郡山都町矢部で あり、同地域にある柚木地区を指していると推定される。「組」の文字は、加藤氏時代の行政区画「郷組制」を示している。加藤氏の藩内統治は「組」と呼ばれた単位を地域の枠組みとする。この『組』は、150ほどあったとされ、その後、細川氏入国後に解体され、寛永12年ごろ「手永制」へと移行した。

第二面に「米三斗入」とあることから、米が三斗入った物に付けられた荷札であることが分かる。一般的には、一俵は三斗五升であるが、山間部にあっては運搬の労力を考慮して三斗とされていた。

以上のことから、この木簡使用の時期は小西行長領 矢部郡が、関ヶ原の戦い以後、加藤清正領となる慶長 5 (1600) 年から、細川氏の行政区画手永制が施行 された寛永 12 (1635) 年頃までに限定されることに なる。

この木簡が石段遺構の最下層から出土したことで、 川尻船着場の基礎構築時期は、慶長5年~寛永12年 頃までに比定されるものと推定される。

(4) 橋台部

石段の東側に存在する橋台は、南北に横断する三角往還の一部であり、三角開港前後の明治20年代の構築と考えられる。連接ブロックの撤去後、人力により検出作業を行い、橋台の全面に石積みを取り巻くように石敷が検出された。石材は長軸1.2 m、短軸0.6 m程度の方形石材と、その中央に位置する長軸0.6 mの石材が橋台基礎の基本となり、周囲の石敷がその控えとなる。基礎となる石材には、橋柱を設置するための穴が半円形、方形に掘り込まれている。周囲の石畳は東西方向に3~4列を基本とし、整然と敷かれている。確認した矢穴は幅8~9 cmほどであった。

石敷の西側には、一連の構造物と考えられる板材を 検出した。おそらく、土留材であると考えられる。

(5) 船繋ぎ石

高水敷トレンチで確認したⅢ層上面において、船繋ぎ石の周囲に根石を検出した。また、部分的にⅢ層を掘削したところ、IV層の上面で掘り込み面を確認した。現状の船繋ぎ石は東側にやや傾いており、検出した根石と掘り込みは船繋ぎ石の東側に認められた。調査は、根石とそれに付随する掘り込みの確認で終了した。

(6) 煉瓦構造物

確認された便槽構造は陶器甕の設置によるもので、 ともに初期の便槽甕廃棄後に嵩上げされた状態で新た に便槽甕を設置している構造である。

甕底部は穿孔を有せず、汲み取り式のトイレである。 煉瓦構造物中央部及び西側の上位、下位の便槽甕では 時期差が確認される。しかし、煉瓦構造物中央部と西 側の上位、下位便槽の使用時期はそれぞれ重なるもの と考えられる。

2、御船手渡し

平成 19 年度の調査において、御船手渡しの石畳の下からさらに 2 段の石畳が確認された。調査結果から、最上部の石畳の下から空き缶、コンクリートが検出されたことから、最上部の石畳は、戦後に建設もしくは改修されたと考えられる。平成 20 年度の調査においても石畳が、明治後期~大正前期の護岸の改修後に設置されたものであることが確認された。

註1 平成17年度の調査において、石段部トレンチの杭周りの裏込め石の隙間土(A層)から出土した熊本産菓子「松風」の包装紙により裏付けられた。出土した商標「松風」は菊池市の株式会社正観寺丸宝社製のもので、昭和36~37年代に使用されていたものである。

註2 平成20年度トレンチ2の12,13層から出土したビール瓶の破片は、昭和31(1956)年~46(1971)年まで製造が行われていたものである。

註3 木簡についての所見は、平成20年度の調査成果の中で(株)九文研花岡氏によりまとめられたものを記載した。

【参考文献】

「古城考」『肥後文献叢書第一巻』

「官職制度考」『肥後文献叢書第一巻』

『明治以前 日本土木史』土木学会編 1966

『肥後国志』後藤是山編 1971

『肥後川尻町史』川尻町編纂 1935

『川尻旧藩時代船着場調査報告書』熊本市教育委員会 1982

『熊本県歴史の道調査―緑川水運―』熊本県文化財調査報告第 107 集 熊本県教育委員会 1989

大橋康二 『肥前陶磁』 ニュー・サイエンス社 1989

大橋康二 『世界をリードした磁器窯・肥前窯』 新泉社 2004

『松井文庫の精華 ―その歴史と美術―』 八代市立博物館未来の森ミュージアム 1991

平成 12 年度秋季特別展覧会 『 八代焼 伝統の技と美』 八代市立博物館未来の森ミュージアム 2000

『松井文庫名品展(Ⅱ)松井文庫の陶磁器』 熊本県立美術館 1989

『増補 やきもの辞典』 平凡社 2000

『世界陶磁全集 7 江戸(二)』 小学館 1980

『世界陶磁全集 14 明』 小学館 1976

『肥前陶磁の系譜』 名著出版 1974

『野趣の美 古唐津の流れ 桃山から江戸』 読売新聞社 1993

『田中丸コレクション 九州古陶磁名品展』表千家北山会館 2006

『和様の意匠 古伊万里展』 朝日新聞社 1992

『白磁の美 ―中国・朝鮮・日本・現代―』 佐賀県立九州陶磁文化館 1986

『日本の青磁 ―近世から現代まで―』 佐賀県立九州陶磁文化館 1989

『肥前陶磁の名品 一樹木草花の文様を見る―』 佐賀県立九州陶磁文化館 1987

『世界の染付展』 佐賀県立九州陶磁文化館 1993

『よみがえる江戸の華 一くらしのなかのやきもの一』 佐賀県立九州陶磁文化館 1994

『新熊本市史 別編 第1巻 絵図・地図』 新熊本市史編纂委員会 1993

『新熊本市史 通史編 第3巻 近世 I 』 新熊本市史編纂委員会 1996

『新熊本市史 通史編 第4巻 近世Ⅱ』 新熊本市史編纂委員会 1996

『新熊本市史 通史編 第2巻 中世』 新熊本市史編纂委員会 1998

『御幸木部古屋敷遺跡 I 』 熊本県文化財調査報告第 129 集 熊本県教育委員会 1993

『概説中世の土器・陶磁器』 中世土器研究会 真陽社 1995

『図説 江戸考古学研究事典』 江戸遺跡研究会 柏書房 2001

『御幸木部遺跡群』 熊本県文化財調査報告第 233 集 熊本県教育委員会 2006

『新熊本市史 史料編 第1巻 考古資料』 新熊本市史編纂委員会 1996

『熊本市埋蔵文化財調査年報』第6号 熊本市教育委員会 2004

写 真 図 版

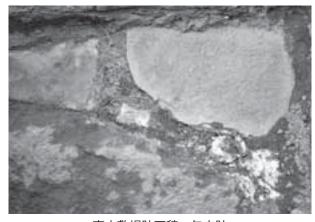




高水敷堤防 土層断面



高水敷トレンチ 堤防検出状況



高水敷堤防石積 矢穴跡



高水敷トレンチ VII層上面検出状況



高水敷トレンチ 西側土層断面



高水敷トレンチ VII層出土火輪



高水敷トレンチ 遺物出土状況



石段撤去状況



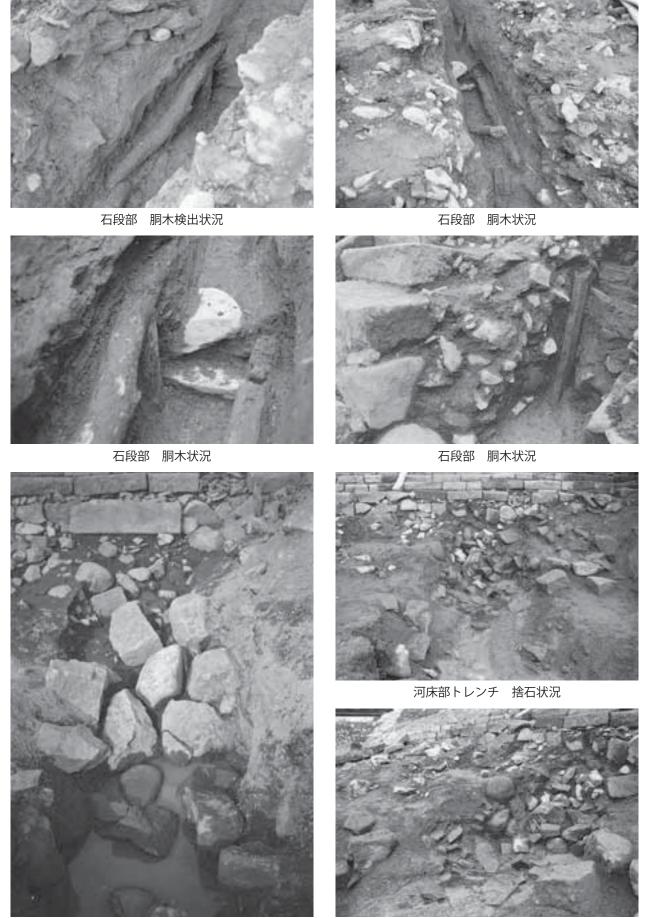
石段撤去後 遺物出土状況



石段部 下段裏込め状況



石段部 土層断面



河床部トレンチ 土層断面 河床部トレンチ 土層断面



河床調査 河床全景 南から



河床トレンチ 遺物出土状況



河床トレンチ 遺物出土状況



河床調査 木片・粗朶検査状況



船繋ぎ石 根固の石検出状況



陸閘部トレンチ 検出状況



橋台部 基礎石状況



橋台部 板材状況



石段撤去完了状況 南東から



石段部トレンチ 下段部土層断面 東から



石段部トレンチ土留め材(木杭・竹)出土状況



石段部トレンチ 粗朶検出状況 南から



根石状況 南東から



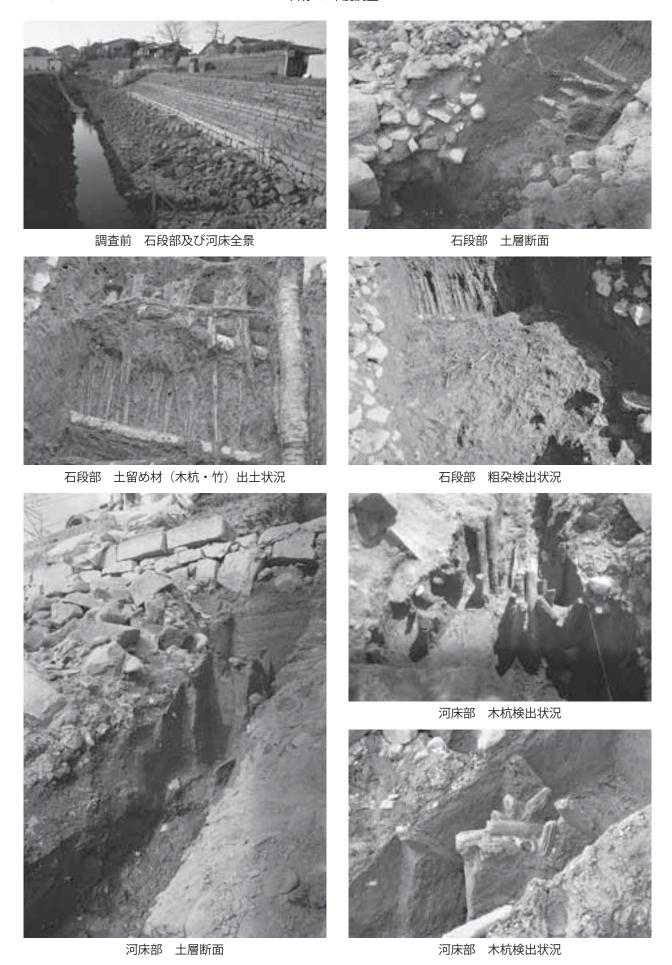
河床トレンチ 土層断面状況



河床部 杭検出状況



河床部 竹類検出状況 南から







煉瓦構造物 右側面



煉瓦構造物 左側面



煉瓦構造物 基礎状況



中央部上位便槽検出状況



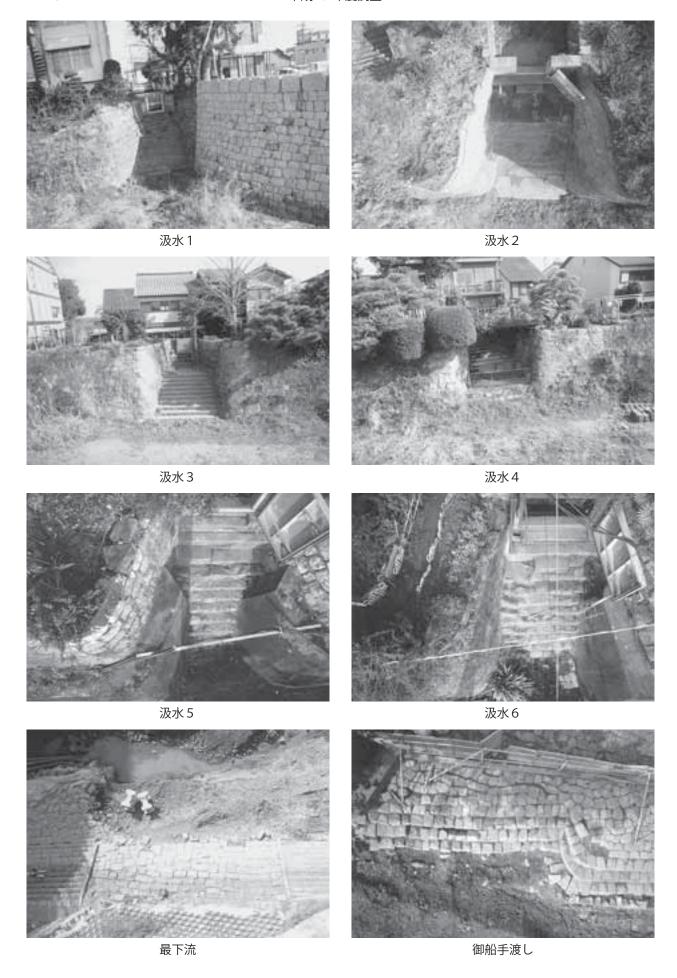
中央部下位便槽検出状況

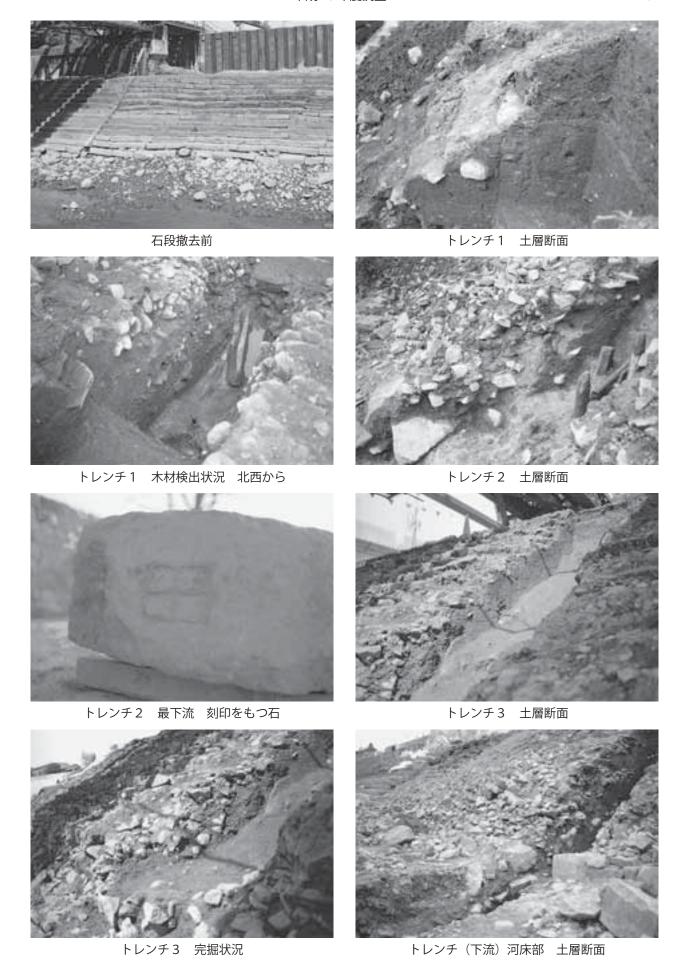


西側下位便槽の廃棄状況



西側下位便槽完掘状況









川尻船着場 平成 16 年度出土遺物





川尻船着場 平成 16 年度出土遺物





川尻船着場 平成 16 年度出土遺物

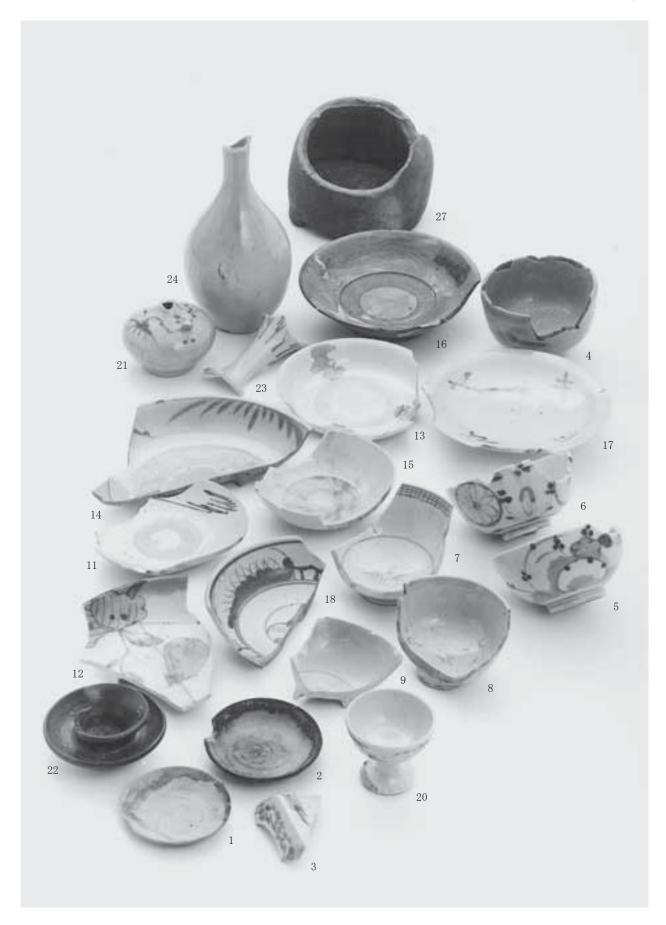




川尻船着場 平成 16 年度出土遺物



川尻船着場 平成 18 年度出土遺物



川尻船着場 平成 18 年度出土遺物



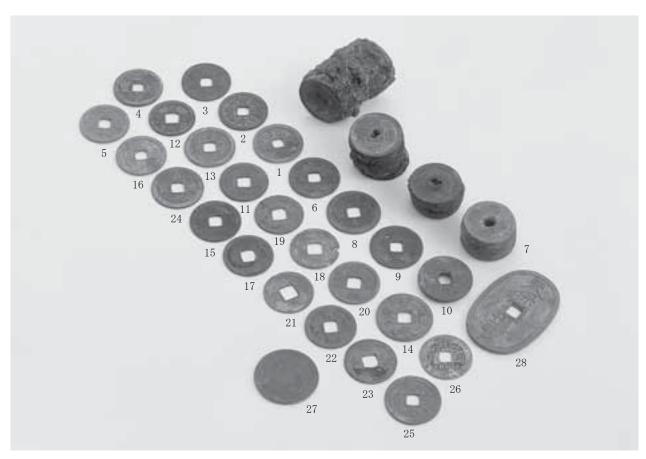
(1) 川尻船着場 平成 16 年度 えびす土人形



(2) 川尻船着場 平成 17 年度 碗



(3) 川尻船着場 平成 20 年度出土遺物



古銭



煙管、鉄製品



川尻船着場 平成 16 年度 (No. 1) 軒丸瓦・(No. 2. No. 4) 軒平瓦・(No. 3) 軒桟瓦 川尻船着場 平成 18 年度 (No. 5) 軒丸瓦

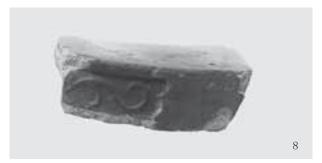
川尻船着場 平成 20 年度 (No. 6) 軒桟瓦・(No. 7) 軒平瓦



川尻船着場 -平成20年度調査- 木 簡







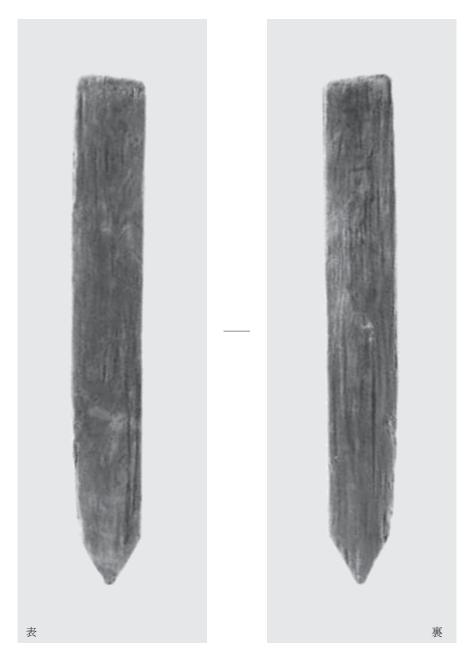
平成 19 年度 軒平瓦



平成 19 年度 軒平瓦



平成 19 年度出土遺物



御船手渡し -平成19年度調査- 木 簡

報告書抄録

ふりがな	かわしりふなつきばあと
書名	川尻船着場跡
副書名	加勢川河川改修事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻 次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第 282 集
編著者名	村﨑孝宏
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒 862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18-1
発行年月日	2013年3月31日

フリガナ	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
所収遺跡名		市町村	遺跡番号	コレ不幸	東 程	加重剂间	- 神王田倶	- 神里原囚
カワシリフナツキハ・アト 川尻船着場跡 オフナテワタシ 御船手渡し	熊本市南区 川尻4丁目 地内	43104	528	32度 44分 17秒	130度 40分 45秒	H16 年度 ~ H21 年度	985m²	加勢川河川改修事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
川尻船着場跡 御船手渡し	川港	中,近世	船繋ぎ石 船着場石段 煉瓦造公衆トイレ	土師質土器 陶磁器 瓦質土器 軒丸瓦,軒平瓦 平瓦 銭貨 木杭 木簡	

熊本県文化財調査報告第 282 集

川尻船着場跡

発行年月日 平成25年3月31日

編集 熊本県教育委員会

862-8609 熊本県熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

印 刷 株式会社 協和印刷

862-0941 熊本県熊本市中央区出水 5 丁目 11 番 31 号

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 282 集を底本として作成しました。 閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用 してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用 方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名: 川尻船着場跡

発行:熊本県教育委員会

〒862-8609 熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号

電話: 096-383-1111

URL: http://www.pref.kumamoto.jp/

電子書籍制作日:2015年12月8日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しく は熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会

URL: http://www.kumamoto-bunho.jp/